川柳塔

創刊大正十三年　通巻一一二一号

No.1121

十月号

日川協加盟

主幹・理事長の選任について

川柳塔誌令和２年７月号にて社告案内致しました主幹・理事長の選任につき、７月１日から10日までに川柳塔社事務所に届きました立候補届は無く「主幹・理事長の選任に関する規則」の第３項により、主幹の再任、理事長の再任が下記の通りとなりました事を証します。

主　幹（再任）　小　島　蘭　幸

理事長（再任）　新　家　完　司

立会人
会計監査　初　代　正　彦
会計監査　西　村　哲　夫

新家完司川柳集（7）

令　和　元　年

Ａ５判・１３７頁・ソフトカバー

ご注文は、1,000円＋84円切手３枚（税・送料）を下記宛にお送りください。

〒689－2303 鳥取県東伯郡琴浦町徳万597　新家完司

歴史博物館

小島蘭幸

平成22年11月号、川柳塔の巻頭言のタイトルは、「おのみち文学室にて」でした。私が川柳塔社の主幹になって初めて書いた巻頭言です。あれから10年、今年の3月末、コロナ禍の中ひっそりと文学室は閉館となりました。尾道市役所に問い合わせると、文学室は借りていたもので所有者に返却して、現在は売却され住居になっているとのことでした。「麻生路郎の資料は現在どうなっていますか」と聞くと、歴史博物館の倉庫に大切に保管していますとのことでした。さらに「今後、展示の予定はありますか」と聞くと、今は白紙の状態ですが、将来的には、特別展示という形で開催したいとのことでした。

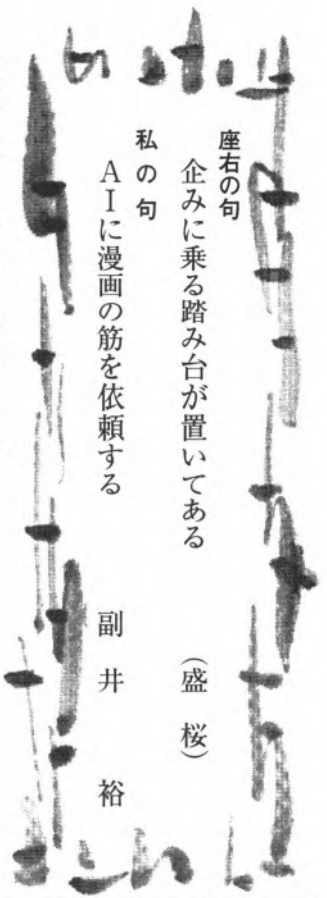
さて、おのみち文学室には、尾道出身の文学者、作家、林芙美子、行友李風、高垣眸、横山美智子、歌人、山下陸奥、川柳作家、麻生路郎の資料が常時展示されていました。麻生路郎特別展は、毎年7月～8月に開催されていました。その時の展示の様子を書きますので、おのみち文学室を想像しながら読んでいただくと嬉しいです。展示室に入ると一番に目に飛び込んでくるのが路郎が着ていた川柳浴衣です。「眼だろうか眼だろうか」「大空の」「どうあろう」の字が読めます。となりには、路郎の写真と略歴が飾ってあります。

真ん中の大きなガラスケースの中には、浴衣姿でくつろいでおられる路郎ご夫妻の写真、タイトル「妻を語る」の書物、椅子に座っているロンドン君の南画、ガラス製文鎮、折りたたみの用紙にずらりと揮毫された路郎作品、扇、湯呑み、ぐい飲みの一つ一つにも路郎作品が揮毫されています。川柳雑誌をはじめ多くの路郎の書物も展示されています。

還暦のまだこれからという姿　路郎
だしぬけに鐘が鳴るのも旅のこと　路郎

色紙と短冊に揮毫された作品です。

歴史博物館で麻生路郎特別展が開催されたら一番に駆けつけたいと思います。それには一日も早くコロナが収束しなければなりません。



座右の句

企みに乗る踏み台が置いてある　（盛桜）

私の句

AIに漫画の筋を依頼する　副井裕

川柳塔　十月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「スポーツクライミング」

■巻頭言　歴史博物館……小島蘭幸…(1)
川柳塔まつり懐古……福士慕情…(2)
川柳塔（同人吟）……小島蘭幸選…(4)
川柳塔の川柳讃歌⑱……木津川計…(38)
橘高薫風句抄……(39)
自選集……(40)
句集の森……小林一夫…(43)
温故知新……(43)
水煙抄……西出楓楽選…(44)
英語 de Senryu ⑯……吉村侑久代…(63)
誹風柳多留一三篇研究 2……(64)
愛染帖……新家完司選…(66)
檸檬抄「エール」……石橋芳山・古今堂蕉子共選…(70)

川柳塔まつり懐古

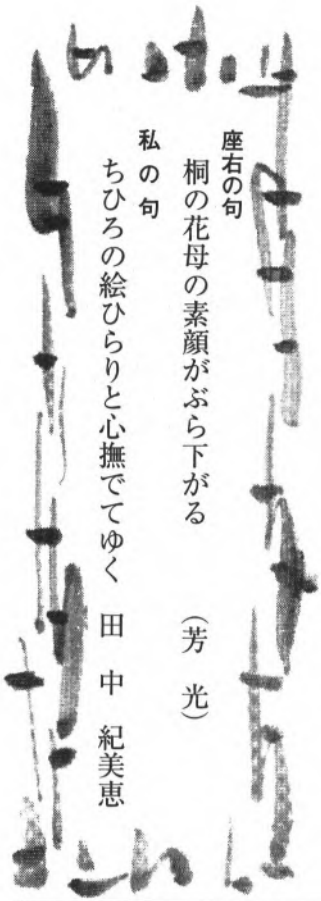
福士慕情

川柳塔5月号に第26回川柳塔まつりの案内が掲載されていた。今年も懐かしい方々にお会い出来ると思い、作句にとりかかろうとしていた矢先、誌上大会に変更いたしますと8月号に載っている。

新型コロナウイルス感染症が拡大し、ほとんど会合は中止、または縮小となり、世界中が目に見えないウイルスと戦っている。来年へ延期された東京パラリンピック・オリンピックの開催もこの先危ぶまれる。

私が初めて川柳塔まつりに参加したのは第5回からである。川柳を初めて3年目の秋に波多野五楽庵師に誘われ、一行6名の参加であった。全国大会規模の川柳塔まつりと聞いて、二の足を踏んでいた時に五楽庵師が、「句が抜ける抜けないは別として川柳塔まつりの雰囲気を味わって欲しい、そして、多くの輪の中に入って仲間と交流して欲しい」と言われ、

一路集（「まつり」……山崎武彦選…(74)
「困　る」……田中天翔選…(75)
初歩教室「パラパラ」……居谷真理子…(76)
川柳塔鑑賞……吉村久仁雄…(78)
水煙抄鑑賞……稲見則彦…(80)
せんりゅう飛行船⑱……新家完司…(81)
『麻生路郎読本』余滴(60)……棗原道夫…(82)
インスピレーション・ナビ　印象吟……大西泰世…(84)
八月本社誌上句会……(86)
■エッセイ（星の王子さま名言集）……水野黒兎…(95)
柳界展望……(96)
各地柳壇（佳句地十選／木田比呂朗・倉益　一瑤）……(97)
十月各地句会案内……(106)
■編集後記（ひとこと／西村哲夫）……朱夏・勝弘…(108)



座右の句
桐の花母の素顔がぶら下がる　（芳　光）

私の句
ちひろの絵ひらりと心撫でてゆく　田　中　紀美恵

小寺花峯さんが選者ということもあり、応援のためにも参加することとなった。

２４０名の参加者で会場の熱気は最高潮に達し、私たちの句会では聞くことのない呼名が厳かにまたユーモラスに飛び交い、五楽庵師を初め一行の呼名も負けてはいなかった。私は当然全没だと思っていたところへ「時計」の題で「腹時計一本杉と昼にする」が人の句に抜かれ、しどろもどろの呼名であった。

懇親宴では平成９年川柳塔みちのく10周年記念句会に来弘された方々との歓談、宴会を盛り上げるカラオケ等、プロ並みの歌唱に聞き入ったものである。

第18回から第22回まで事情があって参加出来なかったが、第23回からまた参加出来るようになった。

塔まつりに参加して一番の思いは、仲間と呼べる友人が増えたことである。中でも生涯の友と自負していた鶴田遠野さんとの出会いであった。２０１８年10月、私より若い彼が旅立ってしまった。享年七十二だった。

大阪への足が年々遠く感じられている。

汗流す私の謎がとけてくる
潤吉の世界ふる里温いまま
遊ばない外出しない息しない
惨敗でいつかトンネル抜けている
許すこと覚えて僕が薄くなる
人間に生まれメリットありますか

岸和田市　岩佐ダン吉

原爆忌ガラス細工の平和論
墓まいり今年は居ない帰省客
江戸切子夫と最後の旅土産
倖せは普通に暮らす事なんだ
巣ごもりでいつか世間に疎くなる
諦めの方へ傾く旅プラン

東かがわ市　川崎ひかり

気の毒な人だ皮肉がお上手だ
これも義理マスクの街へマスクして
二杯目のジョッキは明日のために飲む

橿原市　居谷真理子

小島蘭幸選

図書館へ夏の落ち葉を踏みながら
七十路をススキの光まといつつ
もう二十日逢わないままの熱帯夜

神戸市　能勢利子

エアコンを切って見ている甲子園
いい人になるのは止めて皺消える
百歳の祝い邪魔したコロナ菌
コロナ禍で家族揃って夕ごはん
テイクアウト今日のお店は星三つ
たんぽぽの綿毛必ず吹く夫

大阪市　栃尾奏子

覚悟せよ女が赤を纏うとき
吐息まで描き写されて秋の画布
愚かだが素晴らしきもの愛は戯画
初恋の精一杯の斜向かい
美しくなって知らないフリをする
さり気なく優しくサヨナラの布石

犬山市　金子美千代

一尾を二回に分けるうなぎ丼
口さみし旧友に電話をかけてみる
何もない昨日の続き良しとする
帰省しなくていいよと先に言ってやり
器量良しでなくても美味い自家野菜
メルヘンチックなカーテンにして舞ってみる

松江市　石橋芳山

結び目の綻び山陰が見える
コンビニにずらりとくるぶしが並ぶ
居酒屋のバックヤードに伸びる海
肉を焼く方程式がまだ解けぬ
拾てられたジャガイモ同列に私
逢えるとは思っていないグーとチョキ

大阪市　平井美智子

オンライン出来ない人は手を挙げて
沈黙の長さが抱いている答
ばあちゃんが信じるイケメンの詐欺師
抱きしめていよう家族という絆
裏側も味方ですよと言う豆腐
ゆっくりでよいと真夏の空が言う

大阪市　谷口義

恐れ入りますが八月十五日です
金曜日になってみないと分からない
お天気の良い日に泣いておきました
七足五百円の靴下を履いている
私も国を案じているのです
寂しいことはないが草が生えている

倉吉市　牧野芳光

どのように語れど扉開かない
火になるか水になるのか問われている
正面にコロナを見据え退かぬ
目薬を差して日本を直視する
胸の中には森もある海もある
ごほうびの人生毎日が宝

桜井市　安土理恵

何とかなる何とかなるとバスのりば
泣かないと決めて思い出切り売りに
この先のわたしに要らぬヒカリモノ
ピアスの穴もいつか忘れてしまうでしょ
結婚指輪だけは死んでもはずさない
へんな親でごめんねだんご三兄弟

米子市　竹村紀の治

棚経に父母妻と久し振り
政治家のスピード感が分からない
隔離には慣れております独り者
忖度か帰省止めるというメール
無精ヒゲ隠すマスクの有難さ
八月のあの日十歳だった僕

長岡京市　山田葉子

自宅から見る夕焼けも美しい
夕焼け雲キミの笑顔になってきた
着メロが流れたとたん涙湧く
当たり前のこと気付かせてくれたコロナ
立ち止まり違う景色を見てしまう
家壊す音があちこちから響く

河内長野市　山岡冨美子

コロナ禍に猛暑とまどう着地点
積ん読へ叩きを掛けている真昼
手花火か近くの子等の燥ぎ声
九十九折れ老いの歩幅はマイペース
足許をいまも時々確かめる
花柄でせめてマスクを華やかに

西宮市　亀岡哲子

嫌なことは書かぬつもりの晴日記
九谷焼に盛るコンビニのお惣菜
スマートになって退院した姉妹
押入れの奥でくすんでいた家訓
ゴミに出す思い出ポロリまたポロリ
最後まで走る背中を子に見せる

豊中市　水野黒兎

湯豆腐を食べ終えてから寺巡り
アナログが似合う昭和の掛け時計
コロナ禍に再読つづく文庫本
風に飛ぶことも一興夏帽子
ソーシャルディスタンス夫婦の間だけ根づく
梅雨明けのけじめ雷鳴稲光り

藤井寺市　鈴木いさお

小うるさい観音様と暮らしてる
この世でのドラマこの世で幕を引く
墓洗う母の肩揉みしたように
名画座があったね皆とよく来たね
ピアノよりオルガン似合う木の学舎
遅れるではないぞ早まるでもないぞ

寝屋川市　伊達郁夫

折り曲げたページに深い意味がある
夏帽子乙女が熟れた色で咲く
ステイホーム孫と童話を読んでいる
念仏を呟く歳になりました
老い二人喧嘩の種を干してます
故郷に帰る帽子を買い替える

松山市　栗田忠士

ヒグラシよそんなに日暮れ悲しいか
鳩尾の辺りで留める愚痴小言
コロナ菌の中をくぐっていく猛暑
住職もオンラインする盆供養
死ねないねマスクで葬儀ディスタンス
取りあえずそこに置くからまた増える

唐津市　坂本蜂朗

雑草の仲間か藪蚊小煩い
マスクした女性はみんな美しい
歩数計付け買物を指示される
妻の指示仰ぎ出直すのがベスト
生きてさえおればお酒に手が届く

唐津市　山口高明

新緑に染まる古刹の地蔵院
アララと箸から逃げる流し麺
長老の意見へ若さ耳貸さず
宣伝の頻尿糖尿すぐ治る
石段を数えて登る癖がつき

熊本県　岩切康子

コロナ戦幾月続く起きられぬ
バンコでの怪談大人懐かしい
日々猛暑氷食うのが癖になる
歯科通い八月中を予定して
祝靴ソフトなタッチ心地よい

熊本市　杉野羅天

雲海へ阿蘇・祖母・九重ニョキと立ち
白髪増えロマンスグレーなる歪み
阿蘇薄暮夕菅夏のお見送り
前線停滞あっという間の水の刑
コロナ来て医の倫理すら成り立たぬ

北九州市　小松紀子

休息期時は気ままで風まかせ
庭に来る雀とはなすパンをやる
ありがたい年金暮し身の丈で
私色墓のプレートにありがとう
かけ声で今日という日が始動する

札幌市　小沢淳

共通の悩みがあって橋架かる
生なので天地無用と書いておく
馬鹿になり切れる男の底力
責任は取らない手柄一人占め
開拓の三代目なり素手素足

男鹿市　伊藤のぶよし

ガマン限界昭和の空気吸っている
風ぐるま向かい風なら上機嫌
介護にそなえスクワット欠かさない
人に悩み人に癒され今日生きる
茜空空耳だろか父母の声

弘前市　稲見則彦

道草の案内役を買って出る
コロナ退治大魔人ならどうだろう
爺ちゃんのコピーのコピー誰でしょう
鼠捕り捕まる人は鼠です
先生のお気に入りではなかったの

弘前市　今　愁女

独り居の自粛寂しさ募ります
公園に集う犬の散歩もマスク要り
ねぶた祭りもコロナに乗っ取られ
軒先に朝顔張った家涼し
暑さに負けるなと彼岸花萌ゆ

塩竈市　木田比呂朗

マスク越し歯切れの悪さ輪をかける
ウイルス禍緩む我が家の箍を締め
昨夜を語るポケットの領収書
アドリブのつもりが不覚でた本音
アベマスク七十五日過ぎたかも

さいたま市　星野育子

駆け抜けた七十五年の歳月
意味不明雑種文化のカタカナ語
背中押す人が居なくて迷い道
配布中止で総理のおしゃれマスク
静かで最適で睡魔の図書館

上尾市　中村伸子

コロナ禍も月下美人は蕾持つ
免疫力モーツァルトに頼ります
踏み込まぬ玄関先で終る仲
あのベンチまでと頑張る散歩道
鯖読まず真実もまた言わぬまま

朝霞市　前田洋子

電車バス忘れるくらい乗ってない
外出は旅番組でガマンする
通院日きづいた猫を先ず宥め
注射すみ猫は大きい息もらす
老猫のためのクーラー一昼夜

越谷市　久保田千代

道草を無駄にはしない処世術
爪派手に塗って私を目立たせる
自信喪失鏡覗いた朝の顔
健康でありさえすれば慾もなし
温かい気持にさせるあなたの笑顔

東京都　川本真理子

天の怒りと思いたくはないけれど
正体が分かれば徐々に受け入れる
庭の草君の勝ちだと認めよう
恩師の庭夾竹桃の花は白
宙見れば子ども時代へ次の世へ

八王子市　川名洋子

ステイホームペットが欲しい独り居に
三日坊主でしたアンチエイジング
地球への打ち水夕立がほしい
じりじりと迫るコロナの包囲網
毒見えぬ夾竹桃の花可憐

横浜市　川島良子

恋という魔法グングン攻めてくる
アマビエの像を彫ってる自粛中
試着室と家の鏡が合致せず
無縁仏にも花を供える盆の入り
笑顔という仮面の下の深い闇

横浜市　菊地政勝

帰宅してマスク外すと生き返る
帰省さえ望みかなわぬ世にされる
医者よりも心得てます酒の量
いいことが沢山あった笑い皺
首都圏でしてはならない深呼吸

鈴鹿市　小河柳女

星月夜あの世この世を往き来する
ころりと転ぶ雑草と目をあわす
家を背に女働く重さかな
低いトーンで楽器奏でるわが家だ
底辺で土とたわむれ草とたわむれ

富山市　島ひかる

子や孫に急かされて行く墓掃除
三食を作って食べるのが仕事
脱ぎ捨ての夫の靴をまた揃え
十万円夫の口座から出ない
さあ五時になった相撲を見る時間

可児市　板山まみ子

食料の調達だけに乗る車
二ヶ月に一度で給油こと足れり
年賀状書かぬ宣言して気楽
膝病んで老いた体を思い知る
旧友に認知症やら要介護

愛知県　早川遡行

塩水で嗽コロナを寄せつけず
ファッションになったコロナのマイマスク
ふる里へむかしの話しに帰る
嫌われぬように家族に気を遣い
土砂崩れ人を狙った訳じゃない

犬山市　関本かつ子

古里の我が家に来れぬ遠い孫
冷麦とサバ缶ぴったりの我が家
忘れてた歳がひょっこり顔を出す
ほどほどの距離ほどほどで終わる友
お囃しも聞こえぬままで夏終わる

大阪府　米澤俶子

新入りの卒塔婆の増えて蝉しぐれ
今出来ることは今する心掛け
ひたすらにコロナワクチン待って老い
夕方には電池切れしてくるからだ
金では買えぬ平和という贅沢

大阪市　磯島福貴子

コロナ禍で不発に終る孫台風
松茸を食べておこうか今のうち
狭い庭テントにプールプチキャンプ
平和の灯守り守られ七十五年
日傘重宝しっかり保つディスタンス

大阪市　井丸昌紀

去年の常識今年の非常識
四十度超えそれでもヒト科生きている
盂蘭盆会コロナコロナと蝉の声
台風も容赦せずジャパンを狙う
楽しい振りしてリモート里帰り

大阪市　岩崎公誠

マイナスをプラスに変える知恵が枯れ
風化するいくさの記憶つなぐ忌よ
ロボットも引きこもりして動かない
イチニーサン号令かけて歩いてる
卯建など縁ないハイツ五階建て

大阪市　岩﨑玲子

自粛中恙無いけどつまらない
散歩道今日は何人抜かれたか
のろのろはわたしのペース生きる術
花だって泣きたい時もあるのです
柳誌手に顔思い出しながら読む

大阪市　内田志津子

いじわるの本音探れば愛と知る
弁当を二つ並べて今日は閑
山の飯浅漬けひとつ添えて贅
接触感染つり革ぶらりブラブラリ
想い出を手繰り寄せても出ぬ記憶

大阪市　宇都満知子

想像の翼は侵せないコロナ
瞑想が好きな頬杖文机
愚痴るならシャープに自慢なら小声で
和洋中なんでも得意絹豆腐
贅沢ですか足が冷えますクーラーで

大阪市　江島谷勝弘

ぼくんちはハザードマップまっかっか
楽しみだ今宵は豚マンにビール
酔うたならたしかに声がデカくなる
五十年辛苦の友が先に逝く
テレビ消せば時間たっぷりありました

大阪市　榎本日の出

コロナ君許可なく入り苦しめる
オンライン何時もここから進まない
手の平にのる幸せで満足よ
若さなど知らぬ間に消えて行き
年金は私ひとりでつかい切り

大阪市　榎本舞夢

自粛解除ほっとしたのも束の間だ
梅雨明けと共にコロナも大暴れ
御盆までコロナコロナで儘ならず
バカンスも出来ず子供等可愛いそう
川柳塔誌届いて元気湧いて来る

大阪市　大川桃花

心操る嘘なら神も許すだろう
声出し禁止士気の上がらぬ格闘技
非常時に国会閉じる無責任
先進国のわりに英語が話せない
国会答弁聞いてる妻が切れている

大阪市　大治重信

靴出して靴を磨いて一人でる
皆死んで八十路の平和合掌す
虹立ちて明日の希望が湧いてくる
誰死んで誰が生きてる同窓会
雷雨過ぎ夏の彩り戻りくる

大阪市　奥村五月

山や川自慢の里に子等住まず
テレビではサインもらえぬ無観客
どこで切るコロナの予算決められぬ
ワクチンを祈る心で待つ五輪
目に見えぬコロナに五輪つぶさせぬ

大阪市　小野雅美

仏壇へ涙を見せぬ父の意地
進んではならぬと杭を打っておく
ポケットの穴から落ちていた希望
友にさえ打ちあけられぬ闇を持つ
開封もされぬ手紙を書いている

大阪市　笠嶋恵美

娘と食事梅田の霧の美に見とれ
新パジャマウエストのゴムプラスして
一輪の花咲くだけで気が晴れる
コロナコロナ人の心をもてあそぶ
盆らしく四国遍路の掛軸に

大阪市　金川宣子

すぐ切れる短気な君は寂しがり
ひと針に込めた温もりありがとう
八十路への希望の五年どう生きる
主婦業に休暇届を出す酷暑
朝焼けに今日の良き日を願い出る

大阪市　川端一歩

十歳のわたしを想う八月忌
アメリカの孫と曾孫が気にかかる
コロナ禍に政治の歪みみーつけた
知らなんだ医療科学のその広さ
ああいつになれば友との旨い酒

大阪市　古今堂　蕉子

徳俵で望みつないだような日々
一夏に一度食べたい宇治金時
今日のバス花丸つける運転手
疑ったいやしい自分裏返す
誌上だらけちっとも暇にならぬ日々

大阪市　近藤　正

パンデミック身勝手な世の隙を衝く
熱中症注意と娘から日傘
政府への愚痴がマスクから洩れる
米基地の周囲怯えるクラスター
逃げ隠れせずに顔出せ安倍首相

大阪市　坂　裕之

頑張れとエールをくれたライバルが
梅雨明けた途端に真夏ああしんど
きっと来るその日のために鍛えねば
目の疲れ青空見ればすぐ治る
和やかな句会楽しむのは何時に

大阪市　髙杉　力

枝豆とビールがあればそれでいい
社宅には会社と違う序列あり
無口ではなかった定食屋の主人
プレゼンになると標準語を使う
いい嫁のキャラで乗り切る初帰省

大阪市　髙杉　千歩

三寒四温知らず卒寿の車椅子
百歳がいて負けられぬ車椅子
車椅子だけど付けてる歩数計
お互いに放し飼いして五十年
会話なし猫が優しく目を細め

大阪市　田中　廣子

ひざ手術痛さ頂点泣いてます
看護師の優しい人には涙が出ます
病室（へや）からの見事な花火夢のよう
リハビリを痛さこらえて頑張るぞ
コロナ禍で沙漠のようなミナミです

大阪市　田中　ゆみ子

針の穴できないことが増えてくる
何の芽か正体わかるまでは水
歳時記を大事に母の台所
嫉妬心包んであった熨斗袋
立秋の風軽やかにスニーカー

大阪市　津村　志華子

家族みな安らぐ大きな父の樹で
日溜りの様だと思う母の胸
プライドも女らしさも消えて魔女
木洩れ日のベンチで憩う押し車
聞かぬ振り忘れた振りも老いの策

大阪市　寺本　実

炎天下マスクずらして生き返る
帰れません弾んだ声で嫁が言う
ネジ少し緩めにすると人が寄る
来るなとは言えず電話をそっと置く
身に覚えあるので自粛しています

大阪市　中井　萌

ルールさえ知らぬ将棋が気にかかる
大人しくしてたら子等が寄って来る
ユニークな息子の嫁と繋ぐ縁
男児しか産んでないのに娘が出来た
水飲めと孫が心配してくれる

大阪市　原田すみ子

音楽に充ちて静寂にも引かれ
情報得て前より恐いコロナ2波
自由に泳いで自由に溺れかけ
コロナから不幸の種がいくつでる
長考は苦手でとりあえずビール

大阪市　平賀国和

孫も来ず静かな夏となりにけり
自粛してバーチャル旅行悪くない
敵を知らず己も知らずあの戦
七十五年不戦の日本有難い
画学生の思い伝える無言館

大阪市　藤田武人

横綱の呟き拾う砂かぶり
お帰りと駆け寄る子等と妻の酌
恋愛の答え導く式は無い
天袋開けてルーツを覗き見る
ラッシュ時もベンチシートにある隙間

大阪市　宮﨑シマ子

半世期暮らした家に私の残骸
自分で料理したのが食べたいホーム
熱中症コロナ加齢が老い攻める
昔の罪ばかり顔出す一人部屋
雀の涙ほどの金なら残すまい

大阪市　山本加お里

早朝の空気いただく散歩道
病院も以前のように混んでない
ふる里の鹿の子百合咲き仏前に
マスクせずすれ違ったら息とめる
葬式で喜びいさむ人がいた

大阪市　横山里子

御供えを送ってすます盂蘭盆会
敗戦忌五歳の頃の日の記憶
コロナ疲れ人恋うこともなく八十路
噂話安いストレス解消法
思い出と一緒に過ごす今年の夏

大阪市　若本安代

立場上聞こえないふり知らぬ振り
オンラインなぜか燃えない夏まつり
賑やかな頃がよかった風の私語
老いの恋シュワシュワ弾むソーダ水
コロナ菌世界が狭くなりました

堺市　奥時雄

無人島で暮らせる自信ついてきた
食材に詳しくなってきた亭主
半年で投句句会が身についた
甲子園やっぱり気合入らない
久しぶり近所の方が懐かしい

堺市　柿花和夫

神仏も人種差別にお手上げか
熱血指導自己満足と紙一重
だんじりも今年は小屋で自粛中
コロナ禍で祇園祭りの由来知る
家ごもり一日三度歯を磨く

堺市　源田八千代

長梅雨とコロナ蔓延うんざりだ
コロナ禍に祭り太鼓の出番なく
取れ立ての野菜を提げて来てくれる
鳥除けネットに小猫絡み付く
猫の救出ご主人二人駆り出され

堺市　齋藤さくら

真っすぐに歩いていても怒鳴られる
孫でんわ急に元気が沸いて来る
デパートの賑わいコロナ忘れてる
墓参り出来る元気は残ってる
三食と昼寝の時代もう古い

堺市　坂上淳司

コロナ怖いが熱中症も恐い
コロナ場所きれいな四股に湧く拍手
コロナ下で無けりゃ華だがやんちゃ阿炎
桝席で一杯やれぬコロナ場所
僕を刺す酒好きらしいモスキート

堺市　澤井敏治

のろのろになって悟ったわが未熟
がむしゃらでも夢いっぱいの子育て期
目をつぶれば風のこころが見えて秋
秋祭り自粛にあくびする金魚
ウイルスにホモサピエンス嗤われる

堺市　遠山唯教

我慢したチャンスの的を外せない
感性に気合を入れて研ぎ澄ます
コロナ禍で五十回忌がまた延びる
梅雨明けへさあこいコロナ負けないぞ
当面の仕事は妻を守ること

堺市　内藤憲彦

やっぱりつまらんソーシャルディスタンス
戦争が七十五年無い誇り
旬野菜足して命を喜ばす
脳みそのバックアップが要る歳に
横着が出来るやっぱり街に住む

堺市　矢倉五月

十年目独りに慣れた目玉焼
ワクワクのポストに鎮座請求書
愚作でも元気貰いに行く句会
懲りもせずまた通販で背負い投げ
骨壺を抱いて唇一文字

池田市　太田省三

カップルが座席を空けてロードショー
まだ続く家計に重い冷房費
酒すする母の小芋の甘辛煮
薄給を支えた妻の太い腕
眠ってる父の背中へ里帰り

貝塚市　石田ひろ子

八・一五すいとんの味連れて来る
代替り挨拶だけの里の家
まだいける自分を起こす応援歌
感謝する心を貰う盆供養
一椀の水をあげたい鬼瓦

河内長野市　大島ともこ

儲けたら儲けたぞとは言わぬ口
ビギナーズラックじゃないと信じてる
二千万無いが元気で夢もある
優しさの芽を摘まぬよう子を育て
浅漬けでさらさら今日を締めくくる

河内長野市　梶原弘光

几帳面な民に凭れる政
ワクチンが日本に届かない悪夢
急くこともない通販のあと10分
カナヅチが河童になった疎開の子
駄菓子屋のおまけ見せっこした昭和

河内長野市　木見谷孝代

盆提灯夫の面影揺れている
扇風機パーツ組み立て知らなんだ
コロナ禍も知らず朝から蝉時雨
吹っ切れたつもりが枕濡れていた
午前三時起きて時間はたんとある

河内長野市　黒岩靖博

オンライン授業で孫が帰らない
孫が来て若さを貰い元気出る
爺婆と川の字に寝る孫娘
居候の孫が君臨様がわり
悔いはない恨みもしない人生路

しめ切りが怠け心に活入れる
帰れない故郷なぜかなつかしい
高齢の一人暮らしがコロナ避け
デイの迎え彼氏がきたと孫が言う
熱中症コロナ禍なんと住みにくい

河内長野市　辻村ヒロ

母に会うほぼ3密の罪悪感
棚経は不要不急で済まされず
砂被りきれいどころのいない場所
蝉しぐれ中には鳴かぬものもおる
丸腰で生きてる人にあるオーラ

河内長野市　中島一彌

人の輪に入り広がるコロナ菌
鼬ごっこは埒が明かんと釘刺され
暑さ続き悪い予感も上昇だ
家族の輪父を囲んでいた戦後
老いの暮らし孫がペースを掻き回す

河内長野市　藤塚克三

ツーカーの仲でマスクのもどかしさ
杯を手にジキルハイドの鬩ぎ合い
ぐったりとした心臓へ大ジョッキ
看取り役妻に委ねてある安堵
来年も帰っておいでつばめの子

河内長野市　村上直樹

ウィズコロナ帰ってこれぬ子の無念
ウィズコロナ勉強してたらしトップ
ウィズコロナ蝉ことさらに鳴きつくし
ウィズコロナ入院させぬ覚悟きめ
ウィズコロナ子育て終えている安堵

河内長野市　森田旅人

気のゆるみいつもおんなじミスをする
女文字ちょっと気取って書いてある
ノーマークだったのが今ライバル
抱負だって大きい方が格好いい
いつものをとだけでいつもの酒とあて

四條畷市　吉岡修

友見舞う言葉の棘は抜いておく
輝かぬ石を両手で撫でてやり
もう米寿自分の肩を揉んでやる
寂しくて遺影の父と酌み交わす
八十六年歩き続けた土踏まず

吹田市　太田昭

大統領結構長くよくやるね
夜の街外出控えさあ大変
年ばかり言うと息子に叱られる
砲兵も子供だ笑い見せてくれ
士官学校悲しうれしい不合格

吹田市　野下之男

高槻市　片山　かずお

夏の行ですとお盆の墓掃除
エアコンの部屋でしっかり夏籠り
外出自粛知らぬと雨のカタツムリ
楽しめぬ三密回避した宴
人の波コロナの波に見えてくる

高槻市　島田　千鶴子

間に合ってドクターヘリが飛び立った
情けなく涙零れた夜もあった
麻酔覚め生への道を歩き出す
太陽の塔月の光を浴びて立つ
軽い口調説得力が足りません

高槻市　初代　正彦

老木をしっかり誉めて水をやる
第二第三波これからどう生きる
オンライン帰省笑顔のいい土産
逢えないが思いはいつもキミの傍
猛暑でも老いには外せないマスク

高槻市　杉本　義昭

足るを知る暮らし黙って秋刀魚焼く
妻の留守おでんが三日煮くずれる
ステイホーム爪切り乍ら明日の事
名人にも夢叶いそう聡太君
ふる里の川行きたいが自粛する

高槻市　富田　美義

無人駅過去の暮らしも知る桜
又かいな年々増える訃のハガキ
マスクした足音続く入学式
孫等との面会閉ざす新コロナ
平均寿命過ぎりゃ望みは安眠だ

高槻市　富田　保子

親切をもらさぬ様に手に受ける
球児らは汗と涙の夏刻む
友情のお蔭で強く生きられる
目に見えぬ神様だから正直に
私が私にエールする後期

高槻市　原　洋志

建前をすべて溶かしていく猛暑
ライバルに勝っているのは診察券
不器用に生きても軸にぶれはない
さわやかな笑顔で老いをガードする
言葉など要らぬ背中をそっと押す

高槻市　松岡　篤

前後左右眺めてマスク着け外し
三密も酔いが回ると緩みだす
コロナ禍と熱中症の串団子
外出に水持ったかとチェックされ
日の陰を探し探して歩いてる

高槻市　安田忠子

今日一番出るのでゴルフ止められぬ
ピンク色少女にさせる旅浴衣
百までは持つと歯医者に誉められる
ぼうっとして時々脳を入れかえる
怪我をして生きる喜び教えられ

豊中市　池田純子

連弾は婆が易しい方を弾く
おばあちゃん今日は一日猫になる
蚊帳越しの月に兎が住んでいた
流星群見れず仕舞いで蚊にさされ
ステイホームテントも家の中に張る

豊中市　上出修

パッと咲きサッと散りゆく流行語
ほめ上手部下がすくすく育ってる
夏の午後もっと生きたい蝉が鳴く
コンチキチン今年は消えた京の夏
富岳でも見つけ出せない治療薬

豊中市　きとうこみつ

テロップは敬語そのまま表示せず
毎年降る100年に一度の雨が
一大決心ポテチをやめてダイエット
離婚してトントン出世元夫
ちょっとおしゃれして介護施設の見学に

豊中市　藤井則彦

良心にいつも睨まれ生きている
大儲けで歩き方まで様変わり
願わくば雲にうっとりする最期
気の緩みかシャツのボタンがよく外れ
散歩中妻とも空ける二メートル

豊中市　松尾美智代

久し振り朝の散歩で月見草
人間の都合コロナに合わされる
コロナ禍にびんずるさんを遠く見る
満開の蓮に彼岸の母思う
日本から出て行けコロナチチンプイ

富田林市　片岡智恵子

満天の星今日の無事ありがとう
栗ごはん三合炊いて上機嫌
指切りげんまん今となってはセレモニー
さるすべり満開見てと喋り出す
若かったナツメロを口ずさむいま

富田林市　中村恵

日傘くるくる風はわたしを裏切った
空席の目立つ舞台は三幕目
風通しよくする気の早い落ち葉
心配が重なる元気には遠い
常識を説かれる見知らぬ人から

待ち侘びた登校マスクマスク列
コロナ禍で麒麟が来ない日曜日
日の丸を背負う選手に悔い数多
勝手口御用を聞きに来た昭和
一張羅野良着に替えて土塗れ

富田林市　山野寿之

よく気が付き助けてもらいうれしくて
行き違いがあり仲悪くなっている
自分にきびしく人にも望むらし
今卒寿もとにもどらぬ刻なのか
人生に折り合いつけて生きていく

寝屋川市　冨山ルイ子

ご先祖へコロナで失礼致します
月参りマスクでお経戴いた
逢う度にどなたさんかと聞くマスク
話すなと言われ食事も不味くなり
宅配の野菜の土も捨てがたく

寝屋川市　平松かすみ

ある時は娘と深くなる話
自粛する街ハーレーがつっ走る
商店街ＢＧＭも低くして
二つ聞き一つころっと置いてくる
炭酸水はじけて緑陰に染みる

寝屋川市　森茜

内定ゲット父会長で母社長
ビールケース選挙演説下支え
摘み揉まれ色と香は茶の命
オンライン久しき恩師と同窓会
向日葵が項を垂れて梅雨明けを

羽曳野市　磯本洋一

お手頃の鰻手の届かぬ秋刀魚
コロナ禍に庭の胡瓜がよく育つ
名店の弁当広げプチ贅沢
給食を昭和に戻すコロナ菌
百万円引き出す訳を聞く銀行

羽曳野市　宇都宮ちづる

向日葵に囲まれ夏の気をもらう
もう五輪いうてる時じゃないでしょう
ステンドグラスしばし聖女になる私
終章を染めあげたいな淡い紅
ガラガラと地球壊れていく予感

羽曳野市　徳山みつこ

欠伸するマスクしてても手は口へ
巣ごもりのフッと忘れている曜日
風鈴の音に平穏をかみしめる
許そうと思い許せないと思い
丁寧な言葉に的を躱される

羽曳野市　藤原大子

羽曳野市　三好専平

悲しみを悲しみとしてかたつむり
浴衣着てひねもす家にこもりけり
孤独にも馴れず喧噪にも馴れず
観客がないと馬でも気がのらず
本当はバラバラだったこの政府

羽曳野市　吉村久仁雄

街角ピアノ聴き惚れているホームレス
五十年まだ解け切れぬ妻の謎
音痴だと判っているが反戦歌
身の内の火玉が老いを寄せつけず
三代目もノルマのように子が五人

東大阪市　北村賢子

触れあいも温もり奪い取るコロナ
巣ごもりへテレビ操作が上手くなる
マスクしてフラやコーラスああしんど
ホテルでランチ暫し命の洗濯を
干からびた路上の蝉を草むらに

東大阪市　佐々木満作

表情が見えぬマスクの裏の顔
海の日に溺れた記憶甦る
八月の雲は玉音忘れない
夏雲よ一滴の雨降らさんか
気兼ねなく一人カラオケ悦に入る

東大阪市　西村哲夫

楽日無し賢者の演技続くなり
生死一如理解せぬまま寝るとする
朝日射す部屋に一筋光る塵
親の恩借りたままだよ返せない
師の恩も返すどころかまた背負い

枚方市　藤村亜成

体温を既に超えてるビル谷間
呵責から逃れる術のない不義理
同情の酒ほど苦いものはない
強盗と見分けつかなくなるマスク
一日一日無事に過ごせている感謝

枚方市　山口弘委智

人生の雑学まなぶ一行詩
何もない日日の続きに自粛増え
老いるほど妻の貫禄ゆるぎなし
地元紙に包まれ届く母の愛
新調の白靴眩し勝負の日

藤井寺市　太田扶美代

コロナ蔓延アトムに頼むしかないな
角曲る八十歳の独り旅
やさしい雨バスを降りたら止んでいた
朝顔が咲いて打ち水思いつく
熱烈なファンはひとりだけでよい

藤井寺市　鴨谷瑠美子

涼しげなひとに憧れます夏日
記憶の中にいつも咲いてるかすみ草
欲のない話端役の位置にいる
盆が来て亡姉と一緒に舞うトンボ
咲く花のどれも備前の壺に合う

藤井寺市　髙田美代子

真夏日や父に日傘が良く似合う
絵手紙の中で朝顔咲いている
三食昼寝これで満足しています
都知事のマスクならばと待っているのだが
東京五輪先ずはコロナを負かそうよ

藤井寺市　吉田喜代子

七十五年食べられずとも生きて来た
電話魔の彼女に何故か繋がらぬ
ひまわりが並んで挨拶してくれる
墓参りそれぞれの地で手を合わす
断捨離の写真は皆んな若かった

松原市　森松まつお

雨に煙る通天閣は黄色なり
音たてて崩されてゆく民主々義
メシ済んだ頃にブタマン下げてくる
うれしいな友情つむぐ酒を酌む
半額のシールにとっても弱い妻

箕面市　大浦初音

頭では分かるが体ついてこぬ
金は消えるが人の思いは消えぬ
消しゴムのカスは努力の証なり
あさがおの花を数えて朝元気
広い世間巡り合うのも縁のもの

箕面市　酒井紀華

しみじみとコロナ絶滅ねがう絵馬
コロナ出没大声出せぬ応援歌
まだ飛べる翼と信じ飛んでみる
女です赤いドレスで飛翔する
もの忘れ七草の名も友の名も

箕面市　出口セツ子

張り合いが無いと体調悪くなる
GoToで息子二人が無事帰宅
コミュニケーションますます不足するマスク
宅配の弁当独りでは不味い
マスク手洗いだけで耐えろなどと言う

箕面市　中山春代

コロナめが半分かじる夏休み
街へ出る支度みっつのエコバッグ
扇風機首になかなか来ないバス
思い出の夏は九人大家族
フェースシールド仮面劇ではあるまいに

箕面市　広島巴子

夏ばてにしゃきっと友の紫蘇ジュース
ストレッチ三日坊主を繰り返す
立ち話身振り手振りが多くなる
盆帰省自粛の子らへふる里便
食べてよし日除けにもよしゴーヤ愛

八尾市　寺川はじむ

どないしょ思わぬスイカよう出来る
天才も普通の飯を食べている
ほろ酔いでうっとり見てる甘い夢
黄信号灯いても止まらないコロナ
人任せ楽したことはつい忘れ

八尾市　村上ミツ子

梅雨は明けてもいつになるコロナ明け
じわじわとコロナ値上げがとまらない
スマホと遊ぶ時どき外すマスク
ひと休みばかりで前に進まない
トラ勝ってラジオとうたう六甲おろし

八尾市　山根妙子

無観客マイクが拾うベンチ裏
ひと試合青春かけた甲子園
盆まいり無縁塚にも手を合わす
墓標拭き逆縁の子の歳数え
山の日に富士への道が閉ざされる

神戸市　上田和宏

梅雨明ける庭に二つの蝉の殻
令和二年コロナ水害つぎは何
花火中止夕焼け雲が慰める
嬉しい時はうんと嬉しい顔をする
うれしいこと十倍にして書く日記

神戸市　奥澤洋次郎

この人誰記念写真は皆マスク
行くあては無い立呑みのコップ酒
GoToトラベルほんに税金泣いている
クーラぐらいせめて気にせず使いたい
蚊取り線香おだやかに日が暮れる

神戸市　敏森廣光

オリンピック記憶のスミに追いやられ
無観客いつもと違う音がする
エアコンをつけると密になりそうや
ワクチン早く余生を長くするために
寝てしまお明日は別の風が吹く

神戸市　冨永恭子

共生の森で生命が動きだす
B面に入れた本音が騒ぎだす
だんまりを決めこむ肩がふるえてる
夏だものバーベキューする老い二人
夏盛りほくほくかぼちゃ嬉しいな

神戸市　松倉正美

布マスク着いた頃には飾りもの
捨てられず残る風呂敷日の目見る
自慢の髭マスクの下で出番待つ
リモートで元気に映る孫の顔
ナニワの知事張り切りすぎてフライング

神戸市　山口光久

おつむてんてんこの児の明日に夢がある
欲を捨てたらパッと視界が広くなり
泥濘を歩いた靴は気が優し
丁寧におもてなしする返し針
ちぐはぐを笑いで済ます夫婦独楽

神戸市　山口美穂

お盆も祭りも奪って居座るコロナ菌
GoToキャンペーン金持ちだけが使えます
暑い暑い怠けを認めているわたし
七十五年終戦じゃない敗戦です
敗戦の惨状今も眼裏に

神戸市　山崎武彦

廃屋の秘密聞いてる木守り柿
段だんと妻若返るだけどなあ
頼りない世帯主だが立てておく
進化論信じて買った電子辞書
真っ直ぐな道で頭を打つ愚直

明石市　糀谷和郎

長生きは試練それともご褒美か
嫌なことあったな眉が歪んでる
起きかけの身に一喝の水ごくり
四分音符追えば山野は秋の風
稲妻が背を貫く八月忌

尼崎市　近兼敦子

エネルギー怒ることには使わない
決めたのに一日経てばまた悩み
三食昼寝あこがれていた自粛前
夜空見るロマンティックな妻でなく
家事育児夫はどこか他人ゴト

尼崎市　永田紀恵

男と女境界線が低くなる
バンクシーの絵かと落書き人だかり
テレワーク机の下でかくれんぼ
その内にファッションショーをするマスク
メタボ腹熟れたスイカの音がする

尼崎市　藤井宏造

団子虫になってコロナを遣り過ごす
同じ歳長生きしょうぜボブ・ディラン
子を連れて子どもに戻る里帰り
まだ底が見えない妻の底力
百均でもいい加減には選ばない

尼崎市　藤岡りこ

いつだって子守役にと誘われる
値が高ければ美味しいと言う夫です
食欲は旺盛だけど歯が痛い
コロナ禍の地球に今を生きている
生きてると90歳もすぐに来る

尼崎市　藤田雪菜

花に水やって私も満たされる
散歩道愚痴を発散立ち話
送迎バス一人肩身を狭く乗る
骨密度ギリギリですと処方箋
被災地の目の輝きにほっとする

尼崎市　山田耕治

老老に変わらぬ朝があればよい
そっと行けば父がモップをかけていた
子が寄って蝉を逃がしてやっている
新コロナヒト科は群れるものなるか
芽が出たよ鳥のおなかを通った実

加西市　山端なつみ

恋してるわけじゃないのに胸痛む
乳癌の検診予約まだ先だ
乳癌の初期は痛みはないらしい
痛み増すかかりつけ医は盆休み
免疫力低下　加齢かストレスか

川西市　山口不動

大荒れの令和二年よお静かに
我が家はハザードマップ外れてる
散歩してテレビ昼寝で今日終る
足もつれ帰省の孫に労られ
ご先祖の墓新調し初仏

三田市　足立つな子

あわてない休み休みの匙加減
大空翔る急降下して夢さめる
薬より効く手とり足とり老介護
人並みに禍福乗り継ぎ明日のため
ほろよいのひとりになれるＢＧＭ

三田市　上田ひとみ

こんなにも弱虫だったんだ私
みの虫のまんまゆっくり眠ります
ゆるゆるとダラダラとまたふらふらと
風になったあなたに聞いてみたいです
ひとつずつ紡いでゆこうラブソング

三田市　大西重男

予定した行事中止で力抜け
誰彼も同じに見えますマスク顔
マスクした目元美人が花盛り
ステイホーム料理の腕が自称プロ
体調のバロメーターは酒の味

三田市　尾﨑一子

しあわせの汗が流れる夏の天
あたり前の暮らし許さぬコロナの禍
早寝早起き昼の盛りは寝仏に
歳なれどまだ鳴り止まぬ好奇心
老いたれど逃げる術なく淡淡と

三田市　九村義徳

結果より過程が大事と慰める
グタグタと言うなら結果出しなさい
おだてられついつい重い荷を背負う
あり合わせご馳走作り母の術
核心に迫ると黙る永田町

三田市　多田雅尚

知らんけどに始まる会話盛り上がり
七桁の当せん金で我慢する
手洗いと消毒し過ぎ指紋消え
容赦なくコロナに豪雨熱中症
向日葵も三密避けて咲き誇り

三田市　谷口修平

たっぷりと愛を注いだ子の謀反
すらすらと病名告げている他人
渡り切るまでは休めぬ渡り鳥
火達磨になって守ってくれた父
合格をすれば素通りする神社

三田市　野口真桜子

最後だと言われて恋も選り好む
擬音の街あなたがいれば生きられる
どうでも良いマスクでしたネ無駄遣い
生き方は父親ゆずり愚直です
鎮魂歌ですか童女の駅ピアノ

三田市　福田好文

低金利虎の子転居繰り返す
咲いて散る花は未練を残さない
足よりも頭が先に行く八十路
野次自粛実力発揮トラナイン
八十路坂明日が来るの早すぎる

三田市　堀　正和

お花見も花火も見ずに秋となり
ステイホーム早寝早起きして昼寝
不要不急ハイキングなど如何です
マスク取り大きな声でタダイマと
県境を跨ぐと帰省せぬ息子

三田市　松本ゆかり

こんな日々重ねるだけでいいだろか
聡太君有馬でちゃんと牛を食べ
ランドセルリュックに替えて一年生
住職が暮らしの危機というコロナ
墓掃除思案のあげく日を決める

人恋し出番をせがむ革の靴
自己主張曲げてみんなの輪に入る
自粛から逸れて貴女に逢いに行く
連休はいらぬみんなでビアホール
電話などしない録音されるから

三田市　村田　博

塩焼きの鮎も跳ねてる宿浴衣
初盆へわがもの顔の赤トンボ
一泊の予約へ活気取り戻す
リモートもネットも出来ぬまま自粛
カラフルな着替えコロナを遠ざける

高砂市　松尾柳右子

悩むまい外にゃ変わらぬ風が吹く
イノシシもクマも人里恋しがる
八十年二十歳四回やって来た
自転車が我が物顔で歩道行く
新コロナパスポート無く世界旅

宝塚市　丸山孔一

一時代背負うたあんた偉かった
身の丈を時々忘れ天にらむ
時代からはずれた人と旅をする
たくさんの医学者おって先読めぬ
がんばらない生きて時代を見届ける

丹波篠山市　酒井健二

お前も自粛か庭のねじ花わずかに一本
この夏は気分は鬱だが酒すすむ
コロナ奴は拍手の音まで奪ってく
富士山は見る山なりとやせ我慢
剱岳六回登頂老いての自慢

丹波篠山市　長谷川善輔

八月は真面目に命考える
繋ぐこと忘れてならぬ八月忌
やかましい蝉もエールと思いたい
薫風師をうならせた人海老池氏（追悼句）
帰ったか大きな西瓜抱いて父

西宮市　緒方美津子

得意満面曽孫ダンスをして見せる
大きなマスク時に便利な時もある
皿を選るひとりの宴夕ごはん
コロナ禍へ町は静かな昼さがり
川柳談議も出来ないままに日は過ぎる

西宮市　西口いわゑ

のんびりのはずの余生へ新コロナ
オリンピックさえも定かでなくなった
又自粛又退屈の夏帽子
コロナ太り目移りサプリコマーシャル
老猫の目薬だけは忘れない

西宮市　福島弘子

責任の重さが沸かぬ専門家
令和来て地球の動き変わり出す
朝刊の頁数字が減っている
お日様に一喜一憂猛暑かな
黄泉の国調査が出来ず不安だな

西宮市　福田正彦

少ないが客居てこそのホームラン
出番なく倉の花火が恋う夜空
粛の字の書き順覚え書き馴れる
コロナから不況へ備え限りなし
長生きしコロナ体験語ろうぞ

南あわじ市　萩原狸月

お粗末なタテ割り社会の危機対応
超省の横断チーム何故組めぬ
現体制続けば同じ轍を踏む
ワクチンの獲得スパイ暗躍中
我が立場だけに固執は墓穴掘る

奈良県　安福和夫

長梅雨でも蝉はきちんと仕事する
ふぐ提灯通天閣が寂しがる
外車から軽に乗り換え老いた町
愛犬逝き夫婦喧嘩が増えてきた
周平を偲び再読蝉しぐれ

奈良県　谷川憲

距離おいて孫の見守り忘れない
夕に咲く君に見せたい合歓の花
コロナ避け畑仕事に玉の汗
頑張ろう夢が背を押す時がくる
母との別れ突然きても良い覚悟

奈良県　中堀優

語り継ぐ神木さえも消す豪雨
予報士に外れてほしい梅雨末期
腐葉土が海を育てる森造る
生き方を変えて戸惑う地球人
いつからか五体に忍ぶ老いの影

奈良県　長谷川崇明

弟の筆圧弱くなるばかり
自分史へ弾けています自画自賛
たらればの話に翼生えてきた
少しずつかすむ記憶へ海光る
自粛続き妹の愚痴が長くなる

奈良県　渡辺富子

無駄足と二の足ばかり靴が禿び
箸を持つ父の荒れた手里帰り
他人目には臈たけて見え未熟者
し残した未練断ち切り辞した職
緊張をほっこりほぐす子の会話

奈良市　宇賀史郎

奈良市　大久保　眞　澄

アベノマスクつけた王様はだかんぼ
ただの風邪であんなに人が死にますか
威厳なくしたクワガタ仰向けでもがく
クマゼミしゃわしゃわ君にマスクを進ぜよう
着ぐるみのゆるキャラ夏は命懸け

奈良市　加　藤　江里子

帰省自粛待つ楽しみを奪われて
世の中と確と繋がるペン一本
猛暑日はいつも三和土に猫がいる
コロナ禍でエアコン点けて窓開ける
列席者減らし切なき原爆忌

奈良市　髙　橋　敬　子

二転三転結局免許とることに
不要不急守り十万持ったまま
痩せたねと心配したら喜ばれ
孫まねて楽天で本買うように
すっかりとばあちゃん歩き身についた

奈良市　辻　内　げんえい

自粛して散歩もせずに痩せてくる
ステイホームため息の数競い合う
あの世で会おう葬儀も行けず友おくる
ファイトより逃げるが楽と知る八十路
怒り消えた途端空しさ湧いてくる

奈良市　米　田　恭　昌

コロナ禍に暮しのリズム狂い出す
コロナ禍に食っちゃ寝転ぶ無精髭
いつの世も靄のかかった永田町
不肖の子叱る資格が見当たらぬ
ＡＩを敵にまわした職人芸

生駒市　飛　永　ふりこ

樹にシャワーふいに小さな虹が出る
痛快な映画コロナも幻に
バリの海ブルーの彩に引き込まれ
潮風もトロピカルですバリ島は
ひまわりが物ともせずに陽と対峙

香芝市　大　内　朝　子

心地好い目覚めに感謝生きていた
七十五年の平和コロナが脅かす
ワクチンを待ちくたびれているキリン
ひまわりも夾竹桃も元気だね
郵便がわたしを孤独から救う

香芝市　山　下　純　子

じわじわとゆるみ始めた頭蓋骨
五輪消え赤黄パプリカ育ちゆく
エール交換できず静かな夏が去る
ステイホーム使い道ない交際費
リップサービスわかっていてもいい心地

美しい錯覚でした青いバラ
私の弱い所へ愛の鞭
邪心弱気捨てて気楽に生きてゆく
間が延びて笑いのツボを外してる
平凡で静かな暮らしありがとう

和歌山市　上田紀子

ほとぼりが冷めてもできぬ仲直り
延長線にふかふかの椅子待っている
性質は温和時々仁王様
良い事もあった洗濯物乾く
毎日が感謝私は生きている

和歌山市　柏原夕胡

広い天時々走る千切れ雲
いい女弾みで見せたウラの顔
熱中症もう気に掛かる朝10時
命こそ大事を知らぬ医師2人
スポーツとやる気が出して来る答

和歌山市　喜田准一

海の日もピンとは来ないコロナ禍
真夏の横断歩道マスク行き交う
タイミング外せばただの紙屑に
今日もまた一喜一憂棒グラフ
見える聞こえる歩けます感謝です

和歌山市　坂部紀久子

ほどほどの孤独ほどほどある自由
針穴は見えないけれど気楽です
軽い嘘だんだん重くなるこころ
虹色を纏って加齢追い払う
まず仏壇拝んで医者に診てもらう

和歌山市　土屋起世子

素麺を手抜き料理と言わないで
今さらに名前聞くのも失礼と
かくれんぼ好きなメガネと朝刊と
線一本左に曲がる癖がある
空カンの大半ボクの缶ビール

和歌山市　古久保和子

心地よい緊張感に癒される
コロナなど何処吹く風と花が舞う
自粛するコロナとうつのせめぎ合い
終息を見据えて友と予約する
もともとと思えば何てことはない

和歌山市　堀冨美子

生き下手を捌き切れずに立つ迷路
菜園の旬食卓に盛り合わせ
趣味ひとつ振り回されて飽きもせず
折目折目に亡母の躾目に浮かぶ
人生これから時々芝居してみよう

和歌山市　松原寿子

岩出市　藤原ほのか

プライドをすて不断着で過ごしたい
ビビットを信じて続く二人旅
知らぬ間にだんだん似てる母の味
自粛中外出先を決めておく
捨てる物多くて今は元の場所

海南市　小谷小雪

マスクしてマスクの人にする会釈
じゃあまたねコロナに負けませんように
ありがとうと桃の絵のハガキいっぱい
お隣の主夫は洗濯干す係
長すぎた梅雨お日様にご挨拶

紀の川市　山東日出男

八月のアワダチ草の強かさ
数々のドラマを生んだロスタイム
猛暑日の街をタオラー闊歩する
熱帯夜ふとんも汗をかいている
稲穂の海でヒーローになる案山子

橋本市　石田隆彦

一石を投じ自分の位置探す
コロナ菌陽気な春を奪い取る
陽気になれる友がいて酒がある
サザエさんをサプリメントに世を生きる
ぬくぬくと暮らしておれぬ温暖化

京都市　清水英旺

指トレに茶碗洗いを妻勧め
誕生日の翌日に来る空虚感
聞こえまい八十老の歯ぎしりが
神の杜マスク外して吸う霊気
つき合い方とんと分からんウィズコロナ

京都市　藤井文代

自分に喝遠まわりする万歩計
賢い方がいつも負けてる口喧嘩
風みたいそしらぬ顔で来るチャンス
どちらにも取れる言葉で泳いどく
混雑よりコロナ予報で里帰り

八幡市　今井万紗子

悲しいね代行人の墓参り
普通がいい普通に戻る日を信じ
コロナ騒動何時まで泳ぎ切れるやら
マスクだけがおしゃれの一つ淋しいね
虫眼鏡いらんとこまで見えてくる

島根県　伊藤寿美

猫抱いた寄る辺無き身が手を合わす
平均寿命アクセル踏んでくれないか
亡夫の名のワインを飲んだお命日
お逢いしたいと思う句に遇う家籠り
親の介護終った友を見る柳誌

松江市　栂瀬　みちを

飲みながら持病の多さ自慢する
世も平和犬が抱かれて散歩する
酷暑にもほっと一息赤とんぼ
ついてない年だがウナギ食べました
閉じこもり引きこもりとは違うんだ

松江市　藤井　寿代

コロナウイルスそれでも月は輝いて
忘れるのあきらめるのよ笑うのよ
40の娘はいまだ反抗期
大海を夢みて今日も立ち泳ぎ
おせっかいを楽しみに待つ人がいる

松江市　松本　知恵子

夏空に少年野球の声が澄む
コロナの世蝉が変わらず鳴いている
ネコの耳熱い何かが起きそうだ
黒揚羽見る雨学さん惜しまれる
雨期続く才ある雨の詩人逝く

出雲市　岸　桂子

せせらぎの音が聞こえて来る枕
旬の味仏に上げてから食べる
傷一つ捨て夢一つ拾う旅
昨日からクスリが増えた花ぐもり
心の中にいつもあなたの席がある

雲南市　菅田　かつ子

いい湯だナ浮かんだ一句ペンが無い
嫁さんのタクトときどき見間違い
集合写真見ながら雨の小半日
ここまでの話を風がもって来る
百円玉拾ってくれと目の前に

岡山県　髙岡　茂子

長雨とコロナで庭はジャングル化
コロナ禍で帰省できない孫の夏
孫もどらずさびしいと鳴く油蝉
予告なく花火乱舞のコロナの夜
満天の星ロスで見てるか兄想う

岡山県　田中　恵

手の届く範囲に転ぶボールペン
「また明日」なんとやさしい助け舟
コロナにも暑さも負けぬ割烹着
ふるさとが心に浮かぶ牛蒡削ぐ
被災地にエールを送る蝉しぐれ

岡山県　藤澤　照代

幸せは対の湯呑みにある茶渋
向日葵もうなだれたまま原爆忌
ふるさとの訛に浸かる長電話
雨上がり地球にリボンかける虹
ＡＩの上で胡坐をかくヒト科

半開きのドア許されぬ里帰り
広島の祖母生きぬいて夾竹桃
萱草色にしみていく祖母の物忘れ
一日で一生をみせる芙蓉の白
正座して新聞を読む時代遅れ

岡山市　大石洋子

ご機嫌はいいらしい風呂場のサブちゃん
替えられる美人の湯から長寿の湯
食パンがまた焦げ雨が本降りに
虎だった事にも飽きている鏡
集団になると強気の日々草

岡山市　工藤千代子

風の音違う野の道山の道
墓参りしたかと法師蝉が鳴く
空蝉になっても幹にしがみ付く
答などないと分かっているカラス
ハトもセミもカラスも僕も生きている

岡山市　丹下凱夫

極楽かウグイス鳴いて蓮の花
父母と会う懐かしさあり蓮の花
凡人も心落ちつく蓮の花
貴婦人の香り漂う白い蓮
見る人の顔もおだやか蓮の花

岡山市　前田恵美子

幸せに時々ムカデ這ってくる
句作りに過度な光を遮断する
一枚脱皮する討論の句会
作句には時々愛を放棄する
メロメロな夜をご期待コークハイ

笠岡市　藤井智史

コロナとの長い闘い覚悟する
官邸の暴挙正気の沙汰でない
髪型に悩んだ昔懐かしむ
そこかしこ監視カメラが要る時代
ポケットの中でぼやいているマスク

広島市　岸本清

コロナ禍の運動会を手探り中
コロナ菌社会の仕組みまでも変え
戦争の怖さしみじみ敗戦日
てんこもり倖せになる孫育て
母だもの母性忘れるはずがない

竹原市　石原淑子

待ちぼうけそんな女で生きてます
夕焼けは母待つ石段の上である
夏も終りぬ台風はまだ来ない
天井のシミが時々おしゃべりを
プライドはしっかり持っていたんだが

竹原市　岩本笑子

三原市　鴨田昭紀

治療法のひとつ友との長電話
人生を語るといつも熱くなる
プッツンと途切れる価値観の違い
笑う日が必ず来ると言う背中
ハチ公が見て来た人生のドラマ

岩国市　上村夢香

先人達にいただいているこの平和
墓参りただ詫びるだけ独り言
被災地にもやはり厳しい夏は来る
住職の法話は今日もあたたかい
雨上がり草刈りの日々まだ続く

宇部市　平田実男

免許証返納世間狭くなる
アルバムの写真も僕もセピア色
老いて子に従い一家丸くいく
方便の嘘で総理をまだ続け
雑草が一番先に取る肥料

防府市　坂本加代

暑いねとまた言う人を聞き流す
雨の夜のフロントガラス過去を消す
警報と代わり番こに注意報
老猫よ野に死にたいか家を出る
子と並ぶ写真の顔は慈母になる

鳥取県　門村幸子

生っちょろい体の薬7000歩
人生の一部と思う向かい風
免疫力つけてコロナと共生す
吉報に元気もりもり草抜きす
真夏日も食べる買う見る厄落し

鳥取県　斉尾くにこ

オリオン座知ったら見えたオリオン座
無駄少し残しては断捨離をする
リモートの上半身はオシャレして
絵を描くこころ耕し文字を書く
マスク用だったのかしら耳ふたつ

鳥取県　竹信照彦

夏野菜真夏日になり終り告げ
老い二人置いて皆さんご出勤
無精髭苦にならないが見苦しい
ガランとした会場マスクして句会
猛暑日に負けてエアコンにも勝てず

鳥取県　細田裕花

3密を避けて御無沙汰する仲間
いい時代思い巡らすデスマスク
ガム噛んで頭を整理しています
肩寄せて静かにファイト線香花火
リモートで可愛い孫とハグをする

鳥取県　山下節子

検診の待合室は気が沈む
断捨離に惜しい気持が先に立つ
分け合って食べた戦後の家族愛
日本一オリンピックで世界一
睨まれて背中むずむずしています

鳥取市　池澤大鯰

温野菜などと手抜きの料理増え
旬を無視野菜の味が狂ってる
主夫をして自分の好きな野菜買い
旬のない万能モヤシまたも買い
青汁を飲んで野菜を口にせず

鳥取市　奥田由美

五十年も思い果たせぬダイエット
減量を阻止する甘味依存症
減量にと濃酢尽しの嫁料理
チャレンジが挫折続きのリバウンド
減量の励みを砕くリバウンド

鳥取市　加藤茶人

曖昧な記憶昨日は何食べた
そばに居て最高の味摘まみ食い
百回の嘘もいつしかひょっとする
同じ子で愛は平等とはいかず
口ずさむ演歌に自分史を重ね

鳥取市　岸本宏章

一手目は聡太も僕も2六歩
コロナ禍の誌上句会に励まされ
戒名が語る家運の浮き沈み
強い意志あれば背を押す風も吹く
急流と言われる川にある脆さ

鳥取市　岸本孝子

遅い梅雨明け梅干作り狂わされ
ひまわりを見るとなおさら暑くなる
あれこれとボタンを押して動く朝
詳しくはホームページとそっけない
巣ごもりが胃袋までも小さくする

鳥取市　倉益一瑤

素晴らしいひと言でした罠でした
平凡に生きてサンダルはき潰す
ケセラセラボケておくのも生きる道
手の鳴る方へ伸ばした首が回らない
羽撃いて私の脳へ風入れる

鳥取市　田賀八千代

誰とでも繋ぐ両手は空けておく
疑問符が残るがハイと答えとく
蟠り解けてミックスジュース飲む
ケンケンパ一人遊びもいいもんだ
掛け違えたボタン千切ってややこしい

鳥取市　棚田　大

お盆来るコロナウイルス消えてよね
雨もまた望まれる時いやな時
あちこちに惜しむムードはどんと増し
あの頃を思い浮かべて気合い入れ
あの頃と聞いただけでもなつかしや

鳥取市　谷口　回春子

負けん気の根性だけは超弩級
出る杭が俺の天下と胡坐組む
兄妹のほっぺに夕陽化粧する
首の皮一枚繋ぐ孫の守り
諦めと開き直りで好機待つ

鳥取市　永原　昌鼓

この調子実力出すかタイガース
老いの身へ家族の笑顔くすりです
無職にもボーナスが出た有難う
肩の力抜けば心も凪いでくる
若人の行方コロナに狂わされ

鳥取市　中村　金祥

言っても聞かぬ保身に走る議員たち
沖縄の浅瀬にあった深い傷
家族葬佛もきっと淋しがり
老夫婦針と鉛筆会話なし
招くのはよそう盆も法事もオンライン

鳥取市　副井　ゆたか

生き様はいつも二番が理想形
不便だがコロナも避ける山の奥
健やかに過ごす自分を褒めてみる
移住地で古い日本が今も生き
喫緊の課題をほぐすお湯の中

鳥取市　前田　楓花

棘を抜くための握手がこそばゆい
やり過ぎていつも後悔ついてくる
こっち向いてと言えばはにかみ背を向ける
ジャガ芋も笑う二人の農作業
爺ちゃんの口から仁丹がにおう

鳥取市　山下　凱柳

甘い判断心配します二波三波
コロナ情報一つで株価乱高下
無観客の試合にエール甲子園
上り下りまさかの坂を生きて喜寿
人生なんて所詮浮いたり沈んだり

鳥取市　吉田　弘子

うさぎ小屋自作の花と亡夫の書
天を突く竹に教わる生きること
やりたい事できる手足に礼を言う
心得よ針の穴から覗かれる
最高の野菜わが家の菜園に

倉吉市　猪川由美子

二転三転の政策頓挫しらけちゃう
想定外の特別な夏コロナ禍よ
賛否両論お盆の帰省揉めに揉め
物は少な目シンプルライフ楽ですよ
修学旅行や墓参りまで様変わり

倉吉市　岡﨑美知江

まつり囃子老いが笛吹き盛り上げる
笑いヨガコロナ飛ばそうワッハッハ
ごめんねがすんなり言えたありがとう
燃えつきるまで笑い皺重ねとく
飾らない文字光ってる一行詩

倉吉市　田中紀美恵

あんな坂こんな坂越え八十路なり
人生はゆるりと登る坂がいい
夕食は五人バラバラ片付かぬ
バラバラの意見まとめる名司会
素潜りの上手な兄は墓の中

米子市　池田美穂

朝イチで良い記事探す癖がつく
楢山もお金が無いと行けません
百近い義母の口ぐせ 努力する
ポイントはもらうが使い方知らぬ
凡人は天才見抜く眼だけある

米子市　伊塚美枝子

油断した隙間ねらってまたコロナ
神様もコロナに負けて祭り止め
鳴くセミに夏の日差しが加勢する
せみの声せかされ急ぐ老いの日々
蛾のつぶやききれいな蝶と呼ばれたい

米子市　後藤宏之

足音で出掛けることがすぐバレる
いつもとは違った音のする雨だ
耳がとおくてささやきが聞こえない
日本語のわかる河鹿の合唱団
演技ではあの澄んだ目はとても無理

米子市　後藤美恵子

澄む水を少し濁すと住み易い
アルバムから飛び出す恋の物語
力尽くで奪った玩具すぐ飽きる
あの世でも押さえています夫の横
引導のお布施貯まらず未だ逝けず

米子市　中原章子

面倒と思うことには手を出さぬ
無理をせず涼しくなってからやろう
ペン持たぬ物足りなさの日が暮れる
明日のため毎日辞書をひいている
青空を見上げて憂さを晴らしてる

電話した東京の子が無事だった
もうひと味足りないようで止まらない
祈るしかないとホントに言えるのか
散歩から帰る一句も出来てない
のほほんと無神経とが同居する

米子市　成田雨奇

病み上がり歩いて見せた亡父思う
万国旗つけた魚の廻る寿司
語り部も老いて昭和が遠くなる
昭和史の哀しみ量してはならぬ
こつこつと守った家訓色あせる

米子市　野川宣子

七十五歳もう座ってはいられない
談合をしたことがない三姉妹
ひまわりを主役に誰も文句なし
信頼をする信頼をされている
惚け防止猫を飼ったとメール来る

米子市　吉田陽子

珈琲の香りに朝が包まれる
旅人の目で見る海は美しい
過ぎ去ったひとは万華鏡の中に
朝の陽をうけて生きている実感
肌触り香りも馴染む布マスク

土佐清水市　辻内次根

墓参りふとあの歌を想い出す
コロナ禍もワンチームにならぬヒト科
巣籠りのストレス川柳取ってくれ
ころり逝く蝉に肖りたいその日
終活を勿体無いが邪魔をする

松山市　古手川光

抽き出しに昨日の事を入れ忘れ
抽き出しから昔むかしがあふれ出る
いい時もあったと今を受け入れる
惜しまれて逝く七十路とうに過ぎ
あれほどの人もうっかり多くなる

松山市　宮尾みのり

人生の終章つるべ落としです
手強くてどうにかなるは通じない
戦争を知ってる人に骨がある
先人の熱い記憶と語り部と
七十五年の回復力を考える

松山市　柳田かおる

定期検診へ半年ぶりにバス
バルーンを上げる溜息吹き込んで
絆って友って何だったんだろう
駅ピアノ消えたピアノが懐かしい
世話になる町へそっくり給付金

西予市　黒田茂代

（西田美恵子さんは42頁にあります）

川柳塔の川柳讃歌 ⑱

上方芸能評論家　木津川　計

粛粛とただ粛粛と蟻の列

伊藤　のぶよし

「粛粛」ということばに出会うと僕はいつも東海林太郎の歌った「麦と兵隊」を思い出した。〽往けど進めど麦また麦の／麦の深さよ夜の寒さ／声を殺して黙々と／影を落として粛々と／兵は徐州へ前線へ。中国のコロナは武漢から広がった。すると、武漢三鎮攻略戦に結びつき、「上海の花売娘」は上海事変、「蘇州夜曲は」蘇州占領と、中国の地名はすべて日本の侵略戦争と一体であった。のぶよしさん、粛々と前線へ歩かされず幸せでした。

茶漬さらさら哲学醐っている

藤井　寿代

ぶくぶく肥った老僧を僕は認めない。高僧は骨だらけでないといけないのだ。高傑の士はけっして脂ぎっていない。鼻の下の長い男は教育者にはなれない。エロ小説ばかりで稼ぎに稼いだ瀬戸内晴美がいかに寂聴をとり繕おうと僕は一切信用しない。本物の哲学者は血のしたたるビフテキを口にすることはなく沢庵二切れの茶漬けで済ます。僕の師だった芸能評論家・吉田留三郎は終生長屋に住み、清貧に生きた。寿代さんその哲学徒に温かく。

子が育つ親の財布の域を越え

宇賀　史郎

「子は育つ這えば立てよの親心」の頃は成長が楽しみだった。たとえ「子は育つ壁はぼろぼろ落ちよるが」(岩井三窓)でも、そのたくましさがうれしかった。が、成長するほどに「財布の域を越え」たのだ。僕の父は生活無能力者にかかわらず母と別居し、愛人と暮らしてなお祇園で遊んだ。揚げ句、大借金で首が回らず、自死して負債を僕に残した。子を苦しめる親もおれば、子の成長に財布を睨む親もいる。史郎さん、将来が楽しみですよ。

スマホあれば辞書は机の飾り物

辻内　げんえい

朝日歌壇に「外出時我はスマホを持たぬなり人の数には入らぬやうなり」(秋岡実)とあって驚いた。僕もスマホを持ち合わさない。すると「人の数には入らぬ」というのか。冗談ではない。取るに足りぬ僕といえども人外ではなく、人の内だ。スマホは持たぬが新聞4紙を丹念に読む。絶えず辞書を引く。ことばは画面よりも辞書を通して覚える。無人島へ向かうとき、僕は歓異抄でなく辞書一冊を携えて行く。げんえいさん、辞書を必需品に。

夜の街賑わう頃にもう寝てる

中井　萠

僕が一番忙しかった50代～60代、一日を四つに区分して過ごした。午前、午後、イブニング（6～9時）それから夜であった。夜10時に帰ったことが一度あった。妻が驚いて玄関で「どこが悪い？」と聞いた。そんな僕が今は10時に寝ている。夜の街は若者と現役の解放区なのだ。飲み友達は大方彼岸へ行くか、へたって茶を飲んでいる。まことに少年老いやすく、僕は一人で何も口にせず、缶ビールばかり飲んでいる。萠さん、お見捨てなく。

まだ八十だいじょうぶまだ　だいじょうぶ

小松　紀子

何事も悲観的に把える人がいる。僕は楽観的だから、アカンことを考えず、ええようにするにはどうするかを考えよう、と皆さんに言ってきた。八十五歳になった僕だが、ご同輩の男はほとんどあの世へ行ったが、八十五だいじょうぶ、まだだいじょうぶと自分に言い聞かせている。来年は演出家が僕の一人語り16作から8演目を選び木津川計大全集を開くという。紀子さん、八十ならまだ大丈夫。

橘高薫風句抄

（『橘高薫風川柳句集』平成十三年発刊）

握手して猫ほど柔らかい手あり
水の音私が石に捨てられた
溢れる湯先ず爺が溶け孫が溶け
白湯の味喪のネクタイを解きながら
写経して不生不滅の風まとう
生々流転水より長き風の章
蚊が鳴いて僕を探しに来てくれた
風船と魂だけは赤がよい
人生は二幕三幕ほどがよい
肩車タンポポに風杉に風
先手打つおんな奥の手持つおとこ
象さんとお話出来た日の寝言
酒の壺鼻を挿されて恥ずかしい
野良でいておっとりした見事な目
温泉で生まれたときの顔になる
母刀自の在せし頃の御御御汁（おみおつけ）
老いらくに吉祥天のぬいぐるみ
師弟あり一人は天に一人地に
毒の世の達陀の火と閼伽の水
ムンクの絵外真っ青な雪景色
二月盡いのち盡へと続くなり
　春の叙勲で木杯一組台付賜与さる　五句
木杯へ男の月の花菖蒲
薫風へ大内山の風の色
恩師かや豊明殿の雲に声
かしこさよ陛下と同じ目の高さ
　遠山敦子文部科学大臣
文相の薔薇の微笑もしかと受け
　路郎・葭乃両先生比翼句碑尾道に建つ　三句
ふる里へいのちが還る句碑一つ
句碑除幕先ず人情の除幕かな
師の背なを流さんばかり酒供養
　腸閉塞検査入院
この齢で屁糞葛の仲間入り
いつまでも肚のくくれぬ役者かな
風薫る鯛美しく人やさし
五十年花径遥かに香爐峰

（完）

自選集

小島蘭幸

句集「旅人」ひらく尾道海のカフェ
初ヒットの動画は夢の序章です
体重計に乗ったことなどない妻だ
父はゆらゆら絶好調ともう言わぬ
孫の句集園長さんも驚いた

北野哲男

原爆とコロナで葉月埋めつくす
安倍総理災と言う字がつきまとう
嬉しさを月にも見せた千鳥足
農に生きでんとあぐらの父だった
独り居の母は諭吉と添い寝らし

木本朱夏

三密の日々なつかしく秋の風
コロナ収束夢みる秋の時刻表
へちまコロンピタピタ口紅は減らず
この夏も子らは帰らず遠花火
Ｗｉｔｈコロナ昨日の靴を脱ぎ捨てる

新家完司

箸二膳そろえる僕のお手伝い
ウイルスが僕を狙っているようだ
ウイルスに効かぬアーメンなんまいだ
酒瓶に取り囲まれて自粛中
もう少し生きて隕石拾いたい

髙瀬霜石

お経のように人生訓を聞いている
世渡りに必要らしいオブラート
無実とは思っていないけど無罪
狼にいちどはなってみたかった
もうええわなんて死ねたらもうけもん

竹治ちかし

生かされて生きて亡父の齢越える
中止延期コロナの中も季は巡る
今日もまた同じ所作して日が暮れる
気が付けば老いの仕種の僕が居る
早起きも早寝も友にして余生

津守柳伸

早起きの蝉は平和を謳歌する
納豆を試食するのも気の弱り
親切だカット西瓜に見る糖度
平和呆け諫める神のゲリラ雨
被災地をめざすヤングのボランティア

都倉求芽

子らが来て掃除洗濯墓まいり
36度終日クーラー扇風機
ぱらぱらの観客席にうねる声
ボランティアに感動してるお茶の間で
今さらにご破算ですといかぬ歳

西出楓楽

仏事勤める毎に息子は遠去かる
つまずいた石思い切り蹴っ飛ばす
いい祖母でいるには端金じゃ無理
老人力味方につけている強気
ウォーキングですよ徘徊症じゃない

仁部四郎

天高し千切りたきもの処方箋
天高し今日の鰯に明日の鯖
ひとしきり羊群騒ぎ天高し
天高し新聞社説虫眼鏡
天高し柳俳一如の説を読む

福士慕情

山菜の旬たしかめる道の駅
父母姉弟僕を遺して逝ったきり
訃報欄身内だけでというコロナ
新聞に腹を立ててる虫眼鏡
大木が倒れ若木に陽があたる

松本文子

私の心三角にして友の逝く
蟻の列ぼうーと見てる今日も暇
散った花想い果たしたのでしょうか
あの人に似た声だった風だった
バラバラの記憶組立てる夜中

三浦強一

八月の六日に続く祈りの日
被曝ピアノ奏でています反戦歌
ピカドンが決めた憲法第九条
迎え火にコロナ恐いと先祖様
人間の卒業ですと卒寿来る

三宅保州

そぞろ秋にわか詩人にしてくれる
秋のキャンバスに私を遊ばせる
センチメンタルジャーニー秋という舞台
和服着たあなたを置いてみたい家
思い出を畳み込んでる秋扇

電池切れ脳の回転鈍りだす
充電が進まず脳が退化する
脳みそがだんだん溶けていく気配
脳回路混線しだすことがある
脳回路どこか断線してないか

村上玄也

向日葵をやがて弔意の中に置く
残照をすだれに入れてなお無言
ポタージュに混ぜ込んでいる絵空事
線香に擬態を強いるのは酷だ
四二番が嫌なら僕が貰います

森山盛桜

おやすみなさい
遊んではいない泳ぎは仕事です
仕事中　すれ違っても眼もくれぬ
愛されていては此れしか泳ぎしか
思い思いの寝床で夜はやすみます
美しく泳ぎたいからマタアシタ

八木千代

コロナと戦う敵失弱体化待つ
コロナイメージ可視化をすれば黒いトゲ
米寿の夫の命の端を握ってる
自粛と散歩バランスとりながら
神経にチクチクささる詐欺メール

山本希久子

人生の余白荒れ地のままである
漬物と味噌汁今日も異常なし
人偏がときどき邪魔になってくる
咲くまではみんな大事にしてくれた
帰ろうか影がこんなに伸びたから

川上大輪

白菜が大きくなってよく笑う
南無母さんいつも奇麗でうつくしい
地球より重い命は兵の墓
地球上のすべての人に口づけを
イベントはチンで始まる炊飯器

板尾岳人

川柳塔

（つづき）

出来過ぎる女と暮らす肩の凝り
柿熟れる君と暮らした日々想う
ふわふわを切るにはふわふわの力
猫のように幸せそうに眠りたい
丁度良い広さでホッとするトイレ

西予市　西田美恵子

句集の森

『川柳塔誌寿古希記念句集』

小林一夫

そういえばしばらく虹を見ていない
青天白日　猫には猫の影法師
サヨナラの替わりに白い花もらう
美しいまま標本になっている
毒虫になりたし君を殺したし
鳥籠の中で生まれて死にました
抱擁へことさら淡き昼の月
光さしけり小さきものの足跡に
君はうつむきオート・フォーカス焦点ずれる
泣きたくて泣きたくて怒っている
死を照らす蛍光灯の下に座し
嘔きたるものがかなしく流る
空あかるくてつくづく淋し
母の弾くピアノほろほろ皿のひび
こっそりと明日のふたりで消えようか

（平成6年7月27日　発行）

温故知新

小出智子川柳集『蕗の薹』から

お互いの深いところで許し合う
陸橋で不意にいのちが軽くなる
ひっそりと咲いていたいと思う萩
炬燵の中の妻の思案はしれたもの
朝の湯呑みに軽い暗示がかけてある
出不精に雨もいとしいもののうち
お慕いしています悪口言ってます
引き出しを出るに出られぬ花の種
冨士山に初雪があり床払い
病むにしても中途半端な年のころ
はやばやと炬燵を出している自愛
ともしびを大切にして冬籠り
杖にする木なら一本植えてある
横になることも無駄とは思わない
友達を裏切り障子張っている
仮の世に生きているのをつい忘れ

西出楓楽選

弱点をしきりにつつく土ふまず
私の棘を潰け込む塩麹
軸足を浮世の義理にさらわれる
おろおろと虚勢張ってるちぎれ雲
一悶着丸く納めた一升瓶
免疫下がる話ぶら下げ友が来る

黒石市　石澤はる子

振り返り顔を確かめ合うマスク
ヒト科のエゴにレッドカードを出すコロナ
断捨離の背広のポッケから諭吉
気休めと分かっていても飲むサプリ
混乱は最初のボタン掛け違い
硬いほど心の芯も折れやすい

富士見市　中島通則

コロナ禍の外出自粛ふたたびか
晴れ舞台どこにあるのかアスリート
嫌味なら右から左うけ流す

大阪市　阪本秀子

猛暑日に脳天ひやすかき氷
完璧でなくともこころあれば良い
黄泉の父母降臨をする墓まいり

豊中市　松田蟻日路

明けたかと車洗えば夕立が
雷光を大楠の下に避け
歳のせいだからだけどで今日も行く
夏の夜だけど夢見る柄じゃなし
自粛中酒も我が家の味となり
今日終えて明日は明日の道を行く

神戸市　斎藤隆浩

猛暑にも逃げることない新コロナ
生命線途切れてるのでペンで書く
忘れ物家を出てから思い出す
ブランドの袋を持ってスーパーへ
断捨離でおれの物だけメルカリに
コロナに猛暑テニスは自粛五七五

コロナ禍が買わす大型冷蔵庫
GoToと言われあの世に想い馳せ
座敷での会合腰がお断り
お誘いに送られてきた入門書
初蝉に気づかせなんだ耳のセミ
日傘持つ男が保つディスタンス

宝塚市　岸田万彩

爺と孫本気で挑む本将棋
何事も本気になれぬ浮気性
猛暑日と言えど立秋鰯雲
コロナ禍もこの世の試練受けて立つ
試練越え心豊かに老いの日々
リフォームし母の形見のきもの着る

羽曳野市　黒木ひとみ

原爆忌胸に響かぬ総理の辞
炎天下働く人に幸有れと
蓮の花千歩楽しむ散歩道
夏本番涼しみながら手を洗う
自粛して独り銘酒を楽しまん
マスク外す人影見えぬ裏通り

大阪市　樋口眞

良きことだけ聞える耳にしています
絵文字メール脳活動のおばあちゃん
要領良く妥協してます一病と
どさくさが我が家いっぱい死ねません
美しく死にたい邪魔なもん捨てて
スタミナが余って困るコロナ禍で

大阪市　柴本ばっは

振り向けば相手も見てた間の悪さ
エコバック私フロシキ家紋入り
梅雨明けた動け働けセミ急かす
さよならのメール消せずに秋が来た
モナリザもふっくらお腹手で隠す
おばちゃんの飴も塩味汗止まぬ

三田市　中山昭美

しわ白髪無駄な抵抗やめました
三密を二階と下で倦怠期
さて今日は何を食べるかあみだくじ
めでたくもないけどわたし長寿です
夫の名を妻は呼び捨て義母の前
汗だくで敢えてラーメン暑気払い

和歌山市　定松宏枝

霧笛鳴る別れた人を恋うように
空想の森こんぺい糖を敷きつめる
チョコレートゆっくり溶ける甘い夢
幸せの欠片を浮き雲に乗せる
夏ゲーム終わって帽子色褪せる
慎重な影がなかなかついて来ぬ

山口市　中前幸子

ボランティア泥の背中に黙礼を
米撒いて雀手懐け家ごもり
同病が居たぞ匿名深夜便
気に染まぬ誘い断る時節柄
おはようのオウム返しは語尾を上げ

神戸市　青山　ひろし

最上川俳句を超えた水の量
長い梅雨明けて生り物水臭い
容赦ないコロナ猛暑の令和夏
歯の白さアピールさせぬ新コロナ
焔消え心静かに75忌

神戸市　近藤　勝正

温暖化海に山にと牙をむく
猛暑日に意外と遠い徒歩五分
ゲン担ぎ靴下そっと赤にする
この夏は綿菓子ラムネ出番待ち
孫たちが古いオモチャを輝かす

神戸市　櫻井　崇史

二十七若きあなたよ古びた写真
君を恋う夏は寂しき暑さなり
公園のあらゆるにおい風の中
雨が降るラジオ体操今日は無し
コロナコロナああ悩ましき日を送る

神戸市　田本　古鈴

わたしの浴衣じゅうぶん似合う子に育ち
下駄そろえながら子離れ考える
コロナニュース出歩くなよと合い言葉
生真面目なドクター説明も長い
日曜日必ず痛くなる奥歯

神戸市　米田　利恵子

マスクして朦朧とする炎天下
3密で実るピーマン茄子トマト
立秋といえども外気40度
煮え切らぬ人に苛立つ砂時計
毛布着て快眠山の一軒家

尼崎市　清水　久美子

年金暮らしの幸せ噛み締める
リストラの波がだんだん暴れだす
血糖値六十ですとホッとする
手術にも不要不急があるのです
蝉の羽蟻の餌食で朽ちていく

尼崎市　山田　厚江

さびしくはないかぽつんと案山子立つ
ほんものの素顔を映す朝鏡
ほんものの自分見詰める座禅堂
枕元避難グッズを置いて眠る
男結び決して絆解けない

伊丹市　延寿庵　野鶴

言の葉の陰で心を遊ばせる
十指染めだれを待つのか彼岸花
悔いのない命積みます二人して
魂がふんわり降りた風の駅
きっと彼人混みのなか縫いながら

三田市　稲角優子

ガタゴトの福知山線旅気分
新婚の味つけ次第の冷奴
コロナ災害オロオロと立ち尽す
気がつけば終着駅に近くなり
流れゆくゆきのあいの空秋ちかし

三田市　木村マユミ

穏やかな流れ一変魔の大河
今日も雨古傷痛むこの時節
一人言泣いて怒って大笑い
佃煮も好き嫌いあり詰め合わせ
面取りで料理上手と誉められた

三田市　住吉美和子

楽しみの外食二波が邪魔をする
テレビからコロナの恐さ知らされる
ストレスが間食に手を延ばしすぎ
暑すぎる怖さもつのる二波コロナ
真夏日は気の向くままの生活で

三田市　辻開子

老いるはず曾孫の顔がもうすぐに
神さまがきっと怒っているコロナ
うつ病がぶり返しそうこのコロナ
責めるだけ責任の無い野党連
１００年に一度の事件このコロナ

宝塚市　太田としお

お買物スマホでさっとお支払い
新コロナ外出せずに予防する
帰るなり手洗いせよとせかされる
老いたのか古き昔をなつかしむ
取り出して広げてたたむ古着です

丹波篠山市　横溝安子

大花火見えず哀しい夏盛り
公園の祭りも消えて子ら何処
コロナ禍を知らず合唱蝉の声
戦争も地震も知ってコロナまで
成し遂げて風のやさしさ軽い靴

三木市　山口ヨシヱ

一波乱毎に女が強くなる
断捨離をとことんやって気が晴れる
旅立ちは白装束と決めました
一度だけ走ってみたいかたつむり
レントゲン美人かどうか分らない

西宮市　髙橋千賀子

手をつなぐ温かいもの流れてる
テレパシーの会話見つめあう老婆
染まらずにわが道をゆくカタツムリ
竹もオレも天へ天へと伸びたがる
蝉目覚め喜びのうた歌い出す

生駒市　饗庭風鈴

青田風日傘の中を通り抜け
潮風に誘われ降りた旅の駅
帰りたいふるさとがある日暮れどき
諭すよにローソクの灯が揺れている
あの頃に想いがめぐる走馬灯

和歌山市　北原昭枝

鯛は秋を呼び寄せ消えてゆく
蟻さんに我身捧げる蝉さすが
エアコンと扇風機とで息つなぐ
八十路あたまは丈夫ただ感謝
GoToの旅行邪魔する新コロナ

和歌山市　福島一雄

油虫寿命だったか死んでいる
マスクして自転車やはり息苦し
チャンネルを変えてもコロナばかり言う
直葬もいいなと思うコロナの世
派手派手しいハズキルーペのコマーシャル

和歌山県　森下よりこ

瓜坊もお墓のだんごねらっている
白粉もち水苔したたる不動尊
横なぐり五分自粛の通り雨
廃止路線町営バスが過疎守る
引き上手くじ引き満貫天を引く

鳥取市　上山一平

猛暑にも負けぬコロナの陣取図
真夏日は一人が良いなマスクせず
ぷよぷよしわしわの腕を晒す夏
ひ孫の絵埴輪のような婆の顔
核なき世叫んでほしい首相殿

倉吉市　宮田風露

釣果ゼロ帰りは店で鯛を買う
リセットが難しくなる八十路坂
並木道緑の木陰癒される
地球からすっきりコロナ消えてくれ
散髪をすっきり終えて野良仕事

境港市　藤原久直

三度目はさすがに聞けぬ相手の名
少しだけ品良く演じワイン飲む
豪邸の裏に回ってホッとする
恋愛はドクターストップかかってる
AIがおかえりという寂しい日

米子市　妹能令位子

鳥取県　飯野菖子

窓の外小鳥が遊ぶ五月晴
ウイルスで家で遊んで日を暮す
休校の孫と遊んでくたびれる
澄み渡る五月の空に田が光り
祈ること多くなります老いの日々

松江市　中筋弘充

片想いだった人とも会えるクラス会
明日は行く所があって早く寝る
幸せな人の話はつまらない
義母が生きた家に立ち寄る霊柩車
振り向いてあげて欲しいね厚化粧

尾道市　小畑宣之

せせらぎに負けぬ虫の音山の宿
朝刊のバイク近付く六時前
金婚式愛の欠片が残ってた
幼き日チョコの欠片は宝物
悲しみは日にち薬が大事です

竹原市　若年幸子

コロナには関係無いと草元気
クラス会中止の知らせやっぱりね
コロナにはお気を付け遊ばせ閻魔様
痺れます真夏のアイス至福時
グレートネイチャー地球まだまだ謎だらけ

府中市　岸田武

遠くから頷くだけで通じます
デジタルの時計がかえてあるトイレ
隣から回覧板がポストまで
僕の顔だ細工は何もしていない
アクセルを踏みすぎたのか膝にきた

三原市　笹重耕三

説明責任だれも果たした事がない
コロナ禍でマスク美人が増えました
少年の味方に母のオムライス
半額に飛びつく通販のサプリ
飽食の国で会話が噛み合わぬ

阿南市　小畑定弘

溜め息かＡＴＭの刻む音
アクセルを吹かして登る喜寿の坂
ふるさとに負い目があって見る夕日
あの星はボクより先に逝った妻
巣ごもりの男の鬱が呻る酒

松山市　大内せつ子

歯をみがく今日を静かにスルーする
古都の夏汗かかん人おるそうな
あなたの誓いしっかりラップしています
居心地が良すぎて背骨まるくなる
モナリザの口元すこし見せた欲

徘徊でないから万歩計を持つ
リモートで人を愛したことはない
人間の我欲で伸びるバネ秤
逆風へ大和撫子よく撓う
各停で自分さがしの旅に出る

今治市　永井松柏

茶飲み友これも私の恋かしら
ふわふわの夢を見ているベビーカー
楽しんで学ぶ幸せ知っている
手を組んでおこう将来への投資
ライバルのアキレス腱に触れそうで

大洲市　花岡順子

球音も鳴子も聞けずセミ時雨
キュウリ揉み炎暑コロナを一凌ぎ
丑の日だうなぎもギュウも大歓迎
おばあちゃんチャリンコ杖のかわりもし
胸の内修理道具が百種ほど

高知市　三谷松太郎

秋だから哀しみだけを届けよう
赤い傘これが精一杯の今
ガラスより脆い私が立つ窓辺
盗まれた呼吸返してくれないか
ふらついているのは景色だと気付く

佐賀県　真島久美子

マンネリに風を吹かせてやる気出す
自粛して親子ふれ合い密づくり
積ん読の部屋に新刊仲間入り
愚痴聞いて友の不安を軽くする
自粛してスマホの時間長くなる

沖縄県　あらさくら

北国も夏の暑さは変わらない
雪に耐え太陽に耐えりんごの樹
たわわなる日まで微笑み忘れない
木漏れ日が見つけてくれた明日の地図
収穫を喜ぶ手と手頬と頬

黒石市　北山まみどり

太陽に吠えてた頃のミニバイク
満点の日も零点の日も握り飯
ヒマワリがまだ咲いている生きなくちゃ
母の背を見ながら私母になる
ドア全開風をハグするキスをする

弘前市　高森一呑

金じゃない地球のためのマイバッグ
真っ新なニュース流れる午前五時
床の中で今日のローテーションを組む
坂下の薬局までが遠くなる
俺の代で終わりだと言う農家増え

白河市　鈴木たけし

幼き日母のうちわの風の音
リモートで子等と会う日は紅をさし
猛暑日は蚊も白旗を揚げるらし
給付金足が出たけどありがたい
好き嫌いないけど虫は苦手です

横浜市　巖田かず枝

八月の太陽いとし梅雨の明け
百日紅コロナの鬱を吹き飛ばす
検温とマスク外せぬジム通い
発送日守る結社の底力
コロナ禍に届く吟誌のありがたさ

横浜市　加藤佳子

チンだけで出来る料理を伝授され
マスクに帽子なぜ分かったのわたしって
ペディキュアに元気もらって出かけてく
ナマはいいね花も旅行も人間も
式典に来賓なしも良いものだ

横浜市　長島亜希子

慢心を責める太鼓の乱れ打ち
小雀を呼んで遊ばす鬼瓦
後ろ手の花が狙ったサプライズ
山容がやさしい里はもう近い
形から入って心整える

岐阜市　喜多村正儀

どの薬飲んでもパッとせぬ頭
コロナにもきらわれている生きている
どの道を選んでみてもピエロだな
せんべいに負けてしまった総入れ歯
ステーキを差し歯気にして食べている

浜松市　中田尚

地元との絆誇りの道の駅
やっと出た一言にあるお人柄
考えが緩いと波が立ってくる
クロネコが届けてくれた国訛り
シンプルな考えだから楽になる

名古屋市　冨田末男

凡帳面だけで越せない峠道
波立てず期間限定生きてみる
誕生日確かあるはず缶ビール
イヤな奴マスクの中で舌を出す
許さぬも許すも空に丸い月

八幡市　武田悦寛

熱帯夜明け朝顔と脳に水
体温を沸騰させる蝉しぐれ
ページ繰る風と木陰で俵万智
扇風機の前で地蔵になった猫
汗かいた日の締め冷酒冷奴

大阪市　石田孝純

大阪市　岡田恵子

とりあえず飛んでみろよと空の青
ひまわり畑一本だけが拗ねている
大福を二つ食べれば治る傷
香水をかえて別れを告げに行く
暇だから真紅のルージュためし塗り

大阪市　近藤風羅

初盆と手帳に記し友想う
スピーチの乙女のまぶし原爆忌
梅干してステイホームの夏ぞ佳き
本家でも宗家でもいいおいしけりゃ
里行くな旅行行くべしむずかしや

大阪市　中村民子

晴天に干したTシャツ密になる
ハッカ油をマスクに散布蒸れ防ぐ
沈香を焚いてようやく落ち着いた
いい人を卒業すれば生き返る
そういえば昨夜は何を食べたやら

大阪市　降幡弘美

買ったあとたくさん届く桃の箱
地球からすれば迷惑なのはヒト
普段なら言えぬことまで言うネット
日焼け止め忘れた時に限り晴れ
新入りの口元見ずに夏が来た

大阪市　森　廣子

暑さ忘れて貴船の床で飲む冷酒
兄弟で辿る縁の盆供養
百円の朝顔今朝も三ツ咲く
テレビの中の花火やっぱりおもろない
やさしさが裂けたハートにしみて来る

池田市　上山堅坊

風呂上がり鏡が笑うメタボ腹
朝の目覚め忘れそのまま逝った妻
永遠に遊ぶと決めた趣味の森
しんみりと思い出たどる独り酒
地味な爺せめてパンツは赤にする

泉大津市　助川和美

コロナ以後冷凍室が混み合って
コンビニに放置自転車見馴れてる
一円の料金不足戻る文
日焼けの子大の字に寝る夏休み
人間は豪雨に勝てず無力知る

門真市　坂本星雨

風鈴へ蝉が止まっている酷暑
素顔だと我が儘ばかり言う鏡
善人の仮面を外し書く日記
独りでは贅沢すぎる桃一つ
送り火を終えて独りにまた戻る

河内長野市　穂口正子

おさげ髪私が笑うセピア色
インバウンド太い柱が崩れ落ち
遠からず死ぬ身といえどコロナいや
連れ立って亭主の老いを見る散歩
取って代わる奴などおらん君の夫

堺市　羽田野洋介

満点でなくていいんだパスすれば
鼻歌をさかなに男独り酒
タブーだと聞けばなおさら覗きたい
締切りが迫り慌てて指を折る
道楽で始めた趣味にはまり込む

吹田市　岩口のぞみ

五輪なく行き先もない盆休み
誰だろう声かけてくるマスクの人
旅行先行ったつもりでお取り寄せ
会議中あくびマスクでばれてない
長過ぎた梅雨が明けたら野菜高

豊中市　齋藤奈津子

井の蛙大海知ってUターン
梅雨晴れに食卓飾る海の幸
自粛解除いのち洗濯まだ遠い
娘の車乗ればはらはら口が出る
ありがとうの手を解き母は天国へ

寝屋川市　廣田和織

蓋されて微熱をもっている秘密
守られて今も秘密でいる秘密
秘密すら持たぬ男の薄い顔
恍惚の母に秘密も過去も無い
柩には秘密その他を閉じ込める

八尾市　田邊浩三

眼と耳が光って見えるマスク顔
髪の毛が伸びなくなった歳かなァ
腰痛を運動不足の言い訳に
梅雨までもコロナ負けじと攻めてくる
今朝もまた腰痛泣いてくれる蝉

大阪府　大浦福子

味もみずすぐに醤油をあかんやろ
最後まで聞かずに怒るのやめてんか
イビキに寝言トイレ三回 なんぎやわあ
かなんなぁ初めて会って「歳いくつ」
なんぎやわぁコロナがヒト科試してる

大阪府　髙木道子

お日様にトマト頬染め一目惚れ
墓前の僧お経をはしょる暑さゆえ
運転の老化レベルを試される
コロナ禍も蟻に自粛は不用です
黒マスクに山賊めいて見える人

朝まだき涼やかな声ホーホケキョ
ケキョケキョと失敗するのもかわいいね
被爆国旗を振らずに何とする
浮かばぬ句ひねもす頭ひねっても

神戸市　石川克美

愚痴ぼやき演技も堂に持ち味に
生きなおす悔いの欠けらが邪魔をする
他愛ない約束だけど日日のバネ
老友がすする麺の勢い活もらう

神戸市　奥水弘

ちっぽけな愛をポッケに一人旅
弱いけど恩と情けはたんとある
肩たたき亡母の笑顔残る郷
自己主張マスクのかげで弱くなり

神戸市　山根弘華

近づいたおやじの歳に身が締まる
父寡黙底抜け笑う母がいた
バラマキの金そのものに罪はない
スイーチョン久々に聞き童心に

芦屋市　新阜義明

センス問うマスクの柄もよく喋る
摘み取った百合の香満ちる応接間
針の穴堂々抜ける新コロナ
掘り下げて行くとこだわることもない

伊丹市　岡村風琴

長い梅雨少しの晴れ間洗濯を
マスクしてもごもご言われ聞きにくい
爺婆が夢に出てきて墓参り
晴れ望む孫の遠足この日だけ

伊丹市　平井富夫

リモートのデート波長がかみあわず
収穫期かかしが見張る夏野菜
育メンの株を上げるかテレワーク
古手紙文字は褪せてもあせぬ恋

小野市　田中辰夫

ページ繰りアルバム中の亡母に会う
僕の墓徳利型にしてと言う
渓谷の流れのような母だった
ここまでと言いつつ夫の増える酒

三田市　生田えい子

世界は自粛こんなに青い空なのに
紫陽花にお礼肥する雨あがり
リモートワークベビーハイハイ写る部屋
ナビよりも近い畦道里の村

三田市　幸田厚子

水害に地震にコロナ難儀やなあ
髭隠し目の優しさが際立って
来客にマスクで隠す病み上がり
男でも花柄マスク絵になるね

三田市　中山寅男

三田市　馬場貴美江

梅雨あけた待っていたのは熱射病
立秋だ次々聞こゆ蝉時雨
令和二年コロナで月日過ぎそうだ
盆帰省国と自治体相反す

三田市　森玲子

朝四時半虫と小鳥のコンチェルト
蚊も寄りつかぬ夫おいしくないらしい
家電も寿命連鎖続きで出費増え
２０２０世界にとって凶の年

丹波篠山市　澤良子

厚化粧マスクに帽子あなた誰
老いてまだ好奇心だけは青春
野山にもピーチクパーチク友を呼ぶ
草刈機使い終えれば気分好し

丹波篠山市　藤井美智子

和顔愛語心にいつも持ち歩く
コロナ禍へめりはりつけてうまく生き
健康が夏をおいしく食べさせる
この暑さエアコンぎらいも負けました

西宮市　高瀬照枝

私未だやる事残す八十歳
今頃の天気図告知は素晴しい
老いて行く背のびは大変日日の家事
声弾み笑う日多いそれが良い

奈良市　尾畑なを江

人生にあんなこんなもまさかまで
こだわりにしばられていた若い頃
この頃は思い出したら夢に出る
庭の草暑いと余計青々と

奈良市　仲西賛郎

最上川芭蕉で名上げ豪雨泣く
四十余年床屋に行かず妻頼む
何十年同じお医者で同じ薬
倦怠期とうに乗り越え衰退期

奈良県　室田行久

入院来苦しみ続く便秘症
尾頭付き赤飯炊いて祝砲を
憂いなく食事味わう腹一杯
ウイルスが孫と面会シャットアウト

和歌山市　倉橋悦子

封を切る今日を確かなものにする
鉛筆がコロナコロナと書きたがる
一人から家族になってまたひとり
乗り切った夏に残暑のおまけ付き

和歌山市　佐藤まき

七十五年消えぬ悲しみ原爆忌
戦争の紅蓮地獄を逃げまわり
この平和戦争犠牲乗り越えて
頂いた余生感謝を忘れない

和歌山市　鍋嶋　澄子

コロナ禍が終息したら旅へ行く
あじさいよ来年会おう剪定す
長雨にカビははやさぬ負けやせぬ
銘菓たべ蘊蓄ばかり美味しいか

和歌山市　西川　千鶴

老猫にへそくり譲る遺言書く
孫いない俺に延延孫自慢
回覧板そろそろ来ると紅をさす
使い捨てマスク五回も洗う妻

和歌山市　まつもと　もとこ

恥を知る小さい布のマスクして
悪戯にかかったフリをしてあげる
満月は丸いまんまだホッとする
コロナなどどこ吹く風のネコはネコ

岩出市　村中　悦男

高齢へ更に三密倍淋し
考えが過ぎて気がかり拾いすぎ
焦る気も四囲を眺めてまた明日
開いたページ小虫忙しく読みに来る

和歌山県　三枝　眞智子

ふる里へ続くレールが呼んでいる
無記名がカンフル剤となる恐怖
大臣の椅子も軽あるくなったもの
おむつ替えおんぶに抱っこパパ任せ

鳥取市　大前　安子

お遍路の石段の数試される
自画像へ一日一色加えよう
そうかそうかと聞き役の知恵が増え
シンプルなことばへ愛を込めている

鳥取市　山野　すみれ

給付金上手に使い残わずか
関われればみんな優しくなれる筈
掃除した網戸の風で盆迎え
自粛してのんきな空気吸って吐く

倉吉市　伊藤　嘉昭

また欲しいコロナ来た二次十万円
美人見る古希でも踊る心臓音
やる気持て孫に言う前子に言って
咲かそうや最後の華を夫婦なら

倉吉市　大羽　雄大

のどごしが良くなってきた回復期
村からのバスは赤字を乗せてくる
耳にタコ硬くなってく愚痴小言
のほほんも意外計算には強い

倉吉市　堀　かずこ

喜寿迎え老いても私気は若い
心まで老いてはいかぬ笑顔だよ
ひらめいた夜中に起きてペンを持つ
長雨でつめあと残し梅雨明ける

境港市　中井虎尾

オールドマン横モジブンカメガマワル
夢昭和昼寝さめたらここ令和
ジジが書く頭フリフリ時事の吟
少子化が大和少数民族に

米子市　川本美津子

散歩道ふたつの虹で止まる足
戦争を知らない子らも高齢者
朝帰り無言で開ける家のドア
変わりない日々に求めるよき刺激

鳥取県　下田登茂子

家の恥言わないように蓋をする
天不順老母の体も腐り出す
幸福と言う日が欲しい古希の坂
腹立ちは独り言でも言ってみる

鳥取県　田中重忠

唯今と郵便受を開けてみる
得意気に輪を大空にかく鳶
生きたくて朝夕散歩しています
ジャンプする河鹿カエルの力瘤

鳥取県　西谷悦子

ご先祖にご無沙汰詫びて墓参り
マスク着用すっかりと定着す
家周り夏草取りにおおわらわ
窓際にちょっとした花忘れない

松江市　相見柳歩

恋文を書こうほとけに書くように
立ち止まる時間をあえて多くする
再起して倍増させる優しさを
人生の師走に笑う強いひと

出雲市　黒目ひでお

咲かせたい笑顔の花を世界中
老い支度そろそろせねば誰がする
ステイホーム本とテレビが友だちさ
世直しの夢を力に生きてきた

雲南市　永見安子

被災地を思えばこれも我慢でき
心配は子までと思うに孫までも
問うてみて自分で答え出している
味方してくれた人皆先に逝き

益田市　篠原紋次郎

令和には桃の流れる川が無い
春の朝小菊を母の墓場まで
夢は夢なりあっさり今日は諦める
生きてきた足跡だけはつけておく

安来市　原徳利

なまくらの体で焼きが入らない
右がよい左もよいと飛ぶ綿毛
守秘義務をしっかり守るカタツムリ
悪酔いの酒が内緒を暴露する

笠岡市　小野美那子

ありがとう心ゆたかになる言葉
ハンカチを拾ってくれたのがはじめ
流れ着く腹すえここへ根をおろす
永久の愛渇いてませんまだ傘寿

瀬戸内市　宮宅比佐恵

コロナ禍がどうあれ命守る策
写経するコロナ退散祈りつつ
巣ごもりも趣味の句作り身を助け
誰にでも後悔あると言うものを

津山市　髙橋由紀女

だんだんと理解出来なくする睡魔
凹凸の人生洗う洗濯機
風に揺れ雨に打たれて七合目
すれば済む事が出来ないああ気力

美作市　岡本余光

最期まで続ける自炊覚悟する
古里で客扱いにある悲哀
目を閉じると直に転た寝老いたのか
無駄話ほんの少しで気は和む

広島市　田桑恵子

化粧いらず時にはマスク都合いい
今生の命と知るか蝉シャワー
蝉時雨指揮者いる如ピタと止み
暗証番号タッチしながらふと不安

広島市　常國喜好

赤い爪妻よおまえも反抗期
不細工な顔で私の保身術
とっさには名前の出ない老いふたり
妻のサイン見落とし続く無言劇

広島市　松尾信彦

ハミングが早くも秋の旅プラン
引き際に清涼感の好感度
良妻も賢母も終えてジム通い
ポケットに本音建前大雑把

尾道市　小川道子

我先と血気にはやる開店日
向かい風追い風やがて無風なり
生かされて果てしなき夢追う齢
スマートな生き方に添う風に添う

竹原市　土井輝恵

サンダルも服も買わない夏過し
再放送逝った俳優偲びつつ
三人で三角形を作る幸
傘寿とや切り売りしたい歳の数

今治市　渡邊伊津志

誰にでも合う歯車を母が持ち
以心伝心歩幅揃っている不思議
ローギアが妻の短所でいい所
飾り気のないおふくろが温かい

デッサンの前に額縁選っている
今日の呪文デキルデキルと言ってみる
五時前に起きて一日長いこと
発言をしないといい人に見える

松山市　郷田みや

裏の水田小鳥や鴨の遊園地
うなぎ仕様白身魚でがまんする
壁のきずタマがつくった遺産です
きゅうりトマト頂く時は一緒です

福岡県　本田さくら

乱視です満月三日月二個ずつに
神事のみまつりの由来厄払い
煩悩と情欲がらみこの浮世
生かされて他力本願ナムアミダ

唐津市　岩崎實

メイドインチャイナに染まる世界地図
キリギリスでもなく蟻でなく生きた
長生きへ五臓六腑も呆れ果て
通帳が仰天してるゼロ五ツ

唐津市　前田廣幸

コロナ禍に電車に乗るも命懸け
母の愛いっぱい詰まる蕎麦枕
川柳に支えて貰う胸の内
スケジュール病院だけのカレンダー

宮崎県　黒木栄子

秋暑しひねる水道お湯が出る
なぜ鳴くの夜八時まで蝉に聞く
孫子守り週休二日の応援
鈍感に聞く話すメモ三拍子

沖縄県　禱モモト

草むしり去年今年も同じ種
小顔にはすっぽりくぼむ布マスク
占いもその日の運気ポジティブに
咲く散るも群れの小花も競わずに

五所川原市　むらのひとり

満月にたゆとう珊瑚お産する
建売のオプションとするゴムボート
死ぬ意思を貫くための貯金する
老成もラストピンチの家仕舞い

仙台市　月波与生

熱帯夜人のカタチの難しさ
ショートステイショートが取れて父帰る
孝行ごっこだったなぁと帰り道
着痩せする人の夏の輪郭線

枚方市　廣瀬良磨

こじんまり線香花火ベランダで
自粛中暑中見舞いはオンライン
満月と冷えたビールを飲んでいる
体力は大丈夫かと万歩計

久しぶり全身受け止め陽の光
国の金違う所に使ってる
自粛して生活パターン限られる
コロナでも天真爛漫子の笑顔

東京都　高岡弥生

さりげなくわざとふれ合うすれちがい
ちがいますコロナじゃなくて夏風邪です
積み重ね深い懐知恵しまう
残り火が夜風にあたり吹き返す

神奈川県　小田幸子

川柳を詠めば詠むほど迷い道
柳誌には感性の虫百万尾
積ん読で書架が悲鳴を上げている
本棚で途方に暮れる入門書

石川県　堀本のりひろ

青空と太陽光を胸に抱き
議員さん今こそ日本守ってよ
冥土ではコロナ話で大さわぎ
生きて来た戦前戦後そして今

静岡市　渡辺芳子

借金とマスク押し付け安倍政治
夏空の花火を止めた新コロナ
二度とない今日悔いなく生きてゆく
病窓の流れる雲と遊ぶ日日

名古屋市　山本三喜夫

稲光遅い雷鳴まだ先だ
鼻歌の途切れたときの孤独感
勘の良さひらめき早い苦労人
青虫が食べた青菜に害はない

江南市　脇田雅美

湿布はる手伝うまでに育つ孫
届いたがアベノマスクは役立たず
乾杯にウーロン茶では不満足
大変な誌上大会楽屋裏

豊橋市　西郷紀美代

ディスタンス密避けすぎて人恋し
懐の十万円に励まされ
引きこもり食欲減って丁度いい
生きてきた内なる神に支えられ

大阪市　中村峰子

企業は赤株式だけが踊ってる
毎日の親の生き方子は習う
第二波のコロナが襲う夜の街
暑い夏氷まんじゅう思い出す

大阪市　前川善之

訃報欄気になる年になってきた
育成へ出来ないことをさせてみる
スマートフォン利用もっぱら電話だけ
しあわせは心の中に住んでいる

大阪市　松田聰

古稀近づいて父母への感謝増してくる
ランチ予約しさあ墓掃除精が出る
ひと試合でも気迫伝わる球児たち
コロナ鬱野菜育てで乗り超える

大阪市　宮本千恵子

天の川氾濫したか雨続く
コロナ禍でパラソル立たぬ海の家
茶を点てる白足袋色香息をのむ
人生の海後悔あるも泳ぎ切る

池田市　倉本一弥

レジ袋三円払いゴミ袋
雨止んで初セミ鳴いて熱中症
バスの中個性主張のマスク咲く
梅雨の音こころ和らぐ音色かな

茨木市　細田マキコ

健康で暇は充分金がない
親に似て恋に溺れて迷う孫
序二段から賜杯つかむ照ノ富士
五輪よりコロナ旋風吹きまくる

河内長野市　渡邊修

これするなあれもするなとコロナ避け
どこに居るかわからぬコロナに脅えてる
明日あるから今日も元気に床に着く
コロナ蒔き知らぬ存ぜぬ通す国

堺市　古川光雄

庶民には不要不急はありません
何もかも若手に譲る齢になり
十万円骨折治療に消えました
赤信号子供居るので渡らない

高槻市　三谷白黒

コロナから熱中症へ立ち向かう
ポイ捨ての用済みマスクお気の毒
朝の散歩心安らぐ池の蓮
巣籠りで犬猿の中老夫妻

豊中市　荒木郁子

自販機に張紙がある「休みます」
握り拳作って堪える歯の治療
十万円楽しく使え天の声
降ってるか手の平出して確かめる

豊中市　貝塚正子

青蛙泳ぎ涼しい川の岸
祖父祖母と居眠りさめてアイス食べ
茹で卵きれいにむいて夕食に
お目度う白寿誕生何が良い

寝屋川市　坂本ミヨノ

履歴書に書けぬ悔しさ三流校
宴会が嫌で寝込んだ日を思う
美しい嘘が言えずに敵だらけ
パワハラの上司のメールノーアンサー

東大阪　秀爺

八十路坂終活まだと痩せ我慢
母ちゃんの気分波あり僕避難
黄泉の国コロナいないと招待状
酔わないと心の殻も堅いまま

枚方市　谷　英也

いい時代に生まれたねと言ってたはずが
喜寿の夏『老人力』を読み直す
朝ドラが始まる今日が始まる
朝がきた歯みがき目薬コーヒーの香

八尾市　山川　寧

しっかりと値踏みをしあう初対面
ライバルが去って職場の活気失せ
シャチハタで捺した念書は受けとらぬ
不老不死それじゃお化けとかわらない

大阪府　奥野健一郎

癌告知三度も受けた我悔し
百年に一度のコロナ恨めしい
神様も横を向いてる新コロナ
責任をとらぬ政府が永続き

京都府　北野　クニオ

ひとこと募集

一行15字　25行まで　採否は編集部に一任の事

川柳中興の祖　井上剣花坊
生誕150年記念誌上川柳大会

題　詠（各題2句・共選）
「柳」　真島久美子選・森山　文基選
「樽」　野沢　省悟選・真弓　明子選
「寺」　徳永　政二選・平　宗星選
「剣」　梅崎　流青選・高鶴　礼子選
「花」　新家　完司選・大西　泰世選
「坊」　佐藤　岳俊選・石川　川柳選

自由吟（2句）　細川　不凍選
投句料　1000円　（切手不可）
投句用紙　自由
投句締切　11月20日（金）必着
投句先　〒167—0031
東京都杉並区本天沼2—42—1
平　宗星方　東京川柳会事務局宛
問合せ先　東京川柳会事務局
電話　03—3396—6030
川柳人社・東京川柳会　共催

英語 de Senryu⑯⑥

麻生路郎句集『旅　人』

英 訳　吉村　侑久代　Kim Horne

夢をみてゐるうち　家賃滞り

while I dream of
my dream
I fall behind with the rent

母の子に　違ひはないが　アナキスト

Mother, I'm your son
whether I am diligent
or an anarchist

---

while ～の間　*dream*　夢を見る（動詞）夢（名詞）　*fall behind*　滞納する
whether A or B　AであろうとBであろうと　*diligent*　勤勉な　*anarchist*　アナキスト

～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句㊻ 英語俳句を授業に導入

教育の現場に英語の俳句を導入したのは私が大学教員を始めた30数年前になります。学生の海外研修報告がきっかけでした。学生はホームステイ先の小学生に、「日本の事柄を説明できないのにどうしてアメリカで英語を学ぶのか」と聞かれ、答えられなかった辛さを語りました。何とかしなければと強く思いました。当時、教育界においても国際化・異文化相互理解教育の必要性が論じられて、英語教育も自国文化の発信へ主軸を置こうとしていました。そこで考えたのが学生発信型の授業でした。

学生が日本事情に関して自信を持って英語で説明し、実技も加えて発表する学生発信型の「英語演習」です。例えば静岡出身の学生は、茶摘み姿で茶摘み歌を披露し、茶摘みのあらましを英語で説明するというような授業です。

また「英語表現」のクラスで英語俳句を導入しました。課題の英語俳句を筆者のパソコンに送るように指示しました。第1次選として学生の作品を筆者が選びます。授業では選句した句から学生が第2次選を行います。友達によって選出される英語俳句を作りたいと学生の創作意欲は燃え、同時に英語力も向上しました。

また英語俳句を和訳して「全国学生俳句コンクール」に応募した結果、文部科学大臣賞を手にする学生も現れました。

筆者も自己研鑽として英語俳句の創作や翻訳に取り組みました。当時、日本における英語俳句の定着にパイオニア的な役割をしたのが『*Newsweek* 日本語版』の「*HAIKU* 歳時記」欄でした。1988～1990年まで週1回、当選作が掲載されました。発売日に自分の作品が誌面に載っているかドキドキしたことが昨日のことのように思えます。

誹風柳多留一三篇研究 2

小栗清吾・細井龍夫
伊吹和男・高野範雄
山田昭夫
清博美

8　**こん立の外にころぶを弐三人**

小栗　料理の献立の外に「転ぶ者」すなわち踊子が二三人呼んであるという行き届いた宴会。

こんだての内にハないが三四人　筥一19

細井　賛。留守居役の宴でのこと。外交交渉には酒池肉林。

清　賛。

9　**口おしい事いゝとりに飯をもり**

小栗　言い取りは、言葉に出してのべること。説明。口述。陳述。釈明。いいひらき(「江」)。

ここで「飯を盛り」は「飯盛女郎」「宿場女郎」のことだろう。句意が今一つはっきりしないが、宿場女郎が、表向き「飯盛り女」として認められていたことを踏まえて、例えば品川などは吉原に準じた立派な遊里なのに、「釈明として飯を盛っている」「飯盛りということで申し開きをしている」のは、口惜しいことだというようなことであろうか。

江戸ハ大キい口チ〳〵てめしをもり　天二桜1

細井　賛。表向き遊女とし言えず、飯盛女としか言えないのは残念だ。吉原に対して劣らないのに、と品川勢のぼやき。

海道一の遊君ハ十匁　筥一25

高野　賛ですが、別解として、ほんの少し、遠慮して言ったのに、その通り飯を盛りやがった。口惜しいったらありゃしない。このような解はないでしょうか。

山田　礎賛。釈明として「飯を盛り」ですから、高野兄説は成り立たないと思います。

清　同。

10　**しんめうをおはりと言てしかられる**

細井　遊里出身の妾だろうか。請け出されて本妻に収まっている女性かも知れない。知らずにか、あるいはうっかりとか、「針妙」のことを「お針」と言って叱られてしまった。裁縫専門で同じような仕事をしていても、勤め先によって呼称が異なっていた。遊里では「お針」といったが、大名や旗本のお屋敷では「御物師」、一般の家庭では「針妙」と称していたのだ。

お針部屋年明前か邪广をする　別下25

しんめうハきぬたがいつちあら仕事　五37

伊吹　賛。針妙よりお針の方が格下だから。

山田　賛。ですが、叱られたのは「妾」あるいは「請け出されて本妻に収まっている女性」ではないでしょう。彼女達は、仮初めにも主人筋の人なのですから。

小栗　賛。場面の特定不要。

清　同。

11　**かこわれハ店ちんでもの見世をはり**

細井　浄土真宗以外の僧は妻帯を許されていなかった。僧が寺院の庫裏に密かに置く隠し妻を「大黒」といい、別宅に住まわせている外妾を「囲れ」と称した。囲れは何もしなくても不自由はしないのだが、気は心。店賃の助けにもなろうかと、琴・三味線の弟子をとってみたりする。退屈しのぎにもなるだろうし……。

囲レはいひわけ程の見世を出し　四6
囲レも二三人程琴の弟子　三13

伊吹　賛。「もの見世」は小間物見世のようなものか。

高野　坊主の収入は一定していない。囲い者どか食いしたり飢つえたり　一四3

するのである。ある程度は必要なのでは。

山田「店ちんでもの見世」は、「店賃にでもなればよい程の見世」の意です。しかし、経済的な事よりも礎引一句目のように世間体でしょう。

小栗　同右。暇でもあり。

清　賛。高野氏の「囲い者どか食いしたり飢つえたり」は食事にあらず、坊主の持参するソーセージのことです。その何が定期的ではないということです。

12　たま〳〵男と生れ禿なり

細井　禿の大半は七、八歳で遊女屋に売られてきた少女たちだが、時には近隣の箕輪からの臨時の雇い禿もあり、その中には器量のよい男の子もいた。「折角男と生まれて来たのに禿とはねえ」と慨嘆しているのは誰でしょう。

「たまたま……」というのは、謡曲『卒都婆小町』の「たまたま受け難き人身を受け」から拾ったのかも知れない。文句取という程ではない。作者の脳裏にフト浮かんだのかも。

みの輪から雇そらまめとうからし　明元仁4

二ツとハ男かふろのたゝかれす　九317

伊吹　賛。謡曲『卒都婆小町』は関係ないように思う。

高野　女郎の子供。女の子であれば将来女郎になれるのだが、たまたま男であったばかりに、男禿となり、若い者となって遊里で暮らしてゆく。

山田　折角男と生まれたのに禿とは……という事でしょう。『卒都婆小町』はともかく、何かの文句取が匂うのですがねえ。

小栗　たしかに、この句の技巧がよくわからぬ。

清　文句取かもしれませんネ。

13　こらへじやうなくぬす人をはらむ也

細井　干支の庚申にあたる日の夜には、人間の体内に住んでいる三尸という虫が、その人が寝ている間に、体から抜け出して、天帝にその人の悪事を告げに行き、人はそれによって天罰を受けると信じられており、人々は眠らず居た。それを庚申待ちと言ったが、その夜に同衾すると生まれる子は盗人になるとも信じられていた。なのに我慢の足りなかった二人はその通りになってしまった。

庚申に孕んで壬生の小猿でき　八一24

清　賛。

14　買ものハうら白根松女郎なり

細井　十二月十七、十八日の浅草歳の市で買うものは正月用品の裏白や門松。オッとも一つ忘れちゃならねえ大切な買い物は言わずと知れた女郎さ、と吉原へいそいそと。

正月の買ものに出て気がそれる　八20
市もとり吉原へよるまめなやつ　笹二5

清　賛。

愛染帖

新家　完司　選

（投句277名）

ホストクラブ一度は行ってみたかった

（評）イケメンが女王気分にしてくれるホストクラブ。年齢制限はないので誰でも行けるが、嵌まり込むと老後資金が消えてしまう。

香芝市　山下　純子

神様の前で小銭と口走る

（評）畏れ多くも神殿の前で「ちょっと、お賽銭の小銭貸して！」。さすがの神様も「小銭かい…」と苦笑されているのではないか。

大阪市　大川　桃花

羽衣を脱いだ天女を見たかった

（評）現世では遂に見ることが出来なかった「天女の水浴び」。天国ではしばしば拝めるとの噂あり。出かける楽しみが一つ増えた。

米子市　成田　雨奇

悩み事大中小と区分けする

（評）漠然と「あれもこれも…」と悩むのではなく大きさ別に記録する。整理整頓好きなら、これだけで半分は解決するのでは？

大阪市　小野　雅美

ケアホーム海が見えるというチラシ

（評）終の棲家となるホーム。選定には費用や設備に加えて周辺の環境も重要。「海や山より駅裏がいい」という御仁もいるだろう。

尼崎市　山田　耕治

スケジュール病院名をまず記入

（評）予定表には先ず歯医者さんなど病院の予約日と時間。その他の句会とか女子会などは自粛続きですっかり減ってしまった。

岡山県　高岡　茂子

圧迫骨折ポキンと音はせぬそうな

（評）高齢者に多い脊椎や腰椎の圧迫骨折。ポキンという音などはせず突然潰れる。骨粗鬆症にならぬようにカルシュームを！

高槻市　片山かずお

こつこつと鍛えておこう耐えること

（評）怒りっぽい老人は嫌われる。老人性ストレスに耐えるには、先ず「忍耐力をつける」と決意すること。その意識が力になる。

四條畷市　吉岡　修

返事する猫が居るから自粛する

（評）自分の身にもしものことがあれば、この猫ちゃんはたちまち路頭に迷ってしまう。それを思えばひたすら自粛の日々である。

朝霞市　前田　洋子

居酒屋さん持ちこたえてね待ってても

（評）このウイルス禍が収まるのは半年後か、それとも一年後か？　行きつけの居酒屋さん、それまで潰れないで何とか頑張って！

尼崎市　永田　紀恵

橋本市　石田　隆彦

ペットボトル嫌いと岸に投げる波

和歌山市　まつもともとこ

猫はいつでも私のつむじ見て笑う

三田市　堀　正和

一千歩毎に飴玉一つずつ

長岡京市　山田　葉子

飼い主も犬も太っている散歩

倉吉市　牧野　芳光

流れ星探す時には流れない

黒石市　北山まみどり

見た目にはわからぬように妥協点

大阪市　髙杉　力

虎の子に儲け話が寄って来る

米子市　後藤美恵子

年嵩のヘルパーさんに落ち着かぬ

宝塚市　丸山　孔一

日本語かホボホボチョーマジ半端ナイ

三田市　上田ひとみ

瞑想のつもりが昼寝一時間

美作市　岡本　余光

聡太君と気軽に言えぬ新棋聖

越谷市　久保田千代

雑念があって私欲が捨てられず

堺　市　坂上　淳司

棺から皆を眺める生前葬

唐津市　岩﨑　實

愚かなるいくさゲルニカ教えおり
三田市　尾﨑　一子

カビ臭い私丸ごと天日干し
堺　市　内藤　憲彦

百均でまた同じもの買ってきた
鳥取市　奥田　由美

毒舌に拍車かけます粒胡椒
弘前市　髙瀬　霜石

いつまでたっても甲にはなれぬ契約書
五所川原市　むらのひとり

膨らます今朝の空気のパンケーキ
府中市　岸田　武

相槌のうまい男だ身構える
大らかに見える鈍さで生きている
大阪市　平井美智子

不要ですか不急ですかと問う暮らし
ブーメランと同じ形をした便座
奈良県　安福　和夫

ピーマンが嫌いな孫と陰でハグ
本当に美味しいですかブロッコリー
豊中市　きとうこみつ

飼い主に似てかしこいなうちの犬
離婚してからやたら気になる元夫
藤井寺市　鈴木いさお

スマホを無くしたら死んだ方がマシ
着メロが妻と同じでややこしい

和歌山市　古久保和子

カタカナ語一度モゴモゴ言ってから
土佐清水市　辻内　次根

言い返す言葉の先は円くする
鳥取市　前田　楓花

他人から言われなくても知る短所
羽曳野市　吉村久仁雄

今度こそものにする気の英会話
松山市　郷田　みや

シンプルがいいといつもの冷奴
三田市　北野　哲男

暇のない無職が三十年を過ぎ
バッカスと貧乏神と共白髪
橿原市　居谷真理子

ヒョウ柄のマスク作って自粛中
太陽の殺意感じる午後の二時
札幌市　三浦　強一

ヒロシマが語る四分の三世紀
灯籠にｐｅａｃｅとあった原爆忌
河内長野市　山岡冨美子

目に見えぬものが地球を振り回す
胃袋は健在なのに脳の紙魚
宝塚市　太田としお

老けたねと鏡がいつも言うのです
コロナでも川は流れるカラス鳴く
大阪市　宇都満知子

句想にもコロナウイルスの感染
忙しかった日締めくくりはゴロン

大阪市　栃尾　奏子

栃尾家に孫です二十四年ぶり
豊中市　藤井　則彦

さあ孫だ子の三倍は期待する
和歌山市　柏原　夕胡

パチンコの顔も私の貌である
豊中市　上出　修

雀友においしい友が一人いる
鳥取市　山野すみれ

肉も良い魚も良いが焼きナスビ
仙台市　月波　与生

しあわせの記憶何ギガまで入る
大阪市　谷口　義

面白がって生きよう先は知れている
松江市　石橋　芳山

傷口に馬鹿だバカだが見えている
佐賀県　真島久美子

傷口に使う消毒液だった
神戸市　上田　和宏

２０２０映画の種が山のよう
海南市　小谷　小雪

夏も冬も同じカバンと笑われる
大阪市　井丸　昌紀

盂蘭盆会にわか仏教徒がひとり
尼崎市　清水久美子

五百円二千個隠し持っている
鳥取市　岸本　宏章

私でも死んだら惜しい人になる

熊本市　杉野　羅天
ハグ禁止人間ヤメと言うごとし

大阪市　古今堂蕉子
工夫しても実感出来ぬエアーハグ

豊中市　水野　黒兎
コロナ禍に二キロ四方がわが世界

三木市　山口ヨシエ
街中が無口になって風荒ぶ

弘前市　稲見　則彦
不要不急ビデオデッキと戯れる

紀の川市　山東日出男
テレビ越し明日はローマかベネチアか

岡山市　永見　心咲
巣籠もりに川柳部屋を増設す

大阪市　藤田　武人
ディスタンス保ち銀座の恋歌う

奈良県　渡辺　富子
ノーメイク続きお肌も深呼吸

長野県　丸山　健三
ホームワーク足腰弱くなりました

三田市　丹羽　美恵
十万円金歯に変えて子に残す

三田市　福田　好文
10万円土用鰻になりました

西宮市　髙橋千賀子
花柄の浴衣とペアの夏マスク

香芝市　大内　朝子
炎天下マスクの中はサウナです

八王子市　川名　洋子
黙々と食べお喋りはマスクして

高砂市　松尾柳右子
会釈してマスクの顔を考える

三田市　足立つな子
やけっぱち心の荒むマスク顔

松山市　柳田かおる
マスクでお経お茶は拒否してそそくさと

神戸市　近藤　勝正
新コロナ孫のエクボも包み込む

沖縄県　宮　すみれ
白い歯もマスクに隠れまあだだよ

西予市　黒田　茂代
マスクしたままの欠伸は立ち消えに

米子市　野川　宣子
手始めは恐る恐るの食事会

西宮市　福島　弘子
コロナ太り正直すぎる体重計

奈良県　長谷川崇明
あの世への近道ですかネオン街

箕面市　中山　春代
両側に荷物を置いてバリケード

神戸市　敏森　廣光
ステイホーム時の流れを遅くする

尼崎市　近兼　敦子
テレワーク夫は知らぬ顔見せる

丹波篠山市　酒井　健二
いつまでもお願いしたいディスタンス

八尾市　髙杉　千歩
日曜日コロナ口実パパ昼寝

寝屋川市　伊達　郁夫
巣ごもりに時計の針が遅すぎる

大阪市　津守　柳伸
諦めを優先させている自粛

明石市　糀谷　和郎
Ｇｏ Ｔｏ と自粛で一家もめている

三田市　大西　重男
外出の自粛が続きボケ進む

弘前市　髙森　一呑
三密を避けて貴方と糸電話

三田市　多田　雅尚
三密は避けております長電話

富田林市　山野　寿之
三密無用ネット注文直ぐに来る

大阪市　岡田　恵子
新しい日常　家は古いまま

益田市　篠原紋次郎
コロナ菌がオリンピックを食べました

八尾市　山根　妙子
稽古した河内音頭が踊れない

大阪市　田中ゆみ子
国道を不要不急の蚯蚓這う

松江市　栂瀬みちを
コロナ禍の真の怖さは人の口

箕面市　出口セツ子
敗北をウイズコロナと言いかえる

南あわじ市　萩原　狸月
着想がコロナを出ないもどかしさ

箕面市　広島　巴子
チコちゃんに叱られるなと句をひねる

京都市　清水　英旺
新しい言葉に辞典追いつかず

京都市　都倉　求芽
恋の句をじっくりと読む夕立に

鳥取市　永原　昌鼓
肩の力抜くと名案浮かぶかも

和歌山市　北原　昭枝
消しゴムが愚痴も言わずに丸くなる

富士見市　中島　通則
目覚めれば夢の中にと消えた佳句

高槻市　松岡　篤
多少とは何合ほどと医者に訊く

大阪市　平賀　国和
ワインの旅今日はイタリア明日はチリ

弘前市　福士　慕情
飲めるとき飲んで歌えるとき歌う

広島市　岸本　清
酒好きの蚊だろう僕につきまとう

富田林市　中村　恵
不機嫌な酒は突然人を飲む

堺　市　奥　時雄
熱帯夜ロックの酒が薄くなり

笠岡市　藤井　智史
妻という飲酒検問引っかかる

三原市　笹重　耕三
もうちょっと生きる飲みすぎないように

奈良市　大久保眞澄
柿の種とビール注文するお墓

大阪市　若本　安代
スピードを上げて経読む盆の僧

横浜市　川島　良子
週間天気見ているだけで熱中症

鳥取市　池澤　大鯰
狭い家家族ごろごろ夏休み

大阪市　岩崎　公誠
立つ座るどっちもリズム落ちてきた

熊本県　岩切　康子
山芋を薬と膳に欠かさない

唐津市　仁部　四郎
毎月の晦日に干物届く仲

堺　市　矢倉　五月
健康記事　商品名で締めくくり

河内長野市　村上　直樹
鍋焦がす茶碗は割れる俄か主夫

松山市　大内せつ子
主旋律奏でるようにメール来る

米子市　後藤　宏之
古稀司会米寿会長喜寿幹事

大阪市　江島谷勝弘
問われれば答えますけど出しゃばらぬ

鳥取県　斉尾くにこ
安心をしきって湯船では胎児

寝屋川市　廣田　和織
9条のどこかに穴をあける音

堺　市　遠山　唯教
戦争は厭とほたるの墓がいう

防府市　坂本　加代
泣き声が亡き猫に似て隣の児

神戸市　奥澤洋次郎
恋心どこかできっとヘマをする

鳥取市　田賀八千代
温暖化いつか私も茹でられる

宝塚市　岸田　万彩
筆ペンを出され一先ず深呼吸

岡山県　田中　恵
歩かねば明日の夢が遠ざかる

高槻市　初代　正彦
会釈から会釈　微笑ましい波紋

沖縄県　禱　モモト
ナメクジが蓮のエキスを吸いつくす

池田市　太田　省三
甚平の父の衰えふくらはぎ

米子市　妹能令位子
逆境は若い時なら効果ある

福井市　伊藤　良一
金絡むまでは弾んでいた会話

岡山市　大石　洋子
落書きのネズミ誉められバンクシー

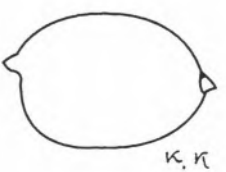
生駒市　饗庭　風鈴
ピーターはただのウサギだが矜持あり

共選欄

檸檬抄

（薫風書、カットとも）

（投句３４７名）



「エール」　石橋芳山選

なんと解くライバルからのこのエール　香南市　桑名　孝雄
頑張れと聞こえるセミの大合唱　東京都　川本真理子
キャラ弁から聞こえるママの応援歌　富士見市　中島　通則
ドッコイショコラショでやっと立ち上がる　西宮市　亀岡　哲子
果汁100今日の私の起爆剤　尼崎市　藤井　宏造
猿轡はめてエールを送る夏　箕面市　中山　春代
まだ若い若いと発破かけられる　和歌山市　土屋起世子
来年もここに花咲け在来種　池田市　太田　省三
君からの熱いエールがプレッシャー　生駒市　飛永ふりこ
頑張れガンバレとパワハラのエール　安来市　原　徳利
エール交換待ってられない大ジョッキ　三田市　村田　博
エールくれたグリコのおまけ宝物　箕面市　酒井　紀華
神さまは助けてくれないが　見てる　弘前市　高瀬　霜石
皆中止エール送れる場所が無い　大阪市　奥村　五月

「エール」　古今堂　蕉子　選

やわらかい笑みがエールになる介護　高槻市　富田　保子
それ行けとテレビ桟敷で怒鳴ってる　高槻市　松岡　篤
留守電に音痴の母の応援歌　大阪市　岡田　恵子
宝くじ供えて神を威嚇する　三田市　丹羽　美惠
エールより金を送れと来るメール　松江市　椙瀬みちを
募金箱に心ばかりのエールです　豊中市　池田　純子
耕せばエールをくれる鍬の音　鳥取県　飯野　菖子
転んでもめげずに走る児にエール　大阪府　落葉　ふみ
エールとも揶揄ともとれる褒め言葉　白河市　鈴木たけし
手も足も出せず研鑽積むエール　大阪市　津守　柳伸
炎天下あついエールが溶けていく　神戸市　山根　弘華
岩風呂のほっこり明日へのエール　高槻市　初代　正彦
独り暮らしへ笑い袋をプレゼント　和歌山市　三枝眞智子
勝者からエールが届くドヤ顔で　大阪市　井丸　昌紀

鏡見て私にエールがんばって　宝塚市　太田としお
朝のエール　ナスビキュウリの一夜漬け　海南市　小谷　小雪
朝ドラのエールに合わせスケジュール　三田市　木村マユミ
大声のエールに混じる嫉妬心　富田林市　山野　寿之
エールより金を送れと来るメール　松江市　栂瀬みちを
頑張れに押しつぶされていく背中　大阪市　小野　雅美
四季を折る風から貰う応援歌　男鹿市　伊藤のぶよし
にぎやかな声援だけはすぐできる　黒石市　北山まみどり
パンツ履きなさいと自分へのエール　仙台市　月波　与生
ライバルが塩を送ってくる恐さ　神戸市　山﨑　武彦
コロナに猛暑負けるな日本ガンバレ日本　枚方市　藤村　亜成
朝顔にエール送りつ水をやる　羽曳野市　藤原　大子
足腰にエール送って起きる朝　高槻市　富田　保子
ブレまくる政府へエールよりも喝　河内長野市　中島　一彌
サイフォンのポコポコ朝のエールです　貝塚市　石田ひろ子
好きな曲なん度も聞いてやる気だす　神戸市　櫻井　崇史
しょうもない自分に発破掛けている　岡山市　丹下　凱夫
若かれとエールをくれる派手な服　池田市　上山　堅坊
鍔迫りの開始を告げているエール　唐津市　坂本　蜂朗
ピアノまだ続けてるかとエール来る　長岡京市　山田　葉子
地元へのエールふるさと納税金　寝屋川市　森　茜
エールしっかり聞こえるように耳掃除　東かがわ市　川﨑ひかり

行き付けの飲み屋へ送る頑張れよ　米子市　竹村紀の治
トンカツに縁起かついだ母の声　河内長野市　坂野　澄子
はやぶさ2に宇宙の謎を解く期待　河内長野市　藤塚　克三
石浦にエールを送る郷土愛　鳥取県　田中　重忠
まだ若い若いと発破かけられる　和歌山市　土屋起世子
明日へのエールチャリから見る夕日　尼崎市　藤井　宏造
リハビリの孫の明るい声の杖　奈良市　米田　恭昌
あきらめたらアカンと天の声がする　犬山市　金子美千代
以心伝心エール行き交う自粛中　横浜市　川島　良子
甲子園夢見て吹いてきたラッパ　堺　市　奥　時雄
キャラ弁から聞こえるママの応援歌　富士見市　中島　通則
大役を果たした後の吟醸酒　芦屋市　新阜　義明
チョコひとつ心にあかりくれました　大阪市　小野　雅美
鍔迫りの開始を告げているエール　唐津市　坂本　蜂朗
孫からのエール嬉しい動画来る　池田市　倉本　一弥
ラグビーの出陣踊り武者振るい　鳥取市　池澤　大鯨
蒲焼きの匂いだけのようなエール　岡山市　大石　洋子
ホスピスの夫に捧げる永遠の愛　三田市　尾﨑　一子
ケアマネのエールよっしゃと立ち上がる　松江市　中筋　弘充
ご先祖のエール頂く盂蘭盆会　箕面市　広島　巴子
民主主義守ろう台湾へエール　堺　市　内藤　憲彦
ヤドカリにエールを送るシオマネキ　紀の川市　山東日出男

連ドラの進展見たい朝八時　三田市　幸田　厚子
もう一度エールを送る恋の種　尼崎市　藤田　雪菜
アマビエにエール送るが鎮まらぬ　鳥取市　中村　金祥
声援はいつも貰うが出ぬ結果　塩竈市　木田比呂朗
勝負どこ母のエールのにぎり飯　寝屋川市　廣田　和織
エールなら青い灯よりも実弾を　川西市　大坪　一徳
愛妻のエールに気づくのが遅い　大阪市　川端　一歩
阪神に送ったエール海ほどに　高槻市　松岡　篤
耳元へしずかにエールおくります　八尾市　村上ミツ子
頑張っていること全部知っている　三田市　上田ひとみ
恋敵からのエールは薔薇の棘　大阪市　岡田　恵子
方言で貰うエールが身に刺さる　唐津市　前田　廣幸
言葉はエール心の奥は嫉妬心　鳥取市　山下　凱柳
日本にニッポンの旗振りかざす　鳥取市　前田　楓花
ギブアップ親のエールが重すぎる　富田林市　中村　恵
好きな事とことんやれと子にエール　河内長野市　藤塚　克三
フレーフレー東京五輪きっとやる　大阪市　内田志津子
学ランの旗手沈黙の炎天下　大阪市　藤田　武人
子や孫は帰らずエールのみ届く　尾道市　小畑　宣之
弁当箱ぴっしり詰めているガッツ　岡山市　工藤千代子
明日へのエールをもらう大ジョッキ　黒石市　石澤はる子
じれったいエールの声が届かない　三田市　野口真桜子
あんパンの臍にエールが詰めてある　西予市　黒田　茂代

方言で貰うエールが身に刺さる　唐津市　前田　廣幸
生きている限りひたすら子へエール　大阪市　原田すみ子
ひとりじゃないよ共感のリツイート　大阪市　宇都満知子
あんパンの臍にエールが詰めてある　西予市　黒田　茂代
イチニッイチニッ尺取虫が通る　藤井寺市　太田扶美代
頑張れと聞こえるセミの大合唱　東京都　川本真理子
強く生きてと逆縁の友にエールを　大阪市　磯島福貴子
川柳塔誌私にエールだと思う　大阪市　榎本　舞夢
ふるさとのエール答える新棋聖　豊橋市　西郷紀美代
粛粛と対局決める夏羽織　八尾市　山根　妙子
照ノ富士苦闘の末の覇にエール　奈良県　谷川　憲
拍手では想い届かぬ桟敷席　弘前市　福士　慕情
お日様のエールに向日葵の背伸び　寝屋川市　廣田　和織
ブレまくる政府へエールよりも喝　河内長野市　中島　一彌
星になった友へのエール般若経　豊中市　貝塚　正子
難民に送り続ける志　鳥取県　門村　幸子
医療者へエールを送るヴァイオリン　神戸市　斎藤　隆浩
勇敢な君へとブルーインパレス　和歌山市　まつもともこ
拍手拍手医療に贈るエールの輪　宝塚市　丸山　孔一
娘にエール看護師ゆえに避けられず　大阪市　横山　里子
コク香り楽しみエール飲む自宅　奈良市　宇賀　史郎
エール銘知り垂涎のビール好き　米子市　後藤美恵子
先はまだ卒寿に贈るスニーカー　尼崎市　永田　紀恵

こんなにもエール色紙に千羽鶴　鳥取市　加藤　茶人
天才の多彩な曲に魅了され　大阪市　樋口　眞
小包にラーメン母からのエール　神戸市　米田利惠子
たんぽぽが風のエールで旅に出る　島根県　伊藤　寿美
粋なエールだモンローの写真つき　熊本市　杉野　羅天
敵に塩送る度量が欲しくなる　鳥取市　岸本　宏章
挫けそうな私にエールチョコパフェ　豊中市　松尾美智代
苦みならイギリス産のビール程　岡山市　永見　心咲
四浪の子供へエール出尽くした　米子市　池田　美穂
「おらおらでひとりいぐも」に励まされ　河内長野市　木見谷孝代
宝くじ供えて神を威嚇する　三田市　丹羽　美恵
尺玉が弾けてそれからのデート　藤井寺市　髙田美代子
がんばったなあと両手の中の水　大阪市　平井美智子
行き付けの飲み屋へ送る頑張れよ　米子市　竹村紀の治
自らも鼓舞する他人へのエール　尼崎市　清水久美子
生活に追われエールが贈れない　堺　市　遠山　唯教
独り暮らしへ笑い袋をプレゼント　和歌山県　三枝眞智子
デタラメなエールで飛魚になった　鳥取県　斉尾くにこ

秀　句

負けた日の食卓ステーキがドカン　橿原市　居谷真理子
蒲焼きの匂いだけのようなエール　岡山市　大石　洋子
叱咤激励叱咤は控え目に頼む　佐賀県　真島久美子

猿轡はめてエールを送る夏　箕面市　中山　春代
たんぽぽが風のエールで旅に出る　島根県　伊藤　寿美
趣味仲間からエールを貰う現在地　吹田市　太田　昭
背を押してくれたあなたの手のぬくみ　生駒市　饗庭　風鈴
くじけるな自分鼓舞する旗を振る　松山市　宮尾みのり
コロナ場所好取り組みに湧く拍手　堺　市　坂上　淳司
太陽のエールを受ける土用干し　宝塚市　岸田　万彩
えらいよママ子猫5匹に授乳中　奈良市　大久保真澄
医療者へ空からエールインパルス　名古屋市　山本三樹夫
ひこばえにたっぷりエール水をやる　東かがわ市　川﨑ひかり
送られたエールカンフル剤となり　越谷市　久保田千代
何といっても諭吉のエール有難い　羽曳野市　徳山みつこ
さあ届けマスクの下のこのエール　三田市　上田ひとみ
尺玉が弾けてそれからのデート　藤井寺市　髙田美代子
エールだと思えばエール鳥の糞　倉吉市　牧野　芳光
絶妙な野次をエールと受けとめる　唐津市　仁部　四郎
笛太鼓鳴らぬ京都で鱧を食い　奈良県　長谷川崇明
デタラメなエールで飛魚になった　鳥取県　斉尾くにこ

秀　句

大丈夫ポンと背中に主治医の手　堺　市　矢倉　五月
巣ごもりへ元気お出しと来る柳誌　札幌市　三浦　強一
この声が君の翼になるように　大阪市　栃尾　奏子

「まつり」

（投句　225名）

山崎武彦選

コロナウイルス村のまつりをわやにした　大阪市　柴本ばっは
コンチキチンの自粛つまらん京の夏　堺　市　内藤　憲彦
孫五人来ればまつりになる茶の間　三原市　笹重　耕三
裏方の見えぬ力が支え合う　芦屋市　新阜　義明
村長が御神輿担ぐ過疎の村　豊中市　水野　黒兎
だんじりに乗っとた夫のやんちゃ顔　河内長野市　木見谷孝代
祭り囃子うれしい父の肩車　豊中市　松尾美智代
祭り好き孫もペットも法被着せ　堺　市　村上　玄也
自粛して神もやしろを出ぬまつり　南あわじ市　萩原　狸月
仏壇のまつり囃子は父の笛　富田林市　山野　寿之
宵山デートそしてそのまま五十年　神戸市　上田　和宏
太鼓打つ撥に男の背が光る　名古屋市　山本三樹夫
魂胆を隠して友を祭り上げ　鳥取市　池澤　大鯰
おまつりを解く間に大魚逃げられる　明石市　糀谷　和郎
開墾の先祖忘れぬ村まつり　羽曳野市　徳山みつこ
星影のワルツまたねを信じたい　奈良市　大久保眞澄
先方は祭り気分の離婚印　宝塚市　岸田　万彩
神様よごめんね祭り辞めました　長野県　丸山　健三
逆転勝ちまるでまつりだ甲子園　宝塚市　太田としお
口押えても後のまつりの粗忽者　八王子市　川名　洋子

軽トラがお神輿かつぐ里の秋　三田市　福田　好文
晩酌が俺の祭りと決めている　岡山市　丹下　凱夫
郷愁の襞に沁み入る祭笛　越谷市　久保田千代
笛太鼓誘われ爺の腰のびる　河内長野市　坂野　澄子
触れあった指が祭りになってゆく　大阪市　平井美智子
都合よくまつり上げたら手を離す　岡山市　永見　心咲
スーパーでワンパック買う祭り寿司　橿原市　居谷真理子
ゴミの日は祭り気分になるカラス　豊中市　藤井　則彦
告白はまつりの夜と決めている　黒石市　石澤はる子
祭り好きこの子は祭りの夜に出来た　三田市　北野　哲男
大阪へ行きたかったな塔まつり　弘前市　福士　慕情
祭りだまつりやっと娘が嫁にいく　三田市　野口真桜子

佳　句

ときめきは心のまつりだと思う　香芝市　大内　朝子
人生を降りる時までカーニバル　大阪市　小野　雅美
結論はまつりの後にしませんか　藤井寺市　太田扶美代
火の息を吐いて男はまつり好き　大阪府　米澤　俶子
全没の後に祭りはやって来る　笠岡市　藤井　智史

人

華やかな祭り支える裏の汗　弘前市　福士　慕情

地

日本の祭り丸呑みしたコロナ　弘前市　髙瀬　霜石

天

永らえて生きるまつりは今佳境　奈良県　渡辺　富子

軸

まつり笛爺が漢の貌となる

「困る」

（投句　228名）

田中天翔選

困るのは何も出来ない夫です　鳥取市　前田　楓花
財源は国債困るのは孫子　唐津市　仁部　四郎
プラゴミの放棄で困る魚達　貝塚市　石田ひろ子
温暖化を止める特効薬が無い　松山市　栗田　忠士
免許返上バスタクシーに徒歩が待つ　鳥取県　門村　幸子
大阪のおばちゃんは直ぐ値段聞く　大東市　小川賀世子
神様も手こずる絵馬の誤字新語　三田市　北野　哲男
贋作の方が本物より上手い　弘前市　髙瀬　霜石
梅雨荒れにライフラインの水を待つ　堺　市　遠山　唯教
言い出しただけでお前がやれと言う　宝塚市　丸山　孔一
支払いに現金ダメの世が来そう　鳥取県　山下　節子
人類の試練コロナとの闘い　米子市　後藤　宏之
暑くても三度三度の飯仕度　鳥取市　山野すみれ
初盆の母へ帰省が難しい　朝霞市　前田　洋子
営業自粛お先真っ暗です我が社　鳥取市　山下　凱柳
食べ過ぎる自粛続きの作り置き　西宮市　福島　弘子
ずるずるとずり落ちてくる老眼鏡　岡山市　大石　洋子
妻臥して言うこと聞かぬフライパン　弘前市　福士　慕情
家計簿が野菜高値で真っ赤っか　八王子市　川名　洋子
トイレとの戦で眠る時がない　倉吉市　牧野　芳光

AIが私の余命言いたがる　大阪市　石田　孝純
良薬と飲めば出てくる副作用　唐津市　山口　高明
家政婦にされそう娘との同居　大阪市　田中ゆみ子
幸せになるほど没句増えてくる　笠岡市　藤井　智史
パソコンのヘルプがまるで役立たぬ　豊中市　水野　黒兎
老妻に頼りにされるカタカナ語　堺　市　奥　時雄
太くなりもう隠せなくなる尻尾　大阪市　森　廣子
秘めごとをみんな聞いてた金魚鉢　神戸市　山﨑　武彦
大切な人に冷たくしてしまう　神戸市　冨永　恭子
困るのは何も言わずに泣く女　上尾市　中村　伸子
結婚をしたいなと言う八十歳　大阪市　古今堂蕉子
プロポーズ正気の沙汰と思えない　佐賀県　真島久美子

佳　句

折り入ってなどと夜更けの電話口　三田市　上田ひとみ
見ぬ父を母に問い詰め困らせた　神戸市　松倉　正美
私にも少し小さめアベマスク　海南市　小谷　小雪
困ることばっかりなんよ長寿箸　大阪市　津村志華子
アイデアの泉が枯渇する夏日　岡山市　永見　心咲

人

歩けなくなったらわたしどうしよう　香芝市　大内　朝子

地

ふたり居に大きな鯛が二匹来た　安来市　原　徳利

天

逢うたびに増殖をする思慕恋慕　大阪市　平井美智子

軸

困ることあっても昼寝してしまう

初心者教室

題 ― バラバラ

居谷　真理子

今回の題は「バラバラ」ですが「バラバラ」で作句なさった方も多く、両方頂きました。どちらにしても4音のこの言葉を詠み込むのは難しいですね、どうしても説明調になってしまいます。代わる言葉を探したり、情景で表現したりの工夫が必要です。

（原は原句　参は参考句）

【バラバラ】

原 バラバラにバーツの軋む身の老化　道　子

原 バラバラに座る待合みな無口　道　子

少し変えるだけで句の雰囲気が変わります。

参 バラバラのパーツが軋む身の老化

参 バラバラに座り待合室無口

原 バラバラの子が分担決めて親介護　(川)信　子

「子」があるので「親」は要りません。

参 バラバラの子らが分担する介護

原 バラバラに暮らして気づく家族愛　通　則

参 バラバラに暮らしているが家族愛

参 バラバラになって家族のありがたさ

原 血の違う民族ですが強い国　紋次郎

着眼が独自。「血の違う」が分かりにくく句意が変わるかもしれませんが…

参 他民族国家だという強靭さ

原 家族バラバラ元気とメール月一度　弘

言いたいことを詰め込みすぎました。

参 バラバラの家族の元気知るメール

参 月一のメールが家族たばねてる

原 下手なうそつじつま合わず冷や汗も　千　代

参 つじつまの合わない嘘を汗かいて

原 思いそれぞれ兄弟が寄る七回忌　(森)廣　子

参 兄弟の思いそれぞれ七回忌

原 バラバラの手解きをして麺茹でる　紀美代

季節感をプラス

参 バラバラと鍋に踊らすおそうめん

原 あの人の話ばらばらまとまらぬ　ミヨノ

参 まとまらぬ話気長に聞いている

【バラバラ】

原 チャーハンの最後の粒が取れなくて　風　羅

参 チャーハンの最後一粒すくえない

原 思い出はバラバラめくる写真集　貴美江

同想句多数。表現に工夫が要りますね。

参 思い出をバラバラめくる写真集

参 アルバムをバラバラ思い出がバラリ

原 暇潰し本をバラバラ立ち読みで　ゆ　き

参 暇潰しの立ち読みでしてスミマセン

原 バラバラとカントめくって昼寝する　勝　正

参 バラバラとカントめくってから昼寝

参 バラバラとめくり枕にするカント

原 種を蒔くうしろを歩くカラスたち　くみ子

参 種を蒔くうしろにカラス従えて

原 雨つぶが奏でる傘の音楽会　風　鈴

あまり気になりませんが下六ですね。五音の言葉なら、コンサート、ピアノ曲……。

参 雨つぶが奏でる傘のピチカート

原 バラバラと3蜜守り観覧者　ひでお

何を観ているのでしょう。

参 バラバラと3蜜避けて観る舞台

原 アンコール市松座りバラバラト　行　久

参 アンコール市松座りさせられて

原 心配やバラバラ空き家ふえて来た　崇　史

参 あちこちに空き家がふえてきた不安

原 パラパラと降り出した雨今は滝　のぞみ
参 パラパラが今では滝のような雨
原 八十路すぎお口もゆるみパラパラと　マユミ
参 ご飯粒こぼす八十路のゆるい口
参 飯粒も愚痴もこぼしている八十路
原 ふりかけを掛けて弁当パワフルに　眞智子
　このままでもいいのですが
参 ふりかけでパワーアップのお弁当
原 パラパラと蒔いた米粒鳩を呼ぶ　光　雄
　この場合は「撒く」の方が適当です。
参 自粛中米粒撒いて鳩を呼ぶ
原 彼女待つ頁パラパラ時計見る　一　弥
参 待ち合わせ時計見ながらページ繰る
参 彼女待つ読まぬページを繰りながら
原 パラパラと落ちて山桃人知れず　閑
参 人知れず山桃落ちている季節
原 撒いた種形は変えて身に返る　(高)照　枝
参 蒔いた種ナスビとなって食卓に
参 苦や楽になって返った蒔いた種
原 塩パラパラ無言で居たい通夜帰り　(貝)正　子
参 清め塩無言でいたい通夜帰り
原 パラパラの雨が土砂降りずぶ濡れに　弥　生
参 パラパラの雨と見くびりずぶ濡れに
原 パラパラと種蒔くコツも農の技　(澤)良　子
参 種を蒔くコツも知ってる農の指
原 パラパラと食べかす落ちて老いを知る　マキコ
参 老いたなと思うここにも食べこぼし
原 観客がまばらでもアンコール沸く　千賀子
参 観客はまばらでも沸くアンコール
参 アンコールまばらな席に沸く拍手
原 一瞬にカード飛び出す魔法の手　(あ)さくら
参 マジシャンの手からカードが花と散る
原 パラパラの拍手を受けて挨拶す　睦　子
参 パラパラの拍手を受けてご挨拶
原 焼き魚もこみち風に塩を振る　厚　子
　速水もこみち、料理上手の俳優さんですね。
参 もこみちの顔でイワシに塩を振る
原 自粛解けパラパラの人動き出す　開　子
参 パラパラと人動きだす自粛明け
原 読みかけのページパラパラ外は雨　蟻日路
参 読みあきたページパラパラ外は雨
原 受験前パラパラと総仕上げ　寧
　あらら、五五五の句です。
参 受験前パラッパラッと総仕上げ
原 自粛中街はパラパラ青い空　英　也
原 自粛明け人はパラパラ景気まだ　英　也
　二句を一句にしました。
参 自粛中人はまばらで青い空
原 パラパラと雨足強くなりそうな　風　露
参 パラパラと雨音強くなる予感
原 パラパラと塩振り気持ち引き締める　(圓)恵　子
参 たまに塩振って気持ちを引き締める
原 パラパラと蒔いた善意が生きている　三樹夫
参 あちこちに蒔いた善意が芽を出した
原 パラパラと種子蒔く父の太い指　一　平
参 来年の種蒔く父の太い指
　奈津子さんは8月号でご卒業、おめでとうございます。今号は割愛させて頂きます。

【佳　句】

パラパラと夏の小雨が急がせる　厚　江
ひとつまみ勘で効かせる塩加減　義　明
蹟いた拍子小銭を撒き散らす　えい子
つまずいてこぼしたように霰降り　不二夫

【今月の推せん句】

パラパラと斜め読みして知ったふり　妹能令位子
パラパラの拍手に耐える前座芸　加藤　佳子
パラパラとめくっただけで却下され　秀　爺

川柳塔鑑賞

同人吟　吉村久仁雄
―9月号から

忘れるのあきらめるのよ笑うのよ
藤井　寿代

こだわるよりは諦めた方が楽。無理にでも忘れて笑い飛ばす。前を向きましょうと力強い励まし。

踏まれても蹴飛ばされても笑っとこ
山口　光久

こんな境地にはとてもなれない。人生名人の達観度はすごい。少しでも近づけたらとも思うが無理。

古里は断りもなく無人駅
柿花　和夫

過疎化が進み古里は無人駅になったと、風の便り。思い出いっぱいの村。腹立たしいし、寂しい。

力にはなれぬが聞いてあげられる
若本　安代

優しくて謙虚、包容力のあるこんな人に悩みを打ち明けることが出来たら、間違いなく心が軽くなる。

固結びするから切れる赤い糸
谷口　修平

そうか、そうなんだ。固結びすると切れるんだ。といって緩すぎると解ける。赤い糸はなかなか厄介。

今日も飲む自分を見失わぬよう
早川　遡行

飲めば自分を見失うものだが、この方は逆に自分を確認できるらしい。酒飲みの言い訳に共感。

揺れているのは私か世の中か
岸本　宏章

コロナ禍で世の中は大揺れ。その波で私も揺れているが、政府の無策で今や国民が揺れに揺れている。

受話器拭く咳込む友の声聞いて
原　洋志

百%のジョークじゃなく半分は本気に思えてしまう。それほどコロナが私達の心を蝕んでいる。

お地蔵さまを撫でた両手も消毒し
亀岡　哲子

前句以上に本気度を感じてしまう。お地蔵さまに誰が触ったか分からないから手を消毒。悲しい。

眉だけはきりりと書いてマスク美女
宇都宮ちづる

マスク女性はなぜ美女に見えるのでしょう。眉を書けば尚更で、絶世の美女になるに違いない。

ステイホーム焦げた夫の卵焼き
前田　楓花

自粛中、こんな微笑ましい光景があっていい。手伝う夫は卵焼きを焦がし、妻は苦笑するばかり。

やれ夫婦おんなじ頃に空く小腹
初代　正彦

食事どころか小腹空くのも一緒。一心同体の夫婦でうらやましい。やれ夫婦の言い方が軽快で妙。

妻という駆け込み寺を持っている
鈴木いさお

七人の敵がいる男に駆け込み寺は妻しかない。そう言い切るのは愛妻家だからかそれとも恐妻家。

逝かれても朝のコーヒー二つ淹れ

木見谷孝代

逝くのを覚悟していた、そんな淡々とした佇まいを感じる。今朝のコーヒーは特に美味しいね。

あなたの中の私は笑っていますか

斉尾くにこ

こう鋭く問われたら負け。幸せにできなかった私が悪い。もう一度やり直すか、別の道を歩むか。

逢って来た余韻そのままペンを執る

川端　一歩

昭和ロマンが色濃く漂う句。男女の逢瀬、スマホでなくペンを執っての恋文。今でも憧れる一景。

挑戦者藤井聡太という子供

小沢　淳

百年に一人の将棋の天才だが、まだ十八歳。インタビューに答える顔は人懐っこい子供のよう。

期待などせぬから絶望とは無縁

出口セツ子

期待して絶望した何回かの経験。もう期待しない。だが本人もそうはいかないことを知っている。

蹴飛ばして行けと頑固な石となる

森田　旅人

我が子に対しての父親の反省。もっと厳しく接していればこんな軟弱な息子にならなかった。

風鈴を吊せば風が寄ってくる

古久保和子

風鈴を吊せばチリンと音を立てる。本当は風があるから吊す。風が寄ってくるという表現が涼やか。

勝ち組の方へ合わせていく歩幅

鴨田　昭紀

いくら不服でも勝ち組に逆らうことは出来ない。じっと我慢を続け、いつか捲土重来の倍返し。

人救う水が時には夜叉になる

山根　妙子

水があって人は生きている。その水が人に襲いかかる。温暖化による雨量が川を夜叉にする怖さ。

大暴れしたと思えぬ今日の川

竹村紀の治

牙を剥いたときの川の怖さ。濁流が橋を流し去る。いつもの穏やかさとのギャップに唖然とする。

蛇口から生きてく音がほとばしる

川崎ひかり

水は生き物の命を育む。蛇口に口をつけて、がぶ飲みした小学生の頃を思い出した。美味かった。

息災も一緒に届くダンボール

木田比呂朗

田舎の母がとり立ての農作物を送って来た。土つきの野菜が母の達者を力強く告げている。

アルバムの私に戻るのはこめん

能勢　利子

いい思い出もたくさんあるが、過去に戻るのではなく、未来を見つめ前を向く。その決意が清々しい。

派手な服選んで老いを包みこむ

富田　保子

大阪のおばちゃんは、猛獣柄の服で自分の老いを包み込んでいる。老いと戦うおばちゃんにエール。

ゆっくりと眼鏡を拭いて切り抜ける

杉本　義昭

追い詰められたとき、眼鏡を拭いて間を取る。巧妙な手。ただし円熟した大人しか使えない技。

水煙抄鑑賞

―9月号から

稲見則彦

つまずいて人は優しい風になる

延寿庵　野鶴

躓いてみて初めて分かることが多い。人生順調な内は自信に溢れ、人の立場や気持にまで思いが及ばない。経験と共に、丸みを帯び優しさが纏いつくのです。

棒線で片付けられた予定表

北山　まみどり

真新しい予定表に句会や大会が十二月までびっしりでした。新コロナで自粛の嵐が全国に広がった三月、無残にも予定はキャンセルされました。諦めきれない予定が、棒線から覗いているのです

マネキンの胸に目がゆく男です

笹重　耕三

ブティックの改装で、沢山のマネキンが素肌のまま担ぎ出されている場に出合ったことがあります。そのリアルさ。

地獄の沙汰松竹梅とあるのかな

倉本　一弥

金次第というのだからあるのです。納棺の時、渡し賃と閻魔様への袖の下の分、高額手作り紙幣を入れます。今頃、地獄はインフレが進んでいるはずです。

線状降水帯いつまでそこにいてんねん

山田　厚江

ここ数年「線状降水帯」の無茶振りには参ってしまいます。ピンポイントで分かるのも怖いものです。「いてんねん」と方言の持つパンチが効いています。

品切れと聞けばよけいにほしくなる

横溝　安子

おろかです高額マスク今余る

古川　光雄

あっと言う間に店頭から消えたティッシュ、トイレットペーパー。マスクに至っては高額転売。最近では、ポビドンヨードのうがい薬の買い占めである。

寝入るまで団扇の風をくれた亡母

生田　えい子

扇風機の風は体に悪いからと、蚊帳の中で風をくれた母は、子が寝入った後で家事をするのです。

いつのまに備忘録だわ日記帳

妹能　令位子

十年日記というのがあります。天気と出来事、わずかの感想を書いてお終いです。まさに備忘録そのものです。その内、一生日記が登場するかも分かりません。

入浴中浮かんだ名句湯気と消え

若年　幸子

全くです。以来、油性ペンと厚紙をビニールの袋に入れて置いてはいますが、いざとなると役に立ちません。ダイビング用の筆記具もあるようですが、趣味道楽の分際ですから。

遠い日の君が心の襞にいる

本田　さくら

「遠い日の君」は、今の君ですね。あの若く溌溂とした姿が、脳裏から未だ離れようとはしないのです。今の君は、そのことを知る由もないのです。

傘立てに主役顔して杖2本

武田　悦寛

日傘雨傘に交じって、カラフルな昨今流行のノルディックウォーキング用の杖がデンと控えているのです。ちょっとの時間を見つけては、近所の散策です。

ともだち（2）

友だちとは「会いたいときに会える」「飲みたいときに飲める」と思っていましたが、新型コロナウイルスという憎らしいヤツがその当然のことを吹き飛ばしてしまいました。愉快に笑い合うことさえできない「ステイホーム」が続くと、やはり「友だちっていいものだな…」と改めて感じます。

テレパシー届くあたりにいい仲間　上田　紀子
近所まで来たと覗いてくれる友　倉繁　泰輔
さっき別れた友と電話で一時間　松尾美智代
前略で伝わる友の息づかい　渡邊伊津志
手紙だが友の笑顔がよく見える　有働恵美子
友達っていいな便秘のご相談　平松ますみ
クラス会休めばあちこちから電話　森下よりこ

会いたいなあと思っていたら「近所まで来たので…」と立ち寄ってくれたのはテレパシーが届いたのでしょう。

愉快に喋ってからまた長電話できる友、ときどき温かい手紙をくれる友、便秘のことまで相談できる気の置けない友、クラス会を休んだら「どうしたの?」と心配してくれる友。みんなみんなお金では買うことの出来ない宝物です。

彼女とは友達のまま鰊そば　乗原　道夫
プロポーズできずに友達で終わる　都　武志
友達で片付けられる恋ばかり　馬淵よし子
二十年飲み友達の距離が好き　上村　夢香
茶飲み友達もう性別は気にしない　安土　理恵
ポポポンと女友達増えてくる　石橋　芳山
十余年友達以上恋未満　佐野百利子

鈴木聖美の「TAXY」の歌詞に「思い出を燃やしつくしたら　男と女には友情が残るはず」があります。スマホのCMの「彼氏?」「まだお友だち!」も微妙で愉快です。

しばしば議論される「男女の友情は有り得るか?」は、結論の出ない難問中の難問。川柳仲間でも異性に対しては「友達以上恋未満」に似た感情が多いとは思うのですが…。

クラス会今や老人クラブです　黒田　能子
突然に倒れる友が増えてきた　遠山　唯教
病名がいっしょで友がまた増える　高須　春雄
病む友へかける言葉も種切れに　三宅　満子
豊かさに包まれ友は認知症　たかもり紀世
飲み助の友の平癒を祈るのみ　北野　哲男

歳月は無常且つ無情で、元気印が突然に倒れたり、認知症や寝たきりになったり。かける言葉も失くしてしまいます。

また、還暦が過ぎたあたりでは稀だった訃報も、喜寿を過ぎてくると頻繁にやってきます。長生きするのは嬉しいことですが、友だちが減ってゆくのだけは残念無念です。

今にして思えば友の痩せた顔　藤井　正雄
呼び捨ての友一人減り二人減り　小谷　滋彦
友という宝が消える喜寿傘寿　竹信　照彦
ピーポーも呼べずひとりで逝った友　北村　賢子
何時もわたし庇ってくれた友が逝く　冨山ルイ子
友だちの死因を軒の下で聞く　金築　雨学
ガンで逝った友へ礼状書いている　村上ミツ子

『麻生路郎読本』余滴 (60)
路郎の「川柳人協会」⑧

菜原道夫

路郎が「日本川柳協会」に参加しないことに対して触れた塊人の文章が次である。

〈たゞ、自らの節操を守るに、急にして他社と融和を缺く場合のあるのは甚だ遺憾である。この上は一川柳社としてのみならず、全川柳界の爲にも、その力を添へていたゞきたいものである。それがより人物の大を成す所以であらう。〉

これに対する亜鈍の反論。

〈次に自らの節操を守るに急にして他社との融和を缺くのは遺憾だ。よろしく一川柳社としてのみならず、全川柳界の爲にも、その力を添へられよ、それがよい人物の大を成す所以であらう。とは何事であるか、路郎氏が自らの節操を守るに急であつたなら、何故川柳人協會を創つたか。師走川柳大會を朝日新聞社で開催し、周魚や紋太や、御身らにまで辭を退くして（筆者註―「退く」は「低く」の誤植だろう）講演依頼したのも川柳人協會理事長としての麻生路郎でなかつたか、理のわからぬ節操とか申すなら、その當時、「番傘」の連中が、こちらの懇望を退けて、大會に參加しなかつた事を取上げて欲しい。逆に路郎氏は「番傘」の中央公會堂の大會には參加し、小は「昭和川柳」のある月の句會にまで路郎氏は出席したことがあるではないか。或ひは久良伎の還暦祝の勞をとつたり、他社の融和、柳界の親睦は凡てこれ、卒先してゐるのである。たま〳〵日本川柳協會大阪支部設立に當り、路郎一門がまだ參加しない故をもつて、他社と融和を缺くといふなら、それ相當の根醸と理由がありてのことである。今はそれを精しく公開できないがその路郎氏の肚は、塊人も個人的に逢つてよく知つてゐる筈である。川柳人協會員や、「川柳雑誌」の不朽洞會員中にも、塊人や塊人ぐらい以上の柳歴を持ち、もつと見識達見豊かな川柳家も澤山居ることである。その邊のペラ〳〵の雑誌を持つて、一國一城の主みたいな顔をしてゐる連中の寄合に、又それらと同じやうにおいそれと輕々しく參加出來ない路郎氏の立場も、とつくり考へてみる可きであらう。人物の大をなす所以とは、明かに塊人の失言として咎める可きである。なつてゐない。物事はもつと考へて言ふ可し。〉

塊人の文章の続き。

〈傳統を誇る「番傘」が、必ずしもその傳統を墨守せず、選句制度や選者制度や句會制度等の改善について、常に、全國柳界の先頭に立つて指導せられつゝあるのは、我等の常に敬服して居るところである。組織制度による川柳の向上、全國的に重大な意義を有する問題であり、それが常に「番傘」によつて行はれて居るのは、我が大阪の誇りである。これは会長岸本水府氏の人格による事はもちろんであるが、これを支持する川柳家の良心的態度も、あづかつて力があらう。

森雞牛子氏の主宰せられる「川柳春秋」は全國唯一の研究誌として特色ある存在である。好學の士本田溪花坊氏等の後援によつて、經濟的に無理のある仕事が、よく經續せられ、古川柳學の爲につくして居られるのは、これ亦大阪の誇りである。文化的

に程度の低いかのやうに言はれて居る煤煙都市に、よく好學的良心を保持して居られるのは、川柳の爲に感謝にたへないところだ。

三越を中心とする「天守閣」には、店員諸氏の親睦的意義があり、「赤煉瓦」は新興の意氣がさかんであり、「つるはし」には町内會的な特色がある。最後に生活即川柳の主張を持つ、わが「昭和川柳」が、時局と文學の關係について常に指導的意見と行動とを發表して居る事は世人のよく識るところであらう。

斯くの如く、大阪に於ける各柳誌の動向は、常に全國的意義を有し、單に一地方的事情のみでは、左右し得ない狀態である。その經濟的實力についてもおそらく全國に冠たるものであらう。〉

これに対する亜鈍の反論。

〈「天守閣」が一デパートの店員達の親睦的意義があるとし、「つるはし」を町内會的特色があると仰言り、二、三人で小つちやな柳誌を出してゐる「赤煉瓦」を新興の意氣旺と提灯を持ち、それらも含めて、經濟的にも全國に冠たり、全國的意義があるとは、どうも少し心臓が厚すぎるやうに思はれる。僕など、川柳の雜誌は「川柳雜誌」以外に大阪は勿論、日本國中（つまり世界中にも）に一つも無いと思ひもし、知りもしないといふのは、些か僕自身の不勉强のせいかとも考へられるが、まあ〳〵、大阪でも、全國的意義のある雜談は正直にみて、一つか二つ位の事ぢやないか。

別の箇所での亜鈍の反論。

〈嘗ては喧嘩して別れた岸本水府の人格とその「番傘」にベンチヤラをしペダンチックな森雞牛子と本田溪花坊とその「川柳春秋」を大阪の誇りとまで、人聞きの悪いまで高く買ふ塊人は麻生路郎と、その「川柳雜誌」にのみ、柄にもない注告めいた言草は如何にも片腹痛い。それが眞にツボのはまつた注告なら、路郎たらずとも大いに反省もし、そのアドバイザーに對し感謝の言葉も出やうが、あれでは却つて、塊人の大家でもない大家顔を生意氣に見せかけてゐる風で、又路郎氏が誤解を受けることであり、迷惑千萬でもある。路郎氏は昨今、斯ういつた誤解は大悟してしまつてゐて、抹殺せられてゐるが、僕が側近に居る者の一人として辨明でなく、塊人及び塊人同様に誤解する小兒病患者的ヒガミ屋の蒙を拓いてやるのである。〉

塊人の文章の最後。

〈一地方一誌は事務的に便利であるが、一柳誌すら有しない地方と、全國的な数誌を有する中心地の大阪とを同一視する事出來ない。もとより國策の下には如何なる統制にも服すが日本國民として當然の事ではあるが、川柳の存在が、國家的意義を有する限り、その中心地たる大阪の統合問題については、常に俳句短歌等と同一の取扱ひが望ましい事である、と思ふ。〉

これに対する亜鈍の反論。

〈最後に、下手な政治的工作を柳界に於て爲す可からず。塊人よ、御身の一文は結局、爲政者當局への歎願であつたらうが、よく身をわきまへ、周圍を知つて行動されよ。惜しむ可し、御身の悧巧さを眞に川柳を生活する人のために盡さざるを悲しむものなり。〉

塊人は何とか「昭和川柳」を残したいと思ったが、「昭和川柳」は、昭和16年6月号をもって終刊し、「番傘」に統合されることになった。

（次回に続く）

（投句207名）

落ち着かない日常に慣れるのも何だか寂しいものがありますが、こんな時には意地でも楽しいことを見つけたいものです。

コロナのせいでテレビのドラマが撮影出来なかった時、昔の懐かしいドラマが再放送され、俳優のあまりの若さにビックリし、楽しむはずが時の流れの速さにガクゼンとなってしまいました。

せめてナビでお楽しみ（？）下さい。

米子市　後藤　宏之

今日はどのお面被って舞いますか

（評）時と場所によって、また相手によって、さり気なくお面を付け替えることが出来るお方、ヨッ世渡り上手！

和歌山市　古久保和子

止まったら死ぬと誰かが言っていた

（評）コワイですねえ。オソロシイですねえ。ひと昔前のモーレツ社員みたいですねえ。ところで何しているの。

長野県　丸山　健三

断捨離の森へ行ったり来たりする

（評）身の回りの不用品が無くなってスッキリ、これって幻想かしら。物に埋もれているのが現実だとしたら、嗚呼。

箕面市　酒井　紀華

本当に怒ると声が低くなる

（評）怒ると頭のテッペンから声が出そうだけど、本当は静かーに低ーい声が出てくるんだよ。

堺　市　内藤　憲彦

まあいいか人は生来無一物

（評）〈まあいいか〉の鷹揚さに助けられることがどれほどあるのだろう。他人もそうだが自分自身が一番かも。

鳥取市　倉益　一瑤

診察券増えて毎日忙しい

（評）カルタ遊びが出来るほど診察券がある、という話、聞いたことあります。身体のメンテナンスも大変デス。

鳥取県　斉尾くにこ

いい噂ふあっと風が吹いてくる

（評）いい噂ってなかなか広まりにくいものなんですが、嬉しいですねえ。何だか周りまで爽やかな風が。

札幌市　三浦　強一

気持ちだけ若いが部品要修理

（評）自分自身に歳はごまかされませんよ、誰だって経験済みでーす。アレレ、こんなはずではの連続がツライ。

藤井寺市　鈴木いさお

バーゲンと聞いて駆けだすおばあちゃん

（評）ここで行かなければオンナが廃ります。どうぞ私を止めないで下さい、時間がありませぬ。

豊中市　藤井　則彦

火事場では文殊の智恵を絞り出す

（評）ホント、思わぬ力も智恵も出てきますねえ、でも、出来ればそれが普段から、出てくれればねえ。

※

大阪市　平井美智子

ハグだけで君に感電してしまう

高槻市　初代　正彦

ウィズコロナ先の暮しへ気も漫ろ

藤井寺市　鴨谷瑠美子

菓子鉢が割れて縄文土器になり

大阪市　藤田　武人

文系の脳が挑んだ微積分

西宮市　福田　正彦

首飾り見れば小型の扇風機

熊本市　杉野　羅天

アナログの出番わたくしの活躍

大阪市　田中ゆみ子

拡散を煽る中傷顔がない

尼崎市　藤田　雪菜

ボランティア君の心が眩しくて

箕面市　出口セツ子

鏡とは不仲で買わぬ化粧品

米子市　八木　千代
準備完了米子空港離陸する
大阪市　小野　雅美
言い訳を重ね尻尾がしまえない
松江市　石橋　芳山
慰めに行かねば海が泣いている
寝屋川市　平松かすみ
おしゃべりなオール電化に支配され
弘前市　高瀬　霜石
日本史に刻む昭和の泣き黒子
松山市　柳田かおる
ステイホームで流行りの服が似合わない
唐津市　仁部　四郎
脳味噌のおかげ人生走り抜く
尼崎市　近兼　敦子
おろそかにしていたツケは容赦なく
三原市　笹重　耕三
アナログが置いてけ堀を喰う令和
犬山市　金子美千代
白雪姫のその後はそっとしてほしい
岡山市　永見　心咲
モンダミンお口の中を掻き混ぜる
松山市　郷田　みや
最後まで自力完走いたします
大阪市　井丸　昌紀
クリームを塗り忘れるとこうなんだ
仙台市　月波　与生
モトを取るまでは人生道半ば
大阪市　柴本ばっは
ふらふらの夫バランス取るわたし

土佐清水市　辻内　次根
一念発起これが最後の御奉公
明石市　糀谷　和郎
嘘を塗り重ねて前が見えません
松山市　栗田　忠士
よれよれの辞書も私の宝です
弘前市　福士　慕情
老いてなお俺の出番がやってくる
和歌山市　まつもともとこ
粗大ゴミいえいえボクは資源です
堺　市　遠山　唯教
風の音をまつ千金の炎天下
泉大津市　磯野不二夫
女って俺の言うこと先に言う
佐賀県　真島久美子
プロセスを大事にし過ぎたな秋だ
大阪市　古今堂蕉子
百才までまだ二十年ありますの
鳥取市　前田　楓花
補修して走り続ける父の羽根
大洲市　花岡　順子
自問自答もうすぐ殻が破れそう
香芝市　大内　朝子
継ぎ接ぎでひとつの命生き通す
唐津市　坂本　蜂朗
生家には昭和の風が吹いていた
三田市　村田　博
キューピッドみんな外して又振られ
生駒市　飛永ふりこ
健忘症せめて脚腰鍛えます

堺　市　矢倉　五月
類は友呼んで烏合の衆となる
笠岡市　藤井　智史
時々は休もう人生まだ長い
上尾市　中村　伸子
回ったら傷なんてホラ見えないし
四條畷市　吉岡　修
お祭りを統合したらどないです
和歌山市　土屋起世子
走っても貧乏神は追っかける
神戸市　奥澤洋次郎
ここまでおいで黄昏の一人道
羽曳野市　吉村久仁雄
しがらみが増えて足音重くなる
黒石市　石澤はる子
プライドにがんじがらめにされている
大阪市　石田　孝純
太平洋横断無理だこの風じゃ
羽曳野市　徳山みつこ
何とかしなきゃ墓じまい寺じまい
富士見市　中島　通則
老兵は消え去るのみと潔く

12月号発表
（10月15日締切）

（平本　霧石人　画）
柳箋に２句

二〇二〇年（令和二年）

八月本社誌上句会

投句者二四二人

兼題「だけど」

中村　恵　選

丸ごとを聞いてだけどで裏返す　奈良　大内　朝子
愚痴だけど聞いて下さいほとけ様　大阪　油谷　克己
たっぷりの金と時間はあるけれど　大阪　徳山みつこ
派手な服だけど白髪によく似合う　大阪　齋藤奈津子
俺だけどしばらくじっと聞いてみる　富山　伴　よしお
災害へだけどの時間ありません　鳥取　大前　安子
うなずいてだけど認めた訳じゃない　大阪　森　廣子
それもそうだけどこちらも捨て難い　大阪　佐々木満作
あなたには良いんでしょうがみんなには　大阪　坂　裕之
だけどやっぱりおばあさんには違いない　大阪　谷口　義
真相を吐けば許すと言われたが　大阪　伊達　郁夫
貧しいが魂までは売りません　大阪　伏見　雅明
人みしりだけどホントはよく喋る　兵庫　近兼　敦子
好き同士だけど両家の仲違い　大阪　丹後屋　肇
疲れますだけど嬉しい孫と風呂　兵庫　櫻井　崇史
独りがいいだけども一人では寂し　兵庫　藤岡　りこ
言い訳のでももだけども聞きません　鳥取　伊塚美枝子
胸のうち土砂降りだけど先ず笑顔　大阪　上出　修
サヨナラは私が決めたことなのに　兵庫　上田ひとみ
そうだねえ君の気持は分かるけど　東京　川本真理子
猫だけど横で話を聞いている　大阪　立蔵　信子
そやけどといいたいけれど我慢する　兵庫　山田　厚江
幸せだけど蔭で欠伸をかみころす　大阪　山本希久子
卒寿きて年に不足は無い　だけど　大阪　髙田美代子
責任は認めて　責任はとらず　和歌山　石田　隆彦
神童ともてはやされたものだけど　大阪　中島　一彌
聞いていた話と大分違うけど　兵庫　岸田　万彩
主婦だけど掃除洗濯超苦手　大阪　川端　一歩
お互いのだけどが続く長電話　大阪　山野　寿之
男に生まれて女で生きてます　大阪　村上　玄也
くちびるを盗めば盗めそうな距離　徳島　小畑　定弘
軽いつもりだけど本気で惚れました　奈良　山下　純子

だけどとは言わさぬ圧のあった姑　兵庫　松本ゆかり
だけどだけど　後は涙が芝居する　大阪　原田すみ子
だけどから嘘の枝葉が伸びている　岡山　工藤千代子
故郷は消えたが消えぬ国訛　青森　髙瀬　霜石
過疎だけど蛍は飛ぶし星は降る　青森　福士　慕情
出た杭がだけどだけどと主張する　島根　中筋　弘充
お言葉を返しますがと決め台詞　奈良　吉井テイ子
たらればとだけどで未練ふっ切れぬ　和歌山　木本　朱夏
ええ人やだけど頼りにならへんよ　奈良　山本　昌代
だけどから学んだことがたんとある　愛知　冨田　末男
ひとりだけいい子でなんていられない　兵庫　冨永　恭子
無位無冠だけど友達たんと居る　大阪　石田ひろ子
友達だだけど捺せない保証印　兵庫　萩原　狸月
美人の湯だけど個人差ある効果　奈良　大久保眞澄
こわいけどママが一番だあいすき　兵庫　能勢　利子
黒は黒白は白だと言いますが　大阪　両澤行兵衛
だけどだけど　愛は言い訳ばかりする　大阪　太田扶美代
九分九厘いけそうだけど念を入れ　大阪　奥野健一郎
鉛筆がだけどの先を知っている　大阪　鴨谷瑠美子
運命に不満だだけど面白い　大阪　田中ゆみ子

佳

ダイエット本はたくさん読んだけど　大阪　井丸　昌紀
反論をしたいが丸く収めたい　山口　坂本　加代
絶対の自信だけどに揺れて来た　和歌山　堀　冨美子
だけどから弾んでいった場の空気　大阪　藤原　大子
振り切った傘の滴が手に残る　高知　辻内　次根

人

負けましただけど清々しい気分　広島　小川　道子

地

不肖の子だけど親です味方です　大阪　長髙　俊雄

天

小さな目大きな未来見つめてる　兵庫　敏森　廣光

軸

そうですねだけどわたしがあなたなら

兼題「動　物」

上田ひとみ　選

お手本のようにツバメの子沢山　広島　田辺与志魚
動物を可愛がったり食したり　鳥取　山本ふみ子
半眼であくび計っている駱駝　大阪　峯島　妙
人間の男は懲りた猫がすき　大阪　横山　里子

父さんは二足歩行の河馬である　大阪　鈴木　かこ
ブルドッグもチャボも居た居たあのクラス　兵庫　青木　公輔
マグロ解体ショーにない保護法　岡山　藤井　智史
人間で良かった笑えるんだもの　奈良　吉井テイ子
エアコンの効いた部屋から吠える犬　島根　石橋　芳山
文鳥が冷たくなった左の手　岡山　岡本　余光
超美人動物ですか神ですか　鳥取　中村　金祥
マスク渡したら上手につけたサル　奈良　山下　純子
ハルカスを見上げがっかりするキリン　大阪　齋藤奈津子
うさぎとかめは2勝1敗かも知れぬ　大阪　内藤　憲彦
犬派でも猫派でもなく花が好き　大阪　磯島福貴子
産地なら私も牛も貼ってます　大阪　伊達　郁夫
ペットとは一つ枕で眠る仲　大阪　大浦　初音
狼になり切る絵本読み聞かせ　鳥取　吉田　陽子
触れ合える動物園でするバイト　大阪　津守　柳伸
動物に見られ喜ぶサファリバス　奈良　柚木　涼子
両親がどうのと競争馬の世界　大阪　村上　玄也
ペットより先に死んではいけません　青森　髙瀬　霜石
日本には永住権も無いパンダ　兵庫　多田　雅尚
青空に親熊子ぐま雲の峰　大阪　山根　妙子

休園日ゆっくり空を見るキリン　大阪　米澤　俶子
人間と見た目がちがうだけのこと　大阪　阪本　秀子
眠れない夜は羊が逃げて行く　兵庫　村田　博
愛犬の演技にとても叶わない　大阪　上山　堅坊
三毛はストレッチ私はスクワット　大阪　初代　正彦
動物の雄は雌よりも綺麗　大阪　鈴木いさお
本気で叱ると犬も涙ぐむ　大阪　鴨谷瑠美子
この蟹も一人ぼっちの詩人なり　大阪　太田扶美代
色っぽく流し目で見る雌ゴリラ　島根　原　徳利
農家です吠える犬飼うセキュリティ　兵庫　北野　哲男
人が来て動物たちもやる気出す　大阪　平賀　国和
盲導犬見るとお辞儀をしてしまう　大阪　山岡冨美子
動物的カンで打席に僕も立つ　大阪　吉村久仁雄
考え事あって一人で動物園　東京　川本真理子
産児制限できるのはヒト科だけ　大阪　江島谷勝弘
この肌のどこがうまいか蚊がとまる　大阪　奥野健一郎
獣かどうか月夜に嗅ぎ分ける　高知　辻内　次根
年金で優雅に暮らすペット達　島根　岸　桂子
一匹を話相手に住む一人　兵庫　萩原　狸月

三毛のマリ鼠の尻尾までも食い　熊本　杉野　羅天

戦争をする動物をヒトと呼ぶ　大阪　井丸　昌紀

人間も動物でしたそうでした　和歌山　柏原　夕胡

眠りについたライオンの息遣い　大阪　中村　惠

見物客絶えて淋しい檻の中　大阪　内田志津子

人間の常識なんて知らぬがな　兵庫　近兼　敦子

動物にも育児放棄があるらしい　神奈川　加藤　佳子

青い目の猫は物知り顔である　大阪　立蔵　信子

ペットから見ればわたしはペットです　鳥取　大前　安子

佳

老いぼれたロバだが酒はまだ飲める　鳥取　新家　完司

象さんの目にゴメンネと言うて去ぬ　兵庫　山田　耕治

動物の恋はいつでも命がけ　兵庫　山口　光久

婆ちゃんの童話へ猫も来て座る　広島　笹重　耕三

牛の眼に映る電光掲示板　鳥取　竹村紀の治

人

猫のこと金魚のことの日記帳　兵庫　藤田　雪菜

地

恐いとは言えぬ尻尾を振っている　大阪　平松かすみ

天

君の飼う猫がいけずをするんです　大阪　田中ゆみ子

軸

スカンクだから強いんだから私　大阪　松岡　篤

兼題「稼　ぐ」

高瀬　霜石　選

稼ぐほど税がずっしりのしかかる　大阪　阪本　秀子

血と汗と足で稼いだ棒グラフ　広島　石原　淑子

稼ぐより使うのが好き三代目　大阪　坂　裕之

稼いでも金食い虫の子が二人　大阪　片山かずお

裸一貫妻と稼いだああ昔　大阪　柴本ばっは

初月給まずは御先祖神棚に　京都　今井万紗子

忖度で点数稼ぐ宮仕え　兵庫　北野　哲男

双方の稼ぎを足してローン組む　愛媛　宮尾みのり

僕が稼いだお金妻が使い切る　大阪　松尾美智代

稼ぐだけ稼いでぱっと逝きはった　大阪　安田　忠子

定年後は皿洗いして点稼ぎ　大阪　藤井　則彦

チャリンチャリン稼ぎましたと貯金箱　奈良　山本　昌代

うやむやになるまで時間稼いでる　大阪　松岡　篤

主婦業もお金に換算して欲しい
肩たたき日日百円を稼ぐ孫
老犬とゆっくり稼ぐ万歩計
天国に行く為にするゴミ拾い
時間稼ぎに記憶をなくす人がいる
聡太君タイトル取ってザックザク
ＡＩが稼ぎ人間邪魔になる
日本中コロナで稼ぐ視聴率
小遣いをねだる子豚の貯金箱
一枚の葉書が稼ぐ懸賞金
地獄でした介護しながら共稼ぎ
黄泉までの時間を稼ぐスクワット
健康のため仕事してると言っておく
村祭りすめば私は出稼ぎに
泣きにきた葬儀で儲け話聞く
あらためて働ける幸稼ぐ幸
コツコツと稼ぐお金は裏ぎらぬ
稼いでも稼いでもバラは散るのです
ゴキブリをやっつけ妻の点稼ぐ

兵庫　住吉美和子
大阪　齋藤奈津子
東京　川本真理子
大阪　栃尾　奏子
奈良　大久保眞澄
鳥取　副井ゆたか
奈良　渡辺　富子
広島　田中　敬子
大阪　藤田　武人
大阪　中島　一彌
三重　小河　柳女
大阪　山野　寿之
大阪　大浦　初音
徳島　小畑　定弘
兵庫　山崎　武彦
大阪　宇都満知子
大阪　藤原　大子
広島　岩本　笑子
和歌山　石田　隆彦

家のローン払い終わって退職日
稼いでる男めざしを食っている
父ちゃんの稼ぎ母ちゃん神棚へ
出稼ぎのパパの軍手は勲章だ
二千万何で稼ぐか思案中
バイトして小銭の重さ汗で知る
バイト代ビールの泡と消える夏
稼いだら使う無くなったら稼ぐ
汗だけを信じる作業服を着る
ばあちゃんは無駄にしません電気　水
芽の出ない男に稼ぐ妻がいる
ポイントを稼ぎ小さな夢を見る
時を稼ぐ　海月のように漂うて
初月給そっと渡したプレゼント
やぱりなあマスクで稼ぐやつがいた
夫婦とも時給じゃ子供作れない
仏壇のお花くらいは稼ぎたい
半沢でストレス晴らす視聴率
世の中に善悪がある稼ぎ方

兵庫　冨永　恭子
奈良　吉井テイ子
和歌山　三枝眞智子
奈良　米田　恭昌
大阪　上出　修
大阪　川本　信子
大阪　山本希久子
広島　鴨田　昭紀
広島　田辺与志魚
大阪　平松かすみ
岡山　藤澤　照代
岡山　折鶴　翔
和歌山　木本　朱夏
兵庫　近兼　敦子
大阪　柿花　和夫
兵庫　大坪　一徳
大阪　山岡冨美子
大阪　両澤行兵衛
愛知　冨田　末男

時給千円冷えたビールが待っている　島根　石橋　芳山

佳

生後三日十万円の初稼ぎ　大阪　石田　孝純
俺の税金を票稼ぎにされる　広島　笹重　耕三
こころの贅沢はできますパート代　大阪　立蔵　信子
稼ぐ子にならなかったが元気です　大阪　田中ゆみ子
よく稼ぐ津軽訛りのセールスマン　鳥取　新家　完司

人

よく稼ぐ方ではないがいい男　鳥取　政岡日枝子

地

この世での稼ぎこの世で使い切る　大阪　奥野健一郎

天

ともかくもお腹いっぱい食べさせる　兵庫　上田ひとみ

軸

よく稼ぐ靴ですすこし臭います　大阪　奥野健一郎

兼題「老いらくの恋」

掛け持ちはもう無理みたい老いの恋　大阪　内田志津子
優しくね抱かれる私骨粗鬆　奈良　大内　朝子
お湯割とお好焼でいいふたり　兵庫　永田　紀恵
プライドはもう邪魔しないアイラブユー　佐賀　仁部　四郎
家系図に老いらくの恋外される　奈良　安土　理恵
想い合うだけというのに生臭い　大阪　米澤　俶子
漢方薬効いてきたらし老いの恋　大阪　鈴木いさお
嘘やない茶飲み友だちだけだって　兵庫　北野　哲男
おうどんがおいしいねえと恋すすむ　広島　古川　雄一
老いらくの恋にはたらぬドーパミン　大阪　片山かずお
ポックリ寺で出会ってからのお友達　奈良　加藤江里子
休まずにラヂオ体操行く理由　兵庫　亀岡　哲子
なんたってアラン・ドロンの外はなし　奈良　長谷川崇明
音をたて入れ歯が軋む熱いキス　兵庫　村田　博
生命保険の受け取り人で揉める恋　大阪　中島　一彌
食い込んだ指輪気になる老いの恋　島根　竹治ちかし
老い二人今独身と言う出会い　大阪　澤井　敏治
お隣のばらに微熱が下がらない　埼玉　久保田千代
悔いはなし失楽園に散る二人　山口　坂本　加代
老いの恋喉につかえてままならぬ　大阪　江島谷勝弘
いいじゃんか子どもができる訳でなし

昔ばなしばかりで恋が弾まない　奈良　菱木　誠
日々重ねまだ君思うあほらしさ　大阪　岩口のぞみ
老犬が首輪外せと吠えている　島根　中筋　弘充
わたくしも独りだなんていう誘い　広島　笹重　耕三
蠅取紙のような老いらくの恋　岡山　大石　洋子
鏡正直老いらくの恋駄目という　鳥取　政岡日枝子
初恋のひととデイサービスで遇う　青森　髙瀬　霜石
好きだけど介護してやる程じゃない　兵庫　野口真桜子
ママゴトの延長戦がまだつづく　兵庫　青木　公輔
Aまでの約束で逢う老い二人　大阪　谷口　東風
年金の多寡で気後れしてる恋　兵庫　岸田　万彩
おばあちゃん何故か香水つけ出した　大阪　川端　一歩
お茶ふたつ買うて割引映画館　兵庫　山田　耕治
籍入れんかったらいいと子が許す　大阪　鈴木　栄子
点滅もあるが種火が残ってる　大阪　川本　信子
好い人が居らず貞操持ち腐れ　兵庫　山内　迪
老いらくの恋やったもん勝ちでしょう　鳥取　山本ふみ子
ぐらぐらと揺れております心電図　青森　稲見　則彦

きっかけは茶飲み友達だった筈　大阪　山根　妙子
滑って転ぶだけで別れの時が来た　京都　山田　葉子
シルバーになって火のつく消した炭　大阪　伏見　雅明
低温火傷　年金暮らしの恋　岡山　藤井　智史
終活に華をそえてる人になる　和歌山　藤原ほのか
ばあば綺麗と孫言うのですウフフ　大阪　小川賀世子
老いらくの恋にはげしい蝉時雨　大阪　谷口　義
観覧車ながめるだけの老いの恋　大阪　髙杉　力
ロマンスグレー私色に染めようか　奈良　吉井テイ子
遺言はあなたを妻にしたかった　奈良　居谷真理子
孫達をびっくりさせてみたい恋　大阪　平松かすみ
胸キュンはないがほんわか同士です　兵庫　山端なつみ
喜寿の恋息子の嫁に背を押され　兵庫　大坪　一徳

佳

髪も歯も無いがハートは燃えてます　兵庫　多田　雅尚
カルチャーにノド飴呉れる人が居る　宮城　木田比呂朗
じいちゃんが花占いに凝っている　大阪　平井美智子
抱擁もよろめきながら支え合う　大阪　上出　修
逢い引きはデイサービスの月と金　大阪　石田　孝純

人

蘇るワクワク狂いだすピンク　島根　石橋　芳山

地

この歳になっても指切りはします　大阪　立蔵　信子

天

燃えそうで燻るだけの老いの恋　大阪　初代　正彦

軸

仕方なくプラトニックに寝ています

兼題「傑　作」　小島　蘭幸　選

傑作な大河ドラマの中にいる　和歌山　北原　昭枝
やすきよもダイラケも居るユーチューブ　大阪　藤田　武人
傑作の披露だ早朝の砂丘　鳥取　中村　金祥
ポパイの腕から飛び出して来た漫画　和歌山　松原　寿子
傑作の日々を許してくれたひと　鳥取　政岡日枝子
少年の傑作を見た新棋聖　岡山　岡本　余光
感性をひっさげ寛斎よサラバ　大阪　栃尾　奏子
家庭菜園三年目の傑作　鳥取　山本ふみ子
傑作だった過去の思い出マル秘です　和歌山　村中　悦男

どなたにも見せたことないわたしの絵　大阪　江見　見清
リハビリのふるえる○を額にする　岡山　大石　洋子
傑作の評価は死後に定まった　兵庫　松本ゆかり
ムダだとは思わないがアベノマスク　大阪　江島谷勝弘
座右の句私の脳を太らせる　大阪　太田　昭
不揃いでも僕の傑作ナスキュウリ　京都　今井万紗子
傑作な野菜ごろごろ夏カレー　大阪　立蔵　信子
コーヒーどうぞ傑作集を積み上げて　広島　岩本　笑子
深夜便繰り返し聴く方丈記　山口　上村　夢香
渾身の句集この世に残せるか　大阪　阪本　秀子
傑作も駄作もまじるさつまいも　大阪　三好　専平
夭逝の友が遺した名句集　徳島　小畑　定弘
贋作と誰にも見抜けない茶碗　大阪　村上　玄也
ピカピカの五円で作る金閣寺　兵庫　清水久美子
サザエさん今も読んでる良く笑う　大阪　髙田美代子
いいねと君が言ったそれで充分　大阪　小川賀世子
実験のミスでノーベル賞をとる　愛媛　宮尾みのり
嬉しいという字傑作だと思う　島根　中筋　弘充
けっさくな風刺漫画にある真実　埼玉　中島　通則

左手で書いた墨字に味がある　大阪　古今堂蕉子
百歳が笑って食べて歩いてる　兵庫　能勢　利子
文豪の机見てきたバスツアー　大阪　太田扶美代
ふぐ刺しが透けて見せてる伊万里焼　岡山　藤澤　照代
将棋界の最高傑作は聡太　大阪　鈴木いさお
幼稚園傑作並ぶパパの顔　兵庫　緒方美津子
家伝の糠味噌吉兆にも負けぬ　兵庫　岸田　万彩
傑作を平積みにして古本屋　広島　田中　敬子
傑作生み人を育てたトキワ荘　奈良　加藤江里子
傑作は一男一女孫四人　島根　竹治ちかし
特別な絵です額縁は質素に　奈良　居谷真理子
母さんの傑作になる筈でした　大阪　石田　孝純
傑作のひとつに妻とサファイア婚　広島　笹重　耕三
風呂敷という和モダンなエコバック　大阪　美馬りゅうこ
生涯の傑作だろう日記帳　大阪　松岡　篤
鬼気迫る南大門の仁王様　大阪　初代　正彦
傑作はダブル主演の夫婦愛　岡山　藤井　智史
傑作の新幹線はまだ無事故　大阪　山野　寿之
お宝を傘立てにした三代目　大阪　大島ともこ

零戦も大和も傑作ではあった　佐賀　仁部　四郎
やがて名曲生む少年のハーモニカ　大阪　山本希久子
声の傑作宮本武蔵夢声節　兵庫　上田　和宏
傑作のドラマ描いている途中　兵庫　冨永　恭子
てにをはの違いで天位逃がしたの　和歌山　木本　朱夏

佳

検察官の賭け麻雀は傑作だ　兵庫　山田　耕治
らく書きもバンクシーなら許される　兵庫　藤岡　りこ
ひまわりがゴッホを超えて咲いている　奈良　大久保眞澄
最高の傑作産んだのは私　和歌山　柏原　夕胡
ピューリツア賞の写真多くを語らない　高知　辻内　次根

人

100円ショップ110点の満足度　青森　髙瀬　霜石

地

僕だけの傑作　僕だけの涙　東京　川本真理子

人

生涯を飾る一句は胸にある　**宮城　木田比呂朗**

軸

祝吟に笑った弔吟に泣いた

エッセイ

星の王子さま名言集

水野黒兎

「星の王子さま」は飛行士で小説家であるサン・テグジュペリの童話で、原題は「小さな王子」ですが岩波書店ではじめて日本語版が出版されたとき、訳者の内藤濯が「星の王子さま」という素晴らしい題にしたのです。いまでは他に多くの翻訳書が出版されていますが、内藤版と同じ題名の本が多いようです。

この本の中には数々の名言がありますがその幾つかを紹介するとともに、本の内容にふさわしいと私が思った川柳を拾い出してみます。名言と同じ意味の川柳ということではありません。

先ずは、バラの花の扱いにとまどった王子さまの言葉

「花の言うことで判断するのではなく何をしたかで判断すべきだったんだ」

愛のある暮しで花を絶やさない　楓楽
楽しいね花が咲いてるだけなのに　大輪
百花の種蒔く喝采の日のために　富湖
覚悟して薔薇は剪るべし奪うべし　朱夏
罠のようなチャンスのような花の笑み　希久子

次に砂漠で仲良くなったキツネが王子さまに言った言葉

「こころで見なくっちゃね、大事なことは目には見えないんだよ」

菜の花の中に涙は置いて来た　蘭幸
いい名前スズラン桔梗ハナミズキ　完司

さらにキツネはこう言ったのです

「あんた（王子のこと）はこのことを忘れてはいけないよ、面倒をみた相手のことはいつまでも責任があるんだよ」

花は咲く歌うととげとげ消えている　富子

砂漠の中で水を見つけるため王子と飛行士は歩き回ることになり、その途中で、王子がつぶやいた言葉がこれです

「水はこころにもいいものなんだろうね」

そして二人はついには奇跡的に井戸を見つけることができ、王子さまが飛行士に言いました

「探してるものは、たった一輪のバラに、そしてほんの少しの水にだってあるんだね」

許したのは私の中の水の部分　蘭幸
ちから水たっぷりくれる家族たち　楓楽
人間らしい器だ水が漏れている　朱夏
水を飲む時人間の音がする　平田朝子
心にも地球にも水チャージする　加藤ゆみ子

物語の終わり近く、すっかり仲良しになった王子と飛行士に別れが近づいてきます。そんなときに王子が飛行士に言いました

「もし君（飛行士のこと）がどこかの星にある花を好きだったら夜、空を眺めるのがたまらなく心地いいんだよ。どの星にも花がいっぱいだからね」

半額のバラでもバラは美しい　能子
雲たちに話そう空を見上げよう　(八)千代
美しい花だな夕暮れが似合う　扶美代
母の星見えるマンション買いました　たもつ

サン・テグジュペリは千九百年生まれ、第二次世界大戦中は偵察機のパイロット、北アフリカで連合軍の飛行士となったが千九百四十四年、コルシカ島を飛び立って二度と帰還することはありませんでした。消息を絶った飛行機は長く行方不明でしたが、二千三年にマルセイユ沖で発見された機体の一部が搭乗機と確認されました。

柳界展望

▽訂正とお詫び△

○8月号、P51下段16行目と9月号、P58下段20行目。いずれもお名前が間違っていました。

高瀬昭枝→高瀬照枝。

▽新誌友紹介△

大阪市　岡本　五六

大阪市　東　敬朗

紹介者　平井美智子

鳥取県　本庄　汪

尼崎市　中岡千代美

★「第21回四万十川川柳全国大会」。同人成績。

大会賞　居谷真理子

戦争の話は古いのでしょうか

四万十ロータリークラブ賞

平井美智子

ヘルパーが時々手品してくれる

次回常任理事会

近日開催予定。

新同人紹介

谷（たに）　英（ひで）也（や）

―正彦・憲彦推薦

句会部よりお知らせ

川柳塔本社11月句会は、下記の要領で誌上句会といたします。
皆さまのご投句をお待ちしております。

記

『川柳塔』１０月号に投句用紙を同封します。
（未読の方は川柳塔社事務所までご請求ください。）
投句締切　１０月３１日（月）消印有効
入選発表　『川柳塔』令和３年１月号
投 句 料　１０００円（切手不可）

兼　題「ショック」	森山　文基　選	（沖 縄 県）
兼　題「探　す」	松本　文子　選	（島 根 県）
兼　題「大　人」	木本　朱夏　選	（和歌山県）
兼　題「　風　」	菱木　　誠　選	（奈 良 県）
兼　題「単　純」	新家　完司　選	（鳥 取 県）

（各題２句出し）

問い合わせ・送り先

〒543－0052　大阪市天王寺区大道１－１４－１７
花野ビル２０１　川柳塔社
TEL 06-6779-3490

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願いいたします。
編集部

豊中もくせい川柳会（大阪）初代　正彦報

職人芸細かい部分目を見張る　多美子
テロ暴動なく九条に感謝する　憲　央
次はいつ三波春夫を聞けるのは　多津子
人類の知恵と器量を試す神　健　二
泣き笑いする日日にみる子の育ち　時　子
泣かないであなたの努力見てきたよ　英　三
半端な保証とても休業できません　きらり
留守電にして仕上げのひと煮ママレード　公　子
きのこ雲知ってる少女老いにけり　(永)玲　子
泣くよりも笑って過す年の功　敏　昭
失敗で泣いた分だけ強くなり　野　鶴
ほどほどの迂闊さあって人が寄る　堅　坊
ときどきは母の海へと泣きにゆく　ヨシエ
泣きながらそろばん弾くしたたかさ　ふりこ
素人でも半端ではないその手並み　満　作
笑っていよう細かい事に目を瞑る　美津子
コロナからみんな半端な暮しぶり　(岩)玲　子
でき過ぎの細かい配慮夏の恋　弘委智
細かい努力積んで大きな夢実る　美智代
忘れものは井上陽水にウフフ　勝　弘
問い詰めて白状させて又怒る　見　清
炎天にあっけらかんと物忘れ　洋　志
集合写真へ大きな虫メガネ　憲　彦
倦怠期重箱のすみ突き合う　英　旺
好きな人にまだ見せてない男泣き　則　彦
割勘の半端上手に幹事処理　黒　兎
蝉の絵を書いてご自愛申し上げ　耕　治
それぞれの変容迫る魔女コロナ　正　彦
細かいと言われ勤めた庶務課長　武　彦
勝利者は藍で泣いてる人を知る　真理子
半端じゃないコロナウイルス二波三波　肇
まだいっぱい夢にあふれている命　忠　子

和歌山三幸川柳会　西川　千鶴報

そこそこになるまで放せない支柱　八重子
そこそこの幸せでよし茶粥炊く　起世子
終着駅一駅前で下車したい　一　雄
今日も又漢字が消えた忘却症　准　一
介護する膝がそこそこ愚痴を言う　昭　枝
最新の改札機付く無人駅　まき
誉められても苦にもされずに生きている　日出男
一張羅を着ればそこそこ様になる　かず子
人恋し猫が相手の過疎に住む　昇
そこそこの絆で今日も波静か　美枝子
失恋の痛みを節に強くなる　敏　照
自分史に織り込むセピア色の恋　菜　摘
ほろ苦い酒で別れを告げた恋　当　代
頭陀袋そこそこ欲を放りこむ　幹　子
正解を消しそれからの廻り道　智　三
子の知恵を借りて威厳も捨てて行く　宏　枝
過去形になれば罪さえ美化される　理　恵
モノクロの恋が今でも微熱する　和　子
しがらみを断って始発の駅に立つ　ひろ子
八頭身にしてくれた影法師　俶　子
ゴールまで戦い抜いた車椅子　純　子
忘却が次の一歩を受け入れる　富　香
失恋も見合いも何度したことか　保　州
駅で買う旅の楽しみ小鯛寿司　義　泰
初恋も賞味期限が切れました　珠　子
そこそこにしときなはれと猫パンチ　眞智子
無人駅時代の流れ噛み締める　彦　弘
駅舎だけ残しドラマも老いている　ダン吉
沙羅双樹恋ははかなきものなのか　明　子
そこそこに生きて生まれる笑い声　あき子
副作用注意しながら恋をする　知　香
鍛えればそこそこ出来た嫁になる　みつ江
君恋し健康寿命延ばすかも　悦　男
そこそこの暮らしでいいさ平和です　康　則
いつだって序曲で終わる恋ばかり　千　鶴

川柳塔みちのく（青森）　稲見　則彦報

切手にも願掛けをするラブレター　隆　樹
二人の子儲け過ごした道豊か　初　枝

わたくしに切手をはってゴミに出す　則彦
咲きましたよと花の切手で来る手紙　のぶよし
ご立腹らしい切手が曲がってる　黙人
コーヒーを緑茶に変えてミニ自衛　真由美
毒少し舐めて切手を貼ってみる　柳子
人の性儲け話につい嵌り　ふさゑ
蟹は泡ぶくぶく自問自答する　劦
句作りにえんぴつ片手とろとろと　澄子
出店無く桜香ばし弘前城　英子
熱燗の相手が欲しい一人酒　花峯
久闊を記念切手で詫びを入れ　きよし
思い込めぺろりとなめて切手貼る　孝子
とろとろもどろどろもある人の道　京子
恋文に思いを込めて切手貼る　重虎
激励の手紙アトムの切手貼る　霜石
戦火を潜り元気な余生儲けもの　洋子
とろとろと自問自答の吹き溜まり　一呑
汗流し儲け度外視ボランティア　風来坊
切手からの告白受けて立ちましょう　和香子
衣更えポケットに居た諭吉さま　慕情
文面の続きでしょうか花切手　美鈴
大富豪きっと退屈お気の毒　規子
損しても得は中々近寄らぬ　ひとし
電気消すだけで宇宙になる厨　吹喜
胸にしまった秘密切手のない手紙　ちづ子
切手では渡してくれぬ黄泉の川　龍馬
気に入った切手は思う人宛に　ひろ
甘塩が好みの僕に合った鮭　呑舟

南大阪川柳会　松岡　篤報

青春も故郷も恋も渋い過去　弘委智
白髪増え渋い男に成って来た　通江
兄弟船鳥羽一郎の渋い声　あや子
渋り腹娘が来ると太っ腹　よしみ
燻し銀渋い光の佇まい　亜成
まだ探究をすると言う聡太君　勝弘
渋柿の恨みを蟹は忘れない　克己
渋好みいっそ禿頭袈裟に数珠　直樹
家事全般不得手了見飲んだ彼　柳伸
コロナ禍に思案それぞれ識者会　妙子
民を無視辺野古進める了見は　一歩
遺徳だろうすぐまとまった異議はない　修
娘の了見母はだまって呑みくだす　志華子
なんという了見犬もそっぽ向く　大子
二杯目は妻の了見次第です　郁夫
若者の渇いた言葉裏が無い　ばっは
甘党の父ぜんざいにゆるむ頬　柳右子
生中を一杯呑めばリラックス　いさお
一杯が二杯になってトラになり　篤
優しくされ涙腺ゆるむのも加齢　シマ子
また明日ゆるい言葉を手で包む　弘子
日本中地盤はゆるむ今日も雨　直子
気がゆるみいつでも何か忘れもの　峰子
スピーチを済ませてやっと箸をつけ　俊雄
終りが見えぬコロナウイルス只無口　ルイ子
静寂を破りたく聞く深夜便　純子

佳句地十選　（9月号から）

倉益一瑤選

弱いもの数々あれどまずは妻　清
ふと触れた指の柔らかさに惑う　芳光
出る杭も背伸びもいつか叩かれる　慕情
ブランコよ私の過去へなぜ揺れる　鬼焼
テレワーク息子の仕事垣間見る　輝恵
ぎゃあぎゃあと文句ばかりで何もせぬ　由起子
遺伝子は要らぬところもコピーする　ゆり子
コーヒーが冷めてぼつりと別れよか　靖夫
鱧が出て冷酒を頼む羽目になり　正和
避けるのに便利な言葉アレルギー　弘美

木田比呂朗選

握手するためにあります五指全部　くにこ
出る杭も背伸びもいつか叩かれる　慕情
未送信メールにわたくしの本音　知香
ルーツ知る墓に詫びつつ墓終う　紫陽
他人は他人自分は自分ケリつける　大鯨
プラゴミが流れる海で泣く人魚　(矢)五月
天の川流れて父のかたぐるま　俶子
飢餓の子に愛の一片届けよう　(高)千賀子
夕凪の海へと捨てる今日の鬱　堅坊
メルヘンがいっぱいバティシエのタクト　尚子

蚊の羽音ぴしゃり一撃老の耳朶　歌留多
エレベーター皆同じ所見て静か　ひさ乃
静寂が怖くてラジオつけておく　実
混む店は避ける静かな店不気味　東風
波静か怒りおさえてるのだろう　ダン吉
思い知る世界は一つコロナ危機　国和
暑いなあ酒でも飲まなやっとれん　昌紀
川柳を不要不急というなかれ　楓楽
コロナ禍に向日葵じっと立ちすくむ　博

竹原川柳会（広島）　古田比呂子報

ゆらり来る風と風鈴たわむれる　比呂子
限界をゆらりと歩くやせ我慢　節生
強風にゆらり体が宙に浮く　宣之
この危機をゆらりゆらりとジジとババ　節夫
美人ではないがゆらりの妻といる　白狐
ブランコの青春ゆらり淡い恋　弘子
ゆらゆらりママのお膝でどんな夢　幸子
満ニ十才突っかい棒をはずされる　敬子
井戸水を母と担いだ昭和の日　慶子
一本の棒に命を綱渡り　淑子
杖になる棒を探しているのです　蘭幸
梅一つ煮付けの鯖は母の味　笑子
錆び付いた脳でもいいさ生きてゆく　鬼焼
三枚おろし鯖で練習しましたよ　千代美
四時に来る朝刊読んで錆溶かす　夢香
惚けぬよう脳に防錆処理をする　昭紀
喧嘩している内はまだ錆びてない　輝恵
アンテナが錆びて心が揺れている　栄香
お母さん笑ってよ子ども鋭いな　歩美
墓参り聞いてもほしい一人言　規代
神々し医療従事者命がけ　初音
立葵アイスキャンディ売りに来る　厚子
飛行機雲遅れたはぐれ鳥一羽　貞子
素振りする明日はきっと打てるはず　史子
サササササにんじゃばしりでかくれんぼ　五歳　ちか
おおあめはおにがそらからふらせます　六歳　ひろむ

川柳塔唐津（佐賀）　仁部　四郎報

物語り三角四角からむ筋　高明
一本のザイルに命託す仲　蜂朗
コロナ禍で誰も邪魔せぬ美味い酒　廣幸
雲海の海抜ゼロで小休止　四郎
現金の方がよく効くお賽銭　實

川柳ふうもん吟社（鳥取）山下　凱柳報

拍子木で子供集めた紙芝居　毅
寅さんの後ろ姿にある余情　千代
モリトモをそのマスクでは隠せない　春雄
あの頃の面影を追う同期会　螻蛄
沈む日の一番星に夢乗せて　一平
独身のあの頃が華夢ばかり　幸子
沈んでる暇などないと母の意地　厚子
浮き沈みの俺に惚れたと演歌節　振作
出し惜しみして干涸びた知恵袋　美恵子
走らねばならぬ夕日が沈むから　一粋
検診の待合室は気が沈む　節子
しがらみをぬけてただいま自由人　紫陽
あの頃は髪がふさふさ男前　勲章
この星がコロナで沈むのは嫌だ　天翔
振り向けば没句ばかりで身が沈む　とも湖
粒かぞえ薬のむ度気が沈む　節子
夢うつつ女の句は早や終わる　茂子
若いあの頃何でも遣ってみたかった　房江
没の句を再度砥石にかけてみる　みつこ
合掌のかたちで嘘を吐いている　賢悟
人間はまさかの坂で喘いでる　金祥
あの頃の日記MとかZとか　楓花
体力がないと沈めぬ水の中　善平
しゃべらずにいれば私もいい女　真理子
いい耳だいいことだけを聞いてくる　桐子
母の目は沈んだ顔を見逃さぬ　みゆき
無精者磨けば光る顔をして　蟹郎
ダンスパーティー心も足も手も震え　白兎
勝ち負けに拘る背に風が舞う　稲佐嶽
三行で足りぬ日記へ陽が沈む　千代
敵にするには惜しいと思う人間味　一瑤
追憶の彼方の君の手が温い　敏夫
あだけたら次はないよと妻の激　回春子
我が家では主役はいつもこの私　八千代
肩書取れ顔も背中も丸くなる　凱柳

岩美川柳会（鳥取）　山下　節子報

苦労した汗だ大輪きっと咲く　一瑤
働き方形態変えたテレワーク　凱柳

俺も蜂家族のために懸命に　弘　六
ボランティアの汗宝石に似て光る　美恵子
今頃の脅迫菌を撒くという　たぬ
勤労に励む私に日が沈む　菖子
十一月二十三日母に謝辞　幸安
勤労の奉仕も空し敗戦日　敏子
蜂だって命がけです針も出す　真理子
苺農家蜜蜂の過疎泣き所　一平
父母の汗たまものとして背を拝む　雅女
新棋聖も蜂も急所をはずさない　彰夫
米作り黄金の波ロマンある　千代
貝殻節勤労たたえ唄い継ぐ　重忠
勤労を癒やす立ちキュウ止められぬ　蟹郎
ひや汗をかく弁解はできません　節子

川柳同友会みらい（鳥取）吉田　陽子報

八十路坂頑張って来た自分誉め　章子
酔い姿孫が真似ると諫められ　健二郎
まだ届かない夢へ登っている梯子　亜矢
日焼けした顔は農婦の勲章だ　和代
野の花へ語りかけてる気のゆとり　安子
晴れマークに当地の習い傘を持つ　美恵子
予定消え受診の予約ばかりなり　一眸
ギャンギャンと騒ぎ活路は見出せず　華蓮
やっと来たマスクに罪なしありがとう　恵子
紅筆が忘れた口の描き方　みどり
消費期限夫の舌に訊いてみる　悠奈
顔見せて交わす会話に時忘れ　游子
話足りない一汽車を外しても　七絵
立ち直りとにかく早い戦中派　菜美
長く生き詫びねばならぬ事ばかり　洋子
嬉しさを入れるえくぼが二つある　八重
目録の終わりに後期高齢者　陽子
にこにこと握手している犬と猿　観洋
風を読む右に左に揺れている　ダン吉
ひっそりとしみじみ祝う喜寿となる　節子
若冲のにわとりが鳴く朝ぼらけ　公弘

川柳茶ばしら（愛知）関本かつ子報

カジノつくりいつかはハマリ自己破産　雅美
電話なら感染しない長電話　遡行
杖を持ち石を数える散歩道　三樹夫
切れ味がだんだん鈍くなる五感　美千代
生活の八割方は妻頼み　まみ子
プライドを捨てろ捨てろと紙オムツ　かつ子

プラザ川柳（大阪）穂口　正子報

黙り中亭主に叫ぶ「虹が出た」　正子
川柳こそ人が溺れるモデル例　園子
我が家では皆笑顔の誕生日　政夫
今月も文字におぼれアップップ　求
一杯のラーメン分けて食った人　五月
夏の夕虹に打ち水涼を呼ぶ　悦夫
幼い日両手広げて虹つかむ　和代
自販機でじっと出番を待つ金魚　清乃
おしどりで議員夢見て金をまく　修
大騒ぎの水遊びの子虹を生む　克三
コロナ禍で帰り気遣う先祖様　淳司
打ち水の涼しさの中虹一つ　景子
カナヅチが河童になった疎開の子　弘光
マスク着け平和を誓う原爆忌　一彌

倉吉川柳会（鳥取）竹信　照彦報

浮き沈み世の習いです縄を綯う　雄大
最大に沈む太陽茜色　日出子
母が逝く沈む心に孫誕生　紀美恵
日本海が飲み込むように陽が沈む　風露
昼寝あと陽が沈むまで草取りだ　さちこ
美しい沈む夕日に明日がある　恭子
トゲがあるバラが悩みを聞いている　麦青
中元で互いの安否聞いている　玲子
もっとよく聞けばよかった我がルーツ　萩江
狼の遠吠え聞いた歩哨線　重忠
聞く耳はもたんもたんと膝が出る　隆昌
聞いて不安聞いて安心する世情　龍枝
民の声聞いた判決「黒い雨」　鬼一
おいコロナ何が目的返事せず　野蒜
どちらかと言えば無口な君がよい　由起子
どちら様わたしあなたの娘です　宣子
赤い糸結んだ糸はどちらかな　美知江
爺と婆どっちが先に仏さま　石花菜
鉛筆の倒れた方へ賭けてみる　大鯰
どちらから東京からと言われない　酔芙蓉
杉林今はいったいどうなった　瑞子

杉玉もシャッター街に寂しそう　祐子
杉皮は滝の如くの雨防ぐ　次男
杉の香は森林浴を思い出す　道春
母の里三本杉のちと手前　けいこ
木の家が杉の香りで盛り上がる　茂夫
皆様へ迷惑ばかり杉花粉　照彦

はびきの市民川柳会（大阪）藤原　大子報

雨音と川の流れが競い合う　千鶴子
チャチャチャからはじまる恋の物語　専平
住宅地ピアノの音がもれ聞こえ　正義
この地にもパンデミックの音噴くか　冬の朴
音無しのかまえは愛猫のオハコ　シルク
待ってました朝刊コトンちょうど四時　勝弘
無観客打音と捕球音響く　久仁雄
反抗期絆の切れた音がした　扶美代
ごくごくと水飲む音は生きる音　みつこ
祭太鼓彼方に亡兄の撥さばき　理恵
八月の朝だ地獄の音やった　ダン吉
サイホンのポコポコ朝のごあいさつ　宏造
聞きわけてくださいわたくしの音色　瑠美子
帯ポンと叩き今日から若女将　美代子
イクメンの倅に浮かぶ亡夫の顔　久仁子
一人親増えて育つ子がまんの子　かつ美
自粛中家族の忍耐育ってる　洋一
ブチトマト真っ赤に育ちおすそ分け　フジ
山椒を育て揚羽を待っている　ゆみ子
水田の日々に濃くなる早苗色　ひとみ
背むいても背むかなくても育ってる　五月
後期高齢育ち盛りの爪と髭　いさお
雑草は根っこに強さ育てる　大子
子と共に私も育つ親として　こみつ
なにげない母の心に育てられ　一文
犬ぐらい思い通りに育てたい　まつお
声かけてやれば花木もよく育つ　一歩
この辺でお酒止めてと目で合図　さくら
マスクして手洗いしてもまだ不安　ちづる

きゃらぼく川柳会（鳥取）後藤　宏之報

手始めは恐る恐るの食事会　宣子
そら豆のこの味妻で三代目　宏之
再起する為に寝ておく食べておく　俊久
豪雨など歓迎しない梅雨前線　汪
やる気さえあればネットが教えます　恵子
病名はコロナ対策過敏症　雨奇
近頃は札打ちの文字コピペです　美緒
どっこいしょ歳に甘えて生きている　多美子
飲んで効く直ぐに治ると言うサプリ　紀の治
八十四才元気長生きうれしいね　美草
黒マスクだけは慣れずにギョッとする　美穂
ゴーヤがやっと芽を出す夏至の朝　瑞枝
マスク顔思い出せない人の名を　治代
腹時計香り豊かに食さそう　菜々
その日咲く花もあろうに大豪雨　千代

川柳塔鹿野みか月（鳥取）福西　茶子報

かっこ良く払った後で割り勘定　ゆり子
遺産分け詳しいことは遺書に書く　ゆたか
脳の煤払った筈がすぐ溜まる　慎一
威信かけオリンピックだ金と金　正男
プライドが動かぬ脳に発破かけ　静恵
来世では五輪選手で飛び跳ねる　睦子
コロナ騒動オリンピックが宙に浮く　実満
支払いを済ませきれいな息を吸う　英子
日本地図詳しく見れば傷だらけ　すみれ
呼べばすぐ動いてくれる人がいる　かおる
安物買い高い代償払う羽目　弘子
誰よりも信じた人は星になる　光幸
騒動も幾度かあって家族です　盛桜
支払いは任せておけと妻を見る　草文
柏手に気持が働く神もいる　文道
喝采よ変な噂も打ち払う　孔美子
コロナ禍に人の動きが止まる街　小鹿
痴話喧嘩詳しく聞かぬ方がよい　幸美
無観客のオリンピックはないだろう　宏章
あれこれとボタンを押して動く朝　孝子
人影を監視カメラがつき止めた　一平
見切り発車動きながら考える　大鯰
天国のことに詳しいお寺さん　完司
このままじゃ地球に誰も居なくなる　楓花
オリンピック誰が中止の断下す　照彦
オリンピック止めてコロナに金まわせ　蟹郎
朝酒をのんで悪夢を追い払う　重忠
オリンピック俺は畑で汗をかく　弘六
そのうちに僕も言いますアナタダレ　恒
五輪旗もコロナ菌との鬩ぎ合い　ポール
私が誰かわからぬ時が来る　ちかし

オリンピックこの一瞬に命かけ　八千代
後で知る払う代償その重さ　甚　禄
詳しくは蟻の骸に聞いてみる　熊四郎

川柳塔すみよし（大阪）古今堂蕉子報

日除けにと風船かずら絡ませる　満知子
風船に夢と希望を大空に　美世子
多少ならショックが刺激奮い立つ　民　子
風船でビラを撒いたらもめますよ　勝　弘
薫風に引っかかってる赤風船　重　信
言い勝って引きずっている自己嫌悪　大　子
スマホより紙の手触り辞書を引く　直　子
貧乏くじひいて自死した赤木さん　福貴子
引き潮に見せて手強いコロナ菌　たかこ
ロボットが手術しますと主治医言い　里　子
誰と逢う化粧ですかと問う鏡　雅　美
1，5億誰から誰に渡ったか　篤
コロナはいかが袖を引いてる夜の街　昌　紀
どなたでも良い訳でないパートナー　まつお
黒マスク誰かわからぬ匂いする　公　誠
誰彼なく喋るは妻の悪い癖　シマ子
想定外読みの甘さを川暴き　久仁雄
アドバルーン飛ばして鳥と競い合う　志津子
枝豆と豆腐肴にクールビズ　克　博
わだつみの声がとどろに胸を刺す　俊　雄
蹲いたショックを逆に範とする　裕　之
行き付けの店からコロナ発症者　久美子
神隠しか無人のシャッター街を見て　たかこ
幕引きは五欲しっかり食べてから　万紗子
甲子園名物風船勝ち名乗り　小枝子
思い出の風船一つ雲に乗る　舞　夢
風船に乗せる私のアンビシャス　ふりこ
人生の節目節目のあみだくじ　萠
ショックでも素知らぬ顔をする器　寿　之
甲子園風船飛ばぬのも寂し　さくら
誰からも誘われ楽し老の坂　廣　子
寝て起きて誰に遠慮のないひとり　ゆみ子
手放した風船を追うランドセル　満　作
太平の惰眠へコロナ禍のショック　進
へそくりがバレて血の気が引く思い　いさお

富柳会（大阪）山野寿之報

塞がれた心へ愛のひとしずく　和　子
手の届く位置で心が掴めない　恵
ホロ酔いの二人の恋に蓋をする　武　人
胸の疵塞ぐ優しい温い嘘　寿　之
海の日は泳ぐと決めて八十路坂　よしみ
月旅行実現可能近未来　高　鷲
闘ぎ合う理論武装の矛と盾　壽　峰
世界史に残るコロナの今生きる　田鶴子
身辺の整理をせかす蝉しぐれ　澄　子
鬼ヤンマ悠悠青い青いくに　欣　之
歯科内科銀行駅も徒歩五分　清
さみしいとつぶやく友の黒マスク　あかり
八月の祈りが眉の位置正す　かこ
御近所の猫のトイレはうちの庭　由　夏
胡瓜茄子返しが届く蟹二杯　きみこ
日本中感染増えて知事多忙　正　義
立飲みの温い仲間は皆施設　きよみ
平和ボケ何のアラート危機はそこ　常　男
シナリオに手ぶらで良いと書いてない　隆　允
本棚に並ぶ夢中になった事　章　子
正論が伝えられなくて雨ざらし　安希子
黄昏て海馬塞がりヒト科ヒト　良　恵

川柳あまがさき（兵庫）大浦　初音報

大波乱あってドラマが出来上がる　(高)千賀子
想い出は寄せては返す波の音　雄　次
懲役より辛いと嘆く禁固刑　英　坊
言葉じりとって波立つ胸の内　初　音
さざ波は百万年の子守唄　健　二
カタカナ語辞書が古くて載ってない　新　録
名前負けするな命名富岳くん　和　子
さばさばと災害話す目に涙　れい香
五七五で無聊な日日を慰める　りこ
傘を持つ男が濡れる甘の恋　五　月
甲子園客が五千じゃ波乗れず　(入)修　平
閑古鳥鳴きくたびれて昼の酒　紀　恵
ボランティア昼食をとる暇もない　柳　明
看護士はさばさば激務こなしてく　厚　江
荒波に耐えた若さよ今一度　紀　華
そろそろとコロナ明けへと準備せな　正　和
GoToが暇な私をかきたてる　こみつ
一言がすぎ感情を波立てる　美　籠

マスクして妻は美人の仲間入り　久仁雄
国民は犬かゴーとかステイとか　かずお
荒波にイカ釣り舟の灯が揺れる　真桜子
リハビリにエールを送る蝉しぐれ　(谷)修平
さばさばとしていた友が背で泣く　正彦
ステイホームああ夕刊はまだかいな　耕治
お隣から今朝もキュウリとプチトマト　勝弘
海へ来て波と相談する余生　宏造
指先であなたまるごと削除する　雅美

ほたる川柳同好会(大阪)水野　黒兎報

残る日の劇楽しんで生きようか　桂子
脇役に徹して母は喜々と生き　純子
GoToは喜劇かみんなドタバタと　黒兎
半沢直樹裏切りが肝盛り上がる　一弥
ピンコロリの劇的最期ボクの夢　堅坊
私にもコロナワクチン当たるかな　春代
反射的防犯カメラ見てピース　奈津子
絵手紙の短い便り母の愛　郁子
短いが私の足はよく動く　正子
愛想ない短いメール息子から　順子
短調の曲に心も引き締まる　則彦

川柳塔さかい(大阪)　内藤　憲彦報

吐いた嘘一つひとつの抱く負い目　敏治
買い占めたマスク余っている負い目　和夫
親不孝だったわたしに遺産分け　ばっは
借金は負い目の専売特許です　光雄
わが容姿負い目はあれど納税者　敬子
失業の足の遠のく妻の里　みつ江
考えろ突き離すのも親心　蕉子
経済と自粛厳しい綱渡り　満知子
前を見ろ笑っていろと師の言葉　堅坊
厳しい母だった優しい父が居た　扶美代
厳しい夏炎暑にコロナ容赦なく　八千代
コロナ拡大厳しい夏となりました　舞夢
親不孝詫びつつ父の骨拾う　ひろ子
下野しても反骨心は忘れない　いさお
骨抜きにされて会議に酒が出る　唯教
これが母白い小さい骨拾う　俶子
無視という神が与えた罰ゲーム　雅美
遺族らの飯の合間に骨にされ　時雄
絵手紙の金魚の厳暑見舞状　みつこ
子育ては厳し過ぎても甘くても　としお
できるものならどうぞと妻に無視される　憲彦
コロナ禍に医療現場の使命感　志津子
うんうんとやんわり急所はずされて　輝子
二番目では駄目なんですという答え　ゆみ子
一喝より黙を貫く父でした　美津子
焼野原駆けた記憶がまだ癒えぬ　冨美子
言いたい事沢山あるがこらえてる　朝子
痛い目を沢山越えて根性出来　五月

憲

イソップの譬え話が心打つ　勝弘
いけませんたらいまわしは困ります　さくら
言い訳の度に空しさ堪えている　妙子
射るような大暑が似合う氷旗　満作
生きざまを尋ね歩いて古稀になる　雅明
意欲持て大志抱けと子に発破　玄也

城北川柳会(大阪)　近藤　正報

もたもたへ嘴はさむお節介　野鶴
良心が安請け合いをしてしまう　廣子
初夏の風乙女の乳房丸くなる　郁夫
休日を味わいたくて仕事する　正彦
繁る草いつもきらわれ忘れられ　弘委智
黒い雨やっと届いた民の声　一歩
夏の夕草引き難儀蚊の餌食　福貴子
良心的と言われ仮面外せない　万紗子
一生無休です勤勉な鼓動　満知子
うれしいな生命線が伸びてきた　峰子
軒先にいつどこからかすみれ草　榮子
良心の呵責に苦悩する凡夫　克己
もたもたも楽しからずや支え合い　捷二
良心が咲かせる美しい笑顔　朝子
心ない言葉を吐いた胸痛む　賢子
良心のほどを見ているシュレッダー　堅坊
良心の欠片を踏んでゆく都会　星雨
なあ妻よいまさら好きとか嫌いとか　亜成
舞い終えて羽根を休める終電車　志華子
よくぞまあ年中無休酒の虫　直樹
永田町向くと血圧はね上がる　修
おっちゃんが小銭を探すレジの前　和夫
ややこしい親爺残して母は逝く　五月
早早に眠り早早五時に起きる　ルイ子
終戦の不眠不休で今がある　信子

米中のバトルに触発の憂い　満作
阿吽でも修羅場があった五十年　宣子
ポカばかり続き年寄り自覚する　かずお
菜園に休み休みの雀の子　麗
プロ試合勝たねばならぬ不文律　肇
休みない五臓六腑ありがとう　杁香
GoTOはコロナ蔓延さす愚策　博
相談すれば外科医は切りたがり　俊雄
掛け声をかけな動けん歳になり　勝弘
遺書胸に改ざん指示の罪を問う　正

西宮北口川柳会（兵庫）　緒方美津子報

ふるさとの駅はいつでも暖かい　いわゐ
絞れない忍者コロナは目に見えぬ　盛夫
二人送って一人迎える春の駅　淳
駅を出てここにも銀座串カツ屋　哲子
絞ったら高倉健かと間違われ　武彦
タオル振り声振り絞り救助待つ　哲男
移りゆく一駅ごとにある匂　恭子
舞い降りる言葉をじっと待っている　ひとみ
故郷の駅君のかわりに赤とんぼ　廣光
親のへとへとを見て結婚せぬという　洋次郎
晴れやかな結婚式もオンライン　りこ
そうですよ僕は頑なヒト科です　勝弘
ジムで絞った汗より多く酒を飲む　富次
へとへとの男に冷えたビール効く　正和
妻の愚痴的を射るからより疲れ　弘委智
融通の効かない頭持ち歩く　千代
事実は事実ひん曲げたくはありません　光久

あの日から落ちぬと決めた桐一葉　真桜子
頑なボクを溶かした君の笑み　堅坊
ステイホーム今日も朝から孫が来る　利子
へとへとになるまで愚痴を聞かされる　和宏
頑な名工が彫る日本の美　野鶴
勝利に酔う六甲おろし響く駅　弘子
黙祷に暑いあの日が蘇る　野薫
恩一つ返しただろか墓洗う　千賀子
へとへとに疲れる程の仕事無く　伸
元気でね駅はお別れするところ　(清)弘子
提出句やっと絞れて祈るのみ　邦男
ルノアールの女痩せては絵にならず　俊雄
徒は組まず信念変えず乱捨てる　正彦
改札を冒険心が駆け抜ける　宣子
乙姫様は一人だけさあどの子かな　由美
ディズニーの帰りは背で子が眠る　一徳
心変りせぬ人多しトラファン　美津子

六甲川柳会（兵庫）　糀谷　和郎報

鈴虫の声が恋しい熱帯夜　崇史
鈴が鳴るコロナ去ったという合図　公輔
煩悩の数だけ続く鈴の旅　武彦
サンダルの鈴の音涙初歩き　(磯)洋一
仏壇の菓子失敬に鈴一つ　狸月
お賽銭少額ですとそっと鈴　恭子
呼鈴に朝寝のパジャマお留守です　美穂
鍵の鈴鳴らさぬように午前様　利子
鈴の音を頼り見事なゴールイン　美恵子
鈴やかなセールトークに釣られそう　芳江

老い一人ドラマ演じる幕を開け　弘華
オイオマエのドラマが続く五十年　利恵子
自粛中何もドラマは起こらない　順子
父が逝きドラマは続く遺産分け　憲三
ドラマより悲しい拉致の子を抱けず　哲男
樹木葬やがて高木いい眺め　弘
優しさがやがて彼女の心射る　正彦
娘っ子悪女予感のねだりよう　ひろし
指パッチン次第に増えてジャズになる　博
芋焼酎好きで植えてる芋の苗　和郎
もう四時だ我慢してます生ビール　勝弘
乾杯が終わればやがて無礼講　正和
ハミングがやがて輪になり歌になり　千賀子
面白くやがて悲しい弔辞の句　和宏
火の匂いさせて熟女の帰宅便　真桜子
国の為南の海に散った父　正美
精一杯咲けばきれいに散ってゆく　洋次郎
泣かないでその花びらは私です　ひとみ
逝く時は皆でバンザイしておくれ　盛夫
我が没句ヒョンな所でめぐり合い　克美
肩腰と痛む家内をさすってる　義明
石ころ一つ侮れぬ老いの足　美津子
足湯してちょっと女を出してみる　道子
何んたって妻の笑顔が世界一　廣光
土壇場でいつも役立つ妻の知恵　光久

長　柳　会（大阪）　辻村　ヒロ報

歳月が互いに車輪かばい合う　ヒロ
苦戦中考えあぐね石を蹴る　洋二

足腰を鍛え直して三途川　正博
この夏は熱中症とコロナ症　規之
マスクすれば笑顔美人は値を下げる　たけし
コロナ禍でマスクしてたら熱中症　隆明
コロナ禍で予約も出来ぬコンサート　ゆき
健さんに感化を受けてポッポ屋に　敬二
沈んでも臺をつかんで這い上がる　登美子
溺れてる庶民にわらが届かない　正美
酒酒酒溺れた日びを悔いている　幸子
ローソクの灯に息切れの誕生日　ふみ
七日間ジャンジャン鳴いてコロリ蝉　淳司
背に肩に生命の重み宮参り　孝代
収穫祭地産地消の村起し　隆彦
仲の良い夫婦と見えてすきま風　靖博
百七十歳妻と二人の縄電車　一男
目と目とで交わすほのぼの老い二人　千代
生けとし生けるみんな綺麗でみんな好き　直樹
まっすぐの目線に嘘は通じない　孝
お誘いはさっぱりモカはほろ苦く　和子
あれこれと免許返納悩む日々　光弘

川柳藤井寺（大阪）　太田扶美代報

手鏡に亡母の明日もあったはず　喜代子
ダイヤより母の形見のガラス玉　光男
想い出のグラスかたむけブルーゾーン　絹子
夫婦かなジュエリー選ぶあの二人　みつこ
その辺でやめとき呂律怪しいで　まつお
恋人よガラス破って逢いに来い　いさお
魑魅魍魎の怪しさがある我が心　シマ子
どっちとつかぬ返事だ作戦か　ばっは
刑事にも吠える賢い犬である　進
何かある饒舌すぎる目をそらす　婦美枝
出張だと妻には言ってきたけれど　美代子
曇りガラス拭けどその先見えぬ愛　一文
デビ夫人皺もなければ染みもない　フジ子
モザイクをかけて本性見せぬ人　みつ江
この世では怪しい人が多すぎる　勝弘
怪しげな人に本音で話せない　瑠美子
コロナ禍で怪しい薬出まわりそう　芳子
怪しいな御託並べてばかりいる　香代子
渡らねばならぬガラスの橋もある　六点
被爆の背中ガラス破片が突き刺さり　一歩
老妻が急に香水つけ出した　ひろ子
青い空見たくて磨く窓ガラス　俶子
口ヒゲと顎ヒゲひそひそ話し合う　久仁雄
仕事だと出掛ける人のハイテンション　ちづる
三人で一人を囲むスリだろう　清
飾り棚バカラグラスを真ン中に　かずお
怪しい人は怪しい仕草などしない　ゆみ子
オレオレサギ大阪弁がぎこちない　扶美代

岸和田川柳会（大阪）　石田ひろ子報

火星でも仕事が出来るテレワーク　万彩
宇宙人家にいてます孫五人　規予子
ひと刷毛の浮き雲心故郷へ　みつ江
宇宙へのロマン鉄腕アトムから　英夫
宇宙ゴミルンバもさすが取り切れず　繁
禅寺の枯山水の小宇宙　浩子
雑踏にいるかもしれぬ宇宙人　和美
ひと言が多くていつも浮いている　いさお
コロナ禍の外食代が浮いてます　信子
場違いの服装で浮く熱帯魚　珠子
正論を吐いた会議でひとり浮く　玄也
浮き沈み楽しみながら細い道　はこべ
目立っても浮いてもアカン隣組　恵子
久しぶり句会参加に浮き浮きと　一歩
いつからか妻の浮輪にしがみつく　彦弘
へり浮いて屋根の被災者吊り上げる　義泰
言い訳に困り浮いてる昼の月　常男
浮く流れ信じて今は闇にいる　ダン吉
プラゴミの浮かせた海の悲鳴聞く　ひろ子
答弁がいつも長くて逃げる安倍　清
我が一生コロナ騒ぎは一瞬よ　笑司
盆踊り花火も無しか長い夜　律雄
年金の支給日までの長い日々　喜代志
蝉時雨降らせるまでの穴暮らし　信二
要するに何なの前置きが長い　ふさゑ
夭折の友よ私はまだここに　恭子
リモートで飲み会つづく長い夜　香代
巣ごもりでやっと長編ものにする　明子
黒マスクなんかセンスが良く見えぬ　秀夫
センスいい上に努力の聡太君　康信
車椅子だけどおしゃれなハイヒール　保州
自然体で生きて光っているセンス　愿
三歳児センスの良さがかいま見え　隆昭
はや忌明け妻は宇宙のどのあたり　和子
いい事があってスキップして帰る　穏夫

句会名	日時と題	会場と投句先
ほたる川柳同好会	13日(火) 13時30分締切 コンビニ・話す・さすが	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール蛍池　蛍池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曽根2－4－1　水野黒兎
川柳塔さかい	13日(火)投句締切 くどい・脱ぐ・神 折句:く・さ・つ	投句句会に変更
川柳あまがさき	13日(火) 14時締切 ポーズ・爪・まあまあ・自由吟	尼崎市女性センター・トレピエ　2階 阪急武庫之荘駅南へ5分 〒661-0953 尼崎市東園田町3－49－5　藤井宏造
川柳塔みちのく	17日(土) 17時締切 船・響く・体裁	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」℡0172-32-2591 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛　℡0172-36-8605
川柳ねやがわ	誌上句会に(20日締切) 席題・借りる・判決・医者 ぽつぽつ・自由吟	〒572-0063 寝屋川市春日町9－9　高田博泉
川柳藤井寺	18日(日) 14時締切 カフェオレ・じれる・席題共選	藤井寺市生涯学習センター・しゅらホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5－8－20－303 鈴木いさお
豊中もくせい川柳会	19日(月) 13時50分締切 箱・立つ・涼しい・自由吟	豊中市立中央公民館　3F 阪急宝塚線「曽根」駅　徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5－26　初代正彦
川柳さんだ	休会	〒669-1545 三田市狭間が丘5－10－19　谷　祐康
川柳たちばな	16日(金) 13時45分締切 席題・ひょっこり・もむ・自由吟	立花北生涯学習プラザ(尼崎市塚口町3-39-7) 06-6422-6741 阪急塚口駅北へ10分 〒661-0953 尼崎市東園田町3－49－5　藤井宏造
川柳塔すみよし	24日(土) 14時15分締切 井・昇る・パワハラ	住吉区役所内　住吉公民館　2F 〒580-0026 松原市天美我堂3－130－2－404 森松まつお
和歌山三幸川柳会	24日(土) 13時15分締切 味・読む・じっくり	和歌山商工会議所　4階 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
はびきの市民川柳会	25日(日) 14時締切 土・泳ぐ・ぼんやり・席題	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車　北へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8　徳山みつこ
川柳ふうもん吟社	25日(日) 13時から 自由吟・やれやれ・継ぎ目・工面 席題	県民ふれあい会館　4F　鳥取市扇町21 〒689-0202 鳥取市美萩野2－171－3　中村金祥

★上記は年初計画です。諸般の事情上、詳細は各柳社にお問い合わせください。

10月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　ら	投句句会 9月30日で締切りました	〒633-0054 桜井市阿部787　安土理恵
倉　吉 川柳会	3日(土) 14時締切 託す・煙・ぐるぐる・席題	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072－17 谷口次男
川柳塔 まつえ 吟　社	3日(土) 13時30分締切 まろやか・味噌・無茶 「麺・麺類」	松江市雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222－1　相見柳歩
岸和田 川柳会	8日(木)必着　誌上句会 誘う・生きる・命・扉	〒596-0076 岸和田市野田町2－13－19　中岡香代
あかつき 川柳会	9日(金) 14時締切 身勝手・黄・蒟蒻・時事吟	大阪保育運動センター（新谷町第1ビル2F） メトロ「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒543-0013 大阪市天王寺区3－6　木村ビル2階 あかつき川柳会
川柳大阪	休会	〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
城　北 川柳会	10日(土) 14時締切 小さい・まあいいか・運命 自由吟	旭区老人福祉センター　3F メトロ谷町線「千林大宮」駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14　江島谷勝弘
川　柳 とんだばやし 富柳会	10日(土) 14時締切 港・スキル	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0064　富田林市不動ヶ丘8-31　山野寿之
六　甲 川柳会	10日(土) 14時締切 席題・裏・残念・並ぶ 自由吟	六甲道勤労市民センター　5階 E室 JR「六甲道」駅南隣　メイン六甲内 〒657-0011 神戸市灘区鶴甲4－11－11　上田和宏
川柳塔 打　吹	10日(土) 13時30分締切 露・迷う・ばたばた・席題	倉吉市上灘町9　上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637－3　牧野芳光 方 川柳塔打吹　事務局
八尾市民 川柳会	11日(日) 14時締切 夜食・ひやひや・好き・雑詠	八尾市安中町3－5－1　渋川・安中集会所 JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2－1－7　土田欣之
川柳塔 わかやま 吟　社	11日(日) 14時10分締切 兼　題＝五輪・回・アニメ 課題吟＝人間	和歌山商工会議所　4階　和歌山市西汀丁36 兼　題　〒649-6253 岩出市紀泉台366　藤原ほのか 課題吟　〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 楽原道夫
南大阪 川柳会	投句句会 もじもじ・和風・並ぶ・フランス 雑詠	〒569-1124 高槻市南芥川町9-28-901　松岡　篤
西宮北口 川柳会	12日(月) 14時締切 出る・トーン・ほこほこ・自由吟	西宮市立中央公民館　6F　講堂 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにしのみや」 〒663-8141 西宮市高須町2-1-31-830　福田正彦

編集後記

★横丁の夕日の中の紙芝居　薫風

★新型コロナウイルス感染症という見えない敵に怯え、息を潜めて暮らして8ケ月が過ぎた。お陰で毎朝ワールドニュースを観る習慣がついた。誰とも言葉を交わさない日が続いている。在宅編集の合間を慰めてくれるのは物言わぬ金魚たちだ。そのうちの1匹がある朝水槽の底に沈んでいた。

★金魚は全部で18匹。うち1匹は病気で尾ひれも背びれもなくなり、芋虫のような状態で、よれよれと生きて無事3歳になったばかり。その子が熱中症にやられたらしい。水槽に保冷剤をいれるやら、クーラーをガンガンかけるやら大わらわだったが、3時間後に無事回復した。水中の金魚でさえ熱中症になる。ましてヒトにおいておや。皆さま、熱中症にもご注意ください。

★毎月全国からたくさんの句報が送られてくるが、そのなかでも異色は島田駱舟さん主宰の「印象吟句会　銀河」だろう。宿題はすべてカラー写真などでのイメージ吟である。句会出席者よりも投句者が断然多い。8月の誌上句会には115名の参加者があった。会報誌は14頁とコンパクトながらエッセイあり、対談あり、柳論あり、提言あり、作品もさることながら読み物が楽しい。こういう時代だからこそ1冊の柳誌を丁寧に読みたい。

★事務所を預かってくださっていた山岡冨美子さん、原田すみ子さんが退職された。新しく大阪在住の宇都満知子さん、内田志津子さんがお手伝いをしてくださる。森松まつおさんと3人体制で事務所の業務に当たる。コロナ感染症拡大第2波の中、ありがたいことです。冨美子さん、すみ子さん長い間お疲れさまでした。

（朱夏）

□いま嵌っているのは時代物小説作家、坂岡真の「鬼役」（光文社文庫）シリーズである。主人公は徳川将軍の御毒見役だが、裏の顔は、居合の達人であり、幕臣の不正を断つ暗殺行を務めている人物である。なぜ時代物小説に嵌るか、それは単純である。悪人たちを斬りまくる爽快さである。

□食欲の秋がやって来た。「鬼役」が将軍のランチを毒味する描写がある。一の膳　焼き物は初鮭と鯖、生ものは細魚、鮑と結び昆布、くしこ（なまこ）と塩辛、大蕪と銀杏、辣韮と葉生姜。二の膳焼き物は鱚の塩焼と付け焼き・鴨の炙り肉、烏賊と黒くわい、剥き蛤、塩わらび、冬瓜、蓮根と柿の白和え、蒲鉾と玉子焼き、からすみ。それに、お酒は、灘生一本白鶴。ご飯は、美濃米。という豪勢なランチを食していたのであります。高級料理店ならどのくらいの額になるだろうか。

（勝弘）

ひとこと

いのちある句

嫁さんの出す料理はいつも「美味しい美味しい」と戴いている。それはそれで「作ってもいつも同じ感想では精がない」という。たまに「何が食べたい」と聴かれるが、食べたいものは見つからない。

この調子で何事も対処する癖が着いてしまっていたのか、川柳塔の句も「上手な句ですね」と見てしまうだけで、私には川柳上達の見込みはない。時折本当に渇望する事すら見失うのである。

作句目的の為、川柳『を』学ぶ姿勢で句を見ていても、適当な感想しか出てこないのではないだろうか。川柳『に』学ぶ姿勢は、私の生き方に力をくれる。「いのち」をくれるのである。

「川柳『に』学ぶ」の姿勢から私の句に対する考え方は、上手下手ではなく、いかに生きるべきかと示唆するような友として見ることが出来るようになった。人生の渇望すべき川柳は「いのちある句」との出会いなのかも知れない。

（西村　哲夫）

お知らせ

第26回川柳塔まつりは誌上大会として開催、9月30日締切りました。発表は12月号です。

新型コロナウイルス感染症拡大は第二波が懸念されております。

今しばらく心を引き締め、三密を避け、マスク、手洗いを心掛けご安全にお過ごしください。

作品募集

12月号発表（10月15日締切）

川柳塔（8句）　小島蘭幸選
水煙抄（8句）　西出楓楽選
愛染帖（2句）　新家完司選
檸檬抄「太い」（2句）　石橋芳山　古今堂蕉子　共選
インスピレーション・ナビ（2句）　大西泰世選
一路集（2句）　坂本蜂朗選
初歩教室「あーあ」　福西茶子選
初歩教室「星」（3句）　高瀬霜石担当

初歩教室「星」は1月号発表

本社11月句会は誌上大会です
詳細は川柳塔10月号96頁ご参照
投句締切日10月31日、発表1月号
兼題「ショック」「探す」「大人」「風」「単純」

1月号
檸檬抄「覚悟」
一路集「自信」「ベル」
初歩教室「コピー」

川柳塔柳箋

3冊　送料共 1,000円

事務所あてお申し込み下さい。

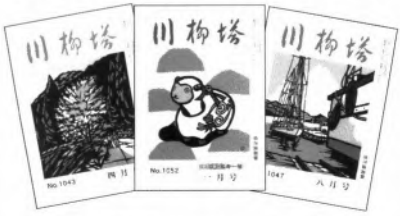
定価 八百円（送料100円）
半年分 五千円（送料共）
一年分 九千八百円（同）

二〇二〇年（令和二年）十月一日発行

発行人　小島和幸
編集人　木本朱夏
印刷所　美研アート

〒543-0052
大阪市天王寺区大道一―一四―一七
花野ビル201号室
発行所　川柳塔社
電話（〇六）六七七九―三四九〇番
振替〇〇九八〇―四―二九八四七九番

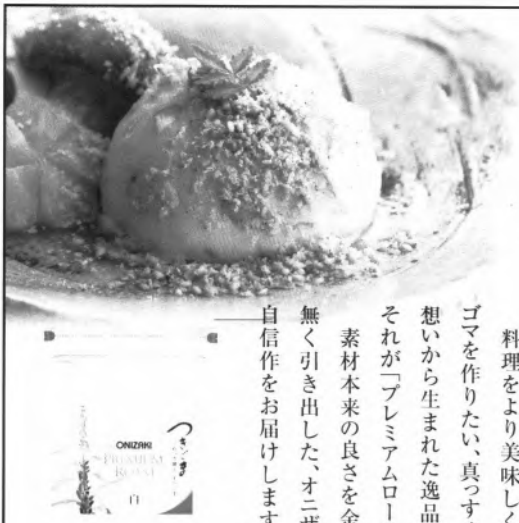
川柳・俳句・エッセイ・小説
新聞・広告・ポスター・伝票等
あなたの思いをかたちにします。



美研アート
〒531-0061 大阪市北区長柄西1-1-10
TEL (06) 4800−3018
FAX (06) 4800−3028
E-mail：bikenart@ea.mbn.or.jp

令和二年 十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻一二二号 川柳塔 十月号
定価 八百円（送料 百円）

オニザキの プレミアムロースト
つきごま
杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、香ばしい薫り。舌と記憶にしっかりと残る、深いコク。
料理をより美味しくするゴマを作りたい、真っすぐな想いから生まれた逸品。
それが「プレミアムロースト」。
素材本来の良さを余すこと無く引き出した、オニザキの自信作をお届けします。

株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL（フリーダイアル）0120-30-5050

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院

消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設

大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861
http://www.yukawa.or.jp